

生命のドラマ 法華経

池田大作 監修
原島 嵩 著



生命のドラマ

法華經

池田大作 監修

原島 嵩 著

監修者のことば

——原島君の「法華経」を推す

原島君は、その幼時からよく知っている私の大事な友である。少年時代から、仏法哲学に親しみ、すぐれた素質に加え、真剣なる研鑽は著しいものがあつた。とくに、私が学生部の中から選抜して未来を託す人材育成のために行なつた「御義口伝」の講義では、五年間を通して受講者の要となり、「後生畏るべし」である、私もひそかに喜び、期待してきた。

これまでも、彼は幾つかの著書を発表しているが、今度は、釈尊一代の仏法の最高峰であり、北伝仏教の真髄となつてきた「法華経」に取り組んでいると聞き、その完成を心から楽しみにしてきた。

このほど脱稿の運びとなり、ぜひ目を通してほしいということで、求めに応じて、喜んで監修役を引き受けた。一読して、彼の成長めざましいものがあることを知り、うれしい限りである。

いわゆる八万法蔵はちまんほうぞうというように、釈尊の説法に帰せられる仏教經典は膨大ぼうだいな分量にのぼる。そのなかでも、インドから中国、中国から日本へと流布るふしてきた北伝仏教において、法華經は、独特の地位を占めてきた。

中国でも、日本でも、正統学派の根本經典としたのが法華經であり、したがって、法華經以外の經典を最高とする宗派においても、その經典を最高位と表示するにさいしては、必ず法華經を引き合いに出さなくてはならなかったといつてよい。

多くの王侯貴族が一国繁榮よりどころの依所として法華經尊重を立て、また、女人成仏にょにんじょうぶつを説いた唯一の經として、女性の信仰の中核ともなった。とくに、鳩摩羅什くまらじゆうによる漢訳「妙法蓮華經」は、珠玉の名訳といわれ、庶民の間でも広く崇重すうちようされたようである。

しかしながら、では法華經は、いったい何を説いたものかとなると、必ずしも正しく理解されたとはいえなかった。この点については、正統学派でも、最高の学僧の間にのみ伝えられる秘法とされ、一般への公開は嚴誠げんかいされてきた。正統学の隆盛が、簇生そうせいする異宗によって短命に終わっ

たのも、ここに原因があると、私は見たい。

法華經に説かれているところは、ある意味では奇想天外ですらある。それが西方極樂淨土とい
った、この世ならぬ舞台で展開されたものなら、まだしも理解しやすい。だが、現実に、この世
で、壮大な宝塔ほうとうが湧現ゆげんしたり、大地から無數の大菩薩だいぼさつが躍り出おどたりするのである。全く理解しが
たく、真偽を疑いたくなるのも無理はない。

しかし、この理解しがたく信じがたい法華經の説相せつそうは、実は、ある理解しがたく信じがたい真
理をあらわしているともいわれるのだ。否いな、その真理を誤りなく示すために、そうする以外にな
かったともいえる。その真理とは、人間の真理、生命の真理であることに思い到るとき、謎なぞの一
切は解ける。

実は、この謎の一切の解明は、七百年前、日蓮大聖人にちれんだいしやうにんによってなされていたのであるが、時代
が遷りうつり、言葉や思考法が変わるにつれて、いつしか、その真理も見失われようとしていた。これ
に対して、現代の言葉と思考法で、独自の思索から、再び現代に蘇よみがえらせたのが創価学会第二代
会長、私の恩師、戸田城聖先生とだじやうせいであつたと、私は信ずる。

原島君が、このたび世に問う本書は、漢訳法華經の原典をふまえ、日蓮大聖人の教示、戸田前
会長の思索を基盤に、現代青年の感覚をもって、これを見事に生き返らせている。もとより、専

門的学究書ではない。本来、経典は学問的探究の対象ではない。それはそれで意味はあるにしても、経典のもつ生き生きとした生命はこぼれ落ちてしまうであろう。

その意味で、本書は、法華経のもつ生の躍動と、その深い真理を、現代人の心に映し出してくれるものと期待している。

昭和四十九年十一月

創価学会会長

池田 大作

監修者のことば……………	3
--------------	---

序章 法華經 ほけきょう との出会い……………	15
--	----

私が魅了された“生命の世界”……………	17
---------------------	----

戸田先生 とだ から講義された初めての法華經……………	17
--	----

法華經は生活の中に息づいている……………	20
----------------------	----

忘れ得ぬ八月三十一日……………	25
-----------------	----

「御義口伝」 おんぎくでん 講義の興奮……………	25
---	----

“南無妙法蓮華經” なむみょうほうれんげきょう とは“生命”……………	34
--	----

「宇宙即我」 そくわれ の原理を説く……………	34
--	----

第一章 法華經とは何か……………	39
------------------	----

“生命”の秘密を明かす唯一の経文……………41

永遠のナゾを解決するための人生遍歴……………41

生命とはこの世だけの存在か……………43

仏法の“密林”をどう踏破するか……………46

トインビー「無意識の奥にある人類共通の生命」……………46

「あらゆる宇宙の実在が一個の人間生命にある」……………48

仏教における法華経の位置……………54

「コーヒークリープ」……………54

数々の譬喩と事例で生命の宇宙を説く……………56

“生命讃歌”の壮大なドラマ……………59

全体の構成は二十八品(章)から成る……………59

数十万の衆生が狭い靈鷲山に集まった意味——序品……………65

仏の永遠の存在性を明かした——寿量品……………70

「諸経の中の王」	73
----------	----

事実か幻想か	73
--------	----

「正き事はわずかなり」	75
-------------	----

第二章 生命の宝のありかを求めて	81
------------------	----

法華経の読み方	83
---------	----

遅しく生きよへ煩惱即菩提	85
--------------	----

絶世の美女も死んでしまえば白骨	85
煩惱はおおいに燃やすべきである	88

束縛されない自己の発見へ開三頭一	93
------------------	----

人間生活には法則が大事	93
究極は仏の力を借りず、自力で法の悟りを開け	96

大地の底から出現した菩薩たちへ地涌の菩薩・……………103

仏法流布を指導する四菩薩……………103

私たちの中にも菩薩はいる……………108

生命はこの世限りかへ寿命品に説く永遠の生命……………111

不死を求めた古代の勇者ギルガメシュ……………111

死の影にとらえられた私……………113

「寿命品」によつて「死」を新しく見直す……………116

死後の生命へ寿命品の意義……………120

永遠の生命は、仏法の真髄……………120

物理学と哲学にみる死の世界……………122

大宇宙は、一個の偉大な生命体……………124

現実を変革する哲理へ娑婆即寂光土……………133

人間革命に必要な二つの作業段階……………136

大乘仏法は、生きて生きぬく教えである……………	137
生命の尊さの自覚と実践 へ不輕菩薩 へ……………	140
“不輕”とは「輕んぜず」生命の尊さの自覚……………	141
非難中傷をする相手をも救う不輕菩薩……………	142
どんな人間の中にも仏性がある……………	143
女性解放の先駆け へ女人成仏 へ……………	146
女性は成仏できないというが……………	146
八歳の娘「竜女」が即座に悟りを得た意味……………	148
女性だからこそわかる多くの苦しみ……………	150
幸せは自分の手で克ちとろう へ法華經の功德 へ……………	153
“功德”“利益”は、自分の力で切り開くもの……………	153
功德の一つ「六根清淨」とは「生命淨化」のこと……………	156
仏法では“仏”を生命の外には求めない……………	158

第三章 人生の扉を開く鍵とびら かぎ

161

人間としてあるべき七つの条件へ多宝の塔たほうのとうへ

163

「七宝の塔しつぽうのとう」は、仏界の尊さを説いたもの

163

「あなた自身の生命が、宝塔たうたうなのだ」

167

日常生活に不可欠の七つの大乘戒だいじようかい

168

人間としての姿勢へ六波羅蜜具足ろくはらみつぐそくへ

173

「異常」に慣れる恐ろしさ

173

慈悲心じひしん、生命力、忍耐を持て

178

精進し、内省し、深き知恵を学べ

181

人間教育の規範へ開示悟入かいじごにゆうへ

184

「仏ぼつ」とは、特別の存在ではない

186

「開示悟入」の「開く」が、一切の出发点

187

真の幸福は胸中にあるへ衣裏縫宝珠	えり ほうほうじゆ	191
私たち凡夫の気づかない「無価の宝珠」	むげ ほうじゆ	191
幸、不幸も自身の内にある「宝」しだい		193
厭世主義か楽天主義かへ衆生所遊樂	えんせい しゆじようしよゆうらく	196
“恋の逃避行”は、仏道修行の逃避に通じる		196
難題を一つ一つ克服するのが真の「遊樂」	ゆうらく	198
毒藥におかされた現代人へ譬如良医	ひ によろうい	204
現代の混乱は「宗教的な混迷」——ポールディング博士		204
仏の「方便」とは、衆生を救うためにのみ使う	ほうべん	206
生命の鏡を磨くへ浄明鏡の譬え	みが じようみようきよう たと	212
鏡は法華経、「真実」と「自身」を映す	うつ	212
「自身の生命こそ、本来、仏の命である」		214
戸田前会長——「偉大なる凡夫」になれ	ほんふ	217

無限に広がる人間の生命へ妙音・観音みようおん かんのおん 219

人間の可能性を暗示する妙音・観音菩薩 221

「正義によって立て、汝の力二倍せん」なんじ 223

十種の神力へ仏法の神力の真意じんりき 226

娑婆世界にあらわれる十神力じゅうじんりき 226

神力は人間の偉大な力を意味する 228

家庭を考えるへ妙莊嚴王の話みようしょうごんのう 235

父王の前で神通変化を現じた二人の王子じんずう 235

妙莊嚴王一家は現代の家庭像でもある 240

あとがき 245

監修者・著者略歴 249

本文カット 上矢 津かみや しん

表紙カバーの図案Ⅱ「生命の樹」(壁掛の部分)小学館「ジャポニカ」より

序章

法華經ほけきょうとの出会い

序章

法華經ほけきょうとの出会い

私が魅了された『生命の世界』

戸田先生から講義された初めての法華經

私は、思わず心の中でうなつた。昭和三十年ごろと思いますが、私は、毎週の日曜日に、必ずといってよいくらい、豊島公会堂（東京都豊島区）に出かけていきました。そこで、戸田城聖先生（創価学会前会長）が、直接、「法華經」の要品（重要な經文）方便品、壽量品の講義をされていたからです。それが、じつに明快な、生活に即したものであったのです。私は、その日が、いつも待ちどおしくてなりませんでした。

一級講義と名づけられていましたから、もっとも初歩の人にわかりやすく話されたことでもあったのでしょうが、その名講義は、まさしく、天馬が天空を自在に翔けめぐるような、自由闊達なものでした。今でも、私の耳にはその声が聞こえてくるようです。

ちょうど壽量品の「方便現涅槃」のところの講義だったと思います。

「この方便現涅槃ですが、日蓮大聖人は、生死の理を人々に示さんがために、涅槃を現ずると



おっしゃっております。われわれが死ぬということは方便なのであります。……だんだんとおじいさん、おばあさんになります。そして、この世の中で生存する生命力が、だんだんと衰えてきて死ななければなりません。……われわれが死なないとしたら、大變に困ることが起こるでしょう。死ぬところにいいところがあります」

「死ぬところにいいところがあります」——なるほどなあ、と私は思いました。たしかに、人間がもし死なないとすれば、地球上に人口があふれ、みんな年寄りばかりになって、食物もなくなり、いつのまにか、ぎっしりつまって、身動きできなくなってしまう。今度は、どんなに死にたい、死なせたいと思っても、死なないんだからしょうがない。まだ少年期の私には「死ぬところにいいところがあります」と言った戸田先生の一言に、死という重大問題を、きわめて肯定的に、また大胆にとらえている、ゆうゆうとした境地が伝わってきて、驚嘆したものです。また、その次の内容が興味をひきました。

「おじいさん、おばあさんになって死んで、大宇宙の生命のなかに、われわれの生命が溶けこんでしまします。溶けこむが、靈魂ではありません。『我』^がというものが存在するのであります」「大宇宙の生命のなかに、われわれの生命が溶けこむ」——私の心に、その言葉が、強い波紋を描いて飛び込んできました。

法華經、なканずく日蓮大聖人の仏法では、生死の問題を、生命の變化相としてとらえています。生命が顕在化した場合は、生であり、大宇宙の中に冥伏^{みようふく}（本質的には実在するが、現実には顕わ^{あら}

れていない状態)していくのが、死ということなのです。そして、それが永遠につづいていくと説いているのです。

しかし、私には、一つの疑問が湧いてきました。それは、大宇宙に溶け込む「我」という存在と、靈魂とは、どう違うのかということでした。これは、あとですぐにわかりました。靈魂といったものが肉体から飛びぬけて、どこかに浮いているといった考え方は、仏法では誤りとしているのです。「我」という存在は、宇宙それ自体なのです。こうした問題については、後にまた、テーマとして取りあげていくことにします。

戸田先生の講義はつづきます。

「この我^がが、いろいろな喜びや悲しみを感じるのであります。業^{ごう}を感じると申しまして、その結果は、また娑婆^{しやば}(現実社会のこと)世界に、若々しい生命を持って赤ん坊になって生まれてくるのであります。ただし、生まれ変わるのではありません。

生まれ変わるといふ言葉は、ひじょうにいけないのであります。……生まれ変わるのではなくて、ただつづいただけであります。大宇宙とわれわれの生命とは、即^{そく}一体であります。宇宙というものは、始まった時がありません。終わりもありません。生命も、始まりもなければ終わりもないのです。永遠に生きていくのであります」

戸田先生は、法華経を講義される場合、必ず、文上^{もんじょう}と文底^{もんてい}とに筋道を立てて論をすすめられていききました。

もんじよう
文上というのは、法華經の經文上の、文字どおりの解釈ということですが、これに対して、文底
とは、法華經が、いったい何を説こうとしたのか、という元意がんいから読んでいく立場です。結論か
らいえば、それがことごとく「南無妙法蓮華經」という、生命の究極の実体を明かそうとしたも
のである、というのが、日蓮大聖人の仏法の立場であり、その観点から、生命論として読んでい
くのが、文底ということなのです。

戸田先生は、この文底からの読み方を示したのが、日蓮大聖人の「御義口伝おんぎくでん」であることを強
調していました。あとのこととも関係しますので、ここで若干「御義口伝」のことに触れておき
たいと思います。

法華經は生活の中に息づいている

「御義口伝」は、日蓮大聖人が晩年に身延山みのぶさんにおいて、法華經の要文ようもん（重要な經文）について講義
されたものを、弟子の日興上人にっこうしやうにんが筆録し、大聖人の御允可ごいんか（弟子が正しく理解していることを師が証
明すること）をいただき、後世に伝えられたものです。

日蓮大聖人の法華經の講義は、經文の表面的な内容の展開ではありません。釈迦の説いた法華
經の文をあげ、天台てんだい、妙楽みょうらく（いずれも中国における法華經の正統の大家）の解釈をあげ、その次に「御
義口伝に云く」と、日蓮大聖人の立場からの奥義おうぎが説かれているのです。

ところで、池田先生（創価学会会長）の書かれた『人間革命』（第四巻「秋霜」の章）では、戸田

前会長が、戦後、創価学会再建にあたって、法華經の講義から始めたことに触れ、富士大石寺の御宝蔵の石畳の上で深く懺悔している姿が描かれています。

「戦後五年の月日が流れてしまった。学会は、まだ盤石の基礎から、ほど遠いところにある。何故であろう。私は、昭和二十一年正月、総本山の坊で四人の幹部を相手に、法華經の講義から始めた。」

——それというのも、戦時中のあの弾圧で、教学の未熟さから、同志の退転という煮え湯を吞まされたからだ。この私の方針が間違っていたとは、どうしても思えない。方針は正しかったが、大聖人の仏法を理解させることにおいて、私は誤りを犯したようである。

——『御義口伝』を基にして講義したつもりであったが、受講者はなかなか理解しなかった。

そこで天台の『摩訶止観』（天台が、法華經を基にして生命論の体系を述べた重要な著作）の精密な論理をかりて話すと、よくわかる。勢い受講者が理解したものは、大聖人の法華經ではなくて、いつの間にか天台流の臭味のある法華經になってしまったのだ。（中略）戸田が一身にその罰をうけて、いま翻然と悟ったところのものは『御義口伝』への果てしない郷愁であった。

初代、二代、そして今、広宣流布（仏法を広く流布すること）の本門（ここでは本格的段階の意味）の時来たり、いよいよ大法興隆の力いであるとする時、大聖人の仏法の真髓に直達（ただちに悟り達すること）するために、初めて『御義口伝』からの直道（ただちに悟りに達する道）が開かれたのである。」

ここで「日蓮大聖人」と私たちが呼ぶ理由について、ちょっと触れておきたいと思います。ふつう「上人」^{しょうにん}とか「大師」^{だいし}とか呼ぶのに、日蓮正宗^{しやうしやう}だけが、どうして大聖人というのか、疑問に思われる人もいるでしょうから。

「聖人」というのは、じつは、仏という意味なのです。「大師」とか「上人」というのは、いわば法の継承者といったニュアンスのものです。が、「聖人」とは、開悟^{かいご}の（悟りを開いた）人のことなのです。

日蓮大聖人のことを七百年前、弟子たちは「聖人」と呼んでいました。日蓮大聖人ご自身、当時の弟子たちへの手紙の中で「日蓮は一閻浮提^{いちえんぶだい}（全世界の意）第一の聖人なり」と言われています。

じつは、数ある「聖人」のなかでも最高の「聖人」ということです。その意味を含めて「大聖人」というわけです。また、ちなみに辞典などで調べますと、「大」というのは「はじめ」という意味があり、たとえば「極致」^{きよくち}とか「原初」^{げんしよ}という内容があることがわかります。

私たちは、釈迦に始まる仏法の流れに対し、日蓮大聖人は、それらをふまえつつも、まったく新しい独自の仏法の展開をされたと考えております。その意味から「日蓮大聖人」と呼称し、それを略して「大聖人」ともいったりしますので、ご了解ください。

ところで、戸田先生の講義は、深い生命論の話もありましたが、庶民の生活に息づく、おもしろい話法で、法華経を展開していきました。

たとえば、寿量品に「園林諸堂閣おんりんしやうかく 種種宝莊嚴しゆじゆほうしやうこん」とあります。これは、法華經を持った人の生活は「園林もろもろ 諸の堂閣、種種の宝をもって莊嚴し」ということです。つまり、美しい庭園や林に囲まれ、種々の宝で飾られた邸宅に住むということです。まるで遠い夢のような話です。しかし、戸田先生の手にかかる、たちまち、現実のことになってしまふのです。

「園や林、家や堂閣は種々の宝をもって莊嚴されて（飾られて）おります。このとおり読めば、これはちょっと無理であります。いったい、園だの林だのいっても、玄関さえない家があるのであります。諸の堂閣などといっても、四畳半しかない人々が多いのであります。いくら御本尊を拝おがんだからといっても、すぐ堂閣なんかにはなりません。

しかし、よく読んでみると、諦あきらめる必要はないのであります。住まいに園や林なんかいつでも作れます。どうせ東京の真ん中で、園や林なんか作れるわけがないのでありますから、ミカン箱を買ってきて、そこへ密しきみ（モクレン科の常緑小喬木きやうこく）を一本植えて、脇のほうへ小さいキレイな木を十本か二十本植えて、朝、水をやって楽しめば立派な園林であります。四畳半といえども我が城なりという大確信の上に立って、宝をもって莊嚴する、心の宝をもって莊嚴できるのであります」

なるほど、これならうなずける。当時の私の家と、まったくピッタリで、おもわず噴ふき出してしまいました。戸田先生は、わかりやすい話の中から、結局、生きる姿勢の転換が、法華經の根本精神であることを教えていたのです。

法華経とは、人生であり、生活そのものだった——興味深い話とともに、そこには尽きせぬ人生の味わいというものが感じられたのです。

同じように、「常作衆伎楽」じようさしゆぎがく（つねに衆もろもろの伎楽ぎがくを作しな）ということについても、

『常作衆伎楽』、つねに音楽がなっているというのは、なにもラジオではありません。これはお父さんが帰ってきて『ああ、今日は愉快だったよ、こうだよ』奥さんは『お父さん、きょうは、隣の猫がニャンと鳴いたのよ』坊やは『学校の先生が歩いていたよ』
そうして、一家が笑いさんざめいて暮らせるとすれば、つねに伎楽なを作しているのではないでしようか。

ところが、オヤジが、破れ太鼓みたいな声でドナリ出し、女房がキーキーいって、子どもがオーッと泣く。これは、いい音楽ではありません——会場には、ドッと笑いが渦巻いた。

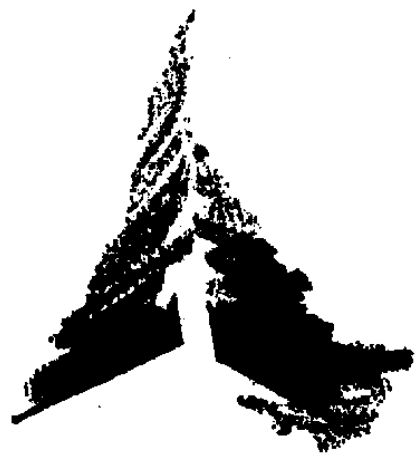
忘れ得ぬ八月三十一日

「御義口伝」講義の興奮

一人が立ちあがり、「御義口伝に云く南無とは梵語なり、此には帰命と云う……」と読みはじめた。ところが、その読み方が、つかえてばかりいて、あまりにもへただったので。私は、自分のことのように内心はらはらしておりました。

忘れもしない、昭和三十七年八月三十一日、池田会長みずから、学生部の幹部に対して「御義口伝」の講義を開始されたのです。私も、そのメンバーの一人でした。

その年、講義の前に、二回ほど池田先生を囲んで、学生部の部長会がもたれました。第二回目の時だったと記憶していますが、私たちから「先生をお迎えして、部長以上で御書の勉強をしたい」とお願いしたのです。先生は即座に「学生部は、御書を通して日蓮大聖人の仏法の奥底を究めていかなければ、学生部の存在価値はないからね。これからは一緒に勉強していこう」と答えられた。



やがて、先生のほうから、「御義口伝」の講義をしてくださるとの話があり、私たちは、小躍りして喜んだものです。同時に、「御義口伝」と聞いて、私自身、一瞬ぎくりとしました。

というのは、「御義口伝」は、日蓮大聖人から日興上人に伝えられた、仏法の極理中の極理と聞いていたからです。

日蓮正宗しやうしゆうにおいても、この「御義口伝」は相伝書そうでんしよであるために、七百年間、誰一人として、講義されていません。したがって、何一つ参考書ありません。私たちは、お手上げの状態で、「もうこれは、先生の講義をうかがうしかない」と、予習を断念してしまっていたのです。

こうして、ついに第一回目の八月三十一日を迎えたのです。一人の人が指名されて、冒頭の「南無妙法蓮華經の事」を読み出したとたん、この安易な受け身だけの、弱々しい私たちの姿勢は、いっぺんにさらけ出されてしまったのです。

先生は、厳しくも、また、かんで含めるように、私たちに、

「諸君たちは、知識は相当あるかもしれないが、御書ごしよという根幹の問題になると、まだひじょうに浅い。諸君たちの御書の読み方では、身口意しんくういの三業さんごう（業は行為ごうゐのことで、身と口と意いの行為ごうゐ）で、この御書をぜんぶ実践しきろうという音調に聞こえない。じつにあさはかです。御書は、經文きやうもんです。暗記するぐらいに、読まなくてはいけない」と言われたのです。

私にとって、終生忘れえぬ言葉となりました。ここに、御書、そして法華經に迫る姿勢の一切が、要約されているからです。

仏法の体内に入っていくには、そこに直接的に迫っていく、生命それ自体の力がなければならぬ。たんに、知識だけで学ぼうとするのは、仏法の周囲をグルグルと徘徊するだけになってしまふ。その意味で、この会長の言葉は、胸にグサリと、突きささってきたのです。

先生の講義は、本格的なものでした。受講生に、法華經の要文の前後、背景、そして「御義口伝」の一通りの解釈をさせ、そのあとで、さまざまな角度から、話をすすめていったのでした。それは、直截、簡明でありました。また、その展開は、時代、社会をふまえつつ、世界的な普遍性をもった、縦横無尽といったものでした。私にとっては、遠くにある一点の光がぐんぐんと光度を増して、矢のように胸を貫いてくるような思いでした。

それからというものの、講義は、原則として一カ月に一回、リズム正しく行なわれていきました。ただ会長が、地方へ、外国へと行かれる機会も多く、また、「御義口伝」(上)で、一回くぎりをつけました。しかし、上と下の講義を合計すると、五年間にわたり、三十数回にもおよぶ全力投球のものでありました。それは、名匠が粒々辛苦して作品を磨きあげていくのにも似た、人材形成の作業だったともいえるでしょう。

いったい、未来をになう若人に、それだけの力を込めて、五年間にもわたり、未来世紀へ哲学を送りゆく指導者が、他にいるだろうか——私は、しみじみと、こんなことを考えたことがあります。

池田会長の見事な解釈

池田会長の講義は、膨大ぼうだいなものとなり、講義録として、上下二巻にまとめられておりますので、今、私は、そのすべてを語るつもりはありませんし、紙幅しふくの関係からもそれはできません。ただ、当時の先生の講義と、その時の感想を思い出しつつ、二、三の点を述べてみたいと思います。

たとえば、法華經じよぼんの序品じよしよこねんに「仏所護念」という言葉があります。そういえば、どこかで聞いた言葉だな、と思う人もいるでしょう。他教団の中で「仏所護念」というのを、仏を「死んだ人」として、先祖を拝めば、自分たちが守られるというのがあります。これは、明らかに日本人の先祖崇拜の心を利用したものです。

かつて戸田先生も、このことについて触れて、「もし、釈迦が、これを聞いたら、怒ることを忘れて、呆然として、しかる後に、大いに噴ふき出すであろう。日蓮大聖人がお聞きになったら、『世も末』と、ただ一言おおせになるにちがいない」と言われていました。

この仏所護念という本当の意味は、「妙法蓮華經さんぜじつぽう」というのは、大乘經だいじようきようであって、菩薩ぼさつを指導する根本の經であり、これをあらゆる仏さん（三世十方の諸仏）が護まもり念じてきた、ということです。

この「護念」について、「御義口伝」では、さまざまな角度から言及されています。最初は、難解な用語が、ズバリと並んでおり、なかなか理解しがたいものでした。

池田先生は、それを見事に現代的に説明しながら講義をされ、なお、私たちの現実生活にも

「護念」というものがあることを、このように付け加えて言われたのです。

「護念」ということは、われわれの通常の生活にも、必ずあるわけです。仏所は別にして、護念ということは、たとえば、学会内においていえば、戸田先生が、次の会長は誰にしようか、と護念していらっしまったわけです」

「それから大学でいえば、そういう教育法ではないと思いますが、大学の優秀な先生が、本当に優秀な弟子として、学生の中で、あの学生はなんとか立派に仕上げて博士にしよう、大成させたい、こういう心をもって、その人を導いている姿は、護念でしょう」

「青年の立場からいえば、あの人が好きだ、なんとか、あの人を娶（めと）りたい、どういうふうにあの人に言おうか、みんなにわからないようにしておこうか、というのも護念ではありませんか」

たしか、このとき、さわやかな笑いが起こったように覚えています。護念といっても、特別なものではありません。みんな何か護り念じているものがあります。それこそ、千差万別の護念があることでしょう。

「いわんや、仏法の世界において、八万法蔵（はちまんぼうぞう）の最高の哲理である法華経をば、一切の民衆は、まだまだ仏法を理解しないし、機根（きこん）（仏の説法を受ける民衆の生命状態）が熟さないし、そういう場合に、釈迦が無量義（むりようぎ）——というのは、一切の法門（ほうもん）（法に入る門ということ）で経文のことをぜんぶ摂（せつ）したところの講義をいうのですね。教菩薩法（きょうぼさつほう）——菩薩をぜんぶ仏にしきっていくという法、教えます。その妙法を、仏が護念していった、いつそれを発表しようか、説こうか、知らしめようかと

考えられることでしよう」

「生活のうえでも、ぜんぶ合うのですから、いわんや、永遠の生命という偉大な哲理を教えようという場合には、今後、成熟させて、時を待つということとは、考えられる方法であり、それから当然の道理であると思うのです」（以上「内は、当時のメモによった」）

私は、こうした講義を聞きながら、これほど仏法を生活に密着させながら展開できる秘訣は、いったい何だろう、と考えたりしました。私は、それまで仏所護念というところ、仏が妙法蓮華經を護念してきた、と機械的に覚えていましたが、なんで護念してきたのかも、わからなかったのです。私たちも、ずいぶん、たえずいろいろなことを護念しているのだ。時とか、相手とか、順序とか、場所とかを考えながら、自分の考え、思いを発表することを待っているのではないでしようか。

法華經は仏の無問自說

ところで、三世十方の諸仏が、妙法蓮華經を護念してきたということは、いったい何を意味するのでしょうか。

三世とは、過去、現在、未来のことです。つまり、悠久に流れきたり、流れゆかんとするタテの時間のことです。十方とは、あらゆるヨコの空間を指します。つまり、無限に広がり、悠遠の流れをもった大宇宙そのものといってよいでしょう。その仏とは、大宇宙そのものが、大慈悲の

働きをしていくことが、三世十方の諸仏の意味ともいえます。そして、この仏の生命を発動せしめる、大宇宙それ自体に秘められた（護念された）根源の力が、妙法蓮華經と名づけられる実体なのです。これを、まさしく法華經で説くということなのです。

それから、やはりこれは、序品に「天鼓自然鳴」という言葉があります。「天の太鼓が自然に鳴った」という、序品の瑞相（これから大法門——偉大な哲理が説かれるささし）の一つです。

これを、中国の天台大師は、「法華文句」という法華經の解釈書に「天鼓自然鳴は無問自説を表するなり」と述べております。

無問自説というのは、質問がないのに、仏（釈迦）が自らの意志で法を説くことをいいます。ふつう、仏が説法する場合には、衆生側からの質問があり、それに応じて、その時々法を説くのですが、釈尊は、法華經については、無問（問がない）でありながら、自説（自ら説く）したのです。これは、法華經以前では「衆生が仏になろう」などと、夢にも思わなかったのに、衆生を仏にする道を説いたものが法華經ですから、質問があるはずがないのです。

日蓮大聖人の「御義口伝」では、この無問自説について、生命論の立場から「二義に一切衆生の語言音声ごんおんじやうを自在いざいに出すは無問自説なり、自説とは獄卒ごくそつの罪人を呵責かしかくする音、餓鬼飢饉がききんの音声等、一切衆生の貪瞋癡どんじんちの三毒の念念等ねんねんどうを自説とは云うなり」と説かれています。

この文について、池田会長は、「ある面からいえば、一切衆生が語言音声ごんおんじやうを自在に出すのは、これもやはり無問自説になる。歌を歌いたい、自然のうちに、暑いとか、寒いとかいうのも無問

自説です。しかし、それが事実、一生いつしやうじやうぶつ成仏にはつながらない」（当時のメモより）などと語っておりました。

仏法は、真に人間性に立脚していることがよくわかりました。人間の本来ほんねんの姿を説き、そして、その昇華しょうかをはかっていこうとするものであることも、納得なつとくがいききました。キリスト教や仏法の小乗の教えなどでは、人間の欲望を罪惡視し、本来の人間性まで抑圧よくあつしようとしています。しかし、真の大乗仏法は、抑圧ではなく、コントロールできる「主我しゅが」の確立であり、むしろ欲望さえ生かし、用いるものなのです。

この時、人間は、初めて、真の意味の「自由」を獲得したことになります。「御義口伝」において「天鼓てんこ自然鳴じねんみやう」の「自然」とは、「無障礙むしやうげ」（障害がないこと）であるとしているのも、生命それ自体の自由を意味しているのです。

また、「天鼓てんことは南無妙法蓮華経なり」とあるように、生命自体の自由の、内奥ないおうの根源力が、南無妙法蓮華経である、ということなのです。

このように、序品じよほんの、天の太鼓が鳴るという瑞相ずいさう（物事が起こるきざし）も、「御義口伝」によって読むならば、もはや、それは空想のドラマではなく、生命のドラマとなってくるのです。

昭和三十九年三月二十日、「御義口伝」(上)の講義が終了しました。私たちにあって、この日も永遠に忘れられません。

『御義口伝』の講義を受けた諸君が、これから全世界へ行って、『御義口伝』の講義をする資格

を与える」

——池田会長は、何ものかを私たちに託すかのよう^{たく}に、繰り返しこう語るのです。その時、言いしれぬ感激が、胸中に澎湃^{ほうはい}として湧き起こるのを覚えたのです。

とくに「全世界へ行つて」という言葉に、私は、人類のための偉大な生命哲理を、私たちに託された思いがしたものです。今でも私は、鮮明に、未来の一切を青年に託す会長の心情を、あふれる光の中に見ることができます。

東洋に流れる、大乘仏法の真髓は、けっして私たちだけのものではない。やがて、人類の心を潤^{うるお}すであろう、この法華経哲学のタイムズは、今、若人^{わこうど}の胸に赤々と燃えている——私はこんな気持ちにひたっておりまし^た。が、現代の混沌^{こんとん}の地平に、仏法は生命の太陽としてまさに昇ろうとしています。

「なむみょうほうれんげきょう」
南無妙法蓮華經 とは「生命」



「宇宙即我」の原理を説く

以上、私は、自分が直接、法華經との触れ合いをもつことができた、戸田前会長と、そして現池田会長の、お二人の講義の一端を紹介しました。

戸田前会長は、法華經を通して「御義口伝」を、池田会長は「御義口伝」を通して法華經の哲理を展開していかれました。しかし、それは表裏ひょうり一体であり、そこに共通するものは、法華經二十八品じゅうはちほん（二十八章）は、「南無妙法蓮華經」を根本にせずしては、本当のことはわからない、ということでありましょう。

ここに、本論に入るにあたり、前もって、「法華經」と「南無妙法蓮華經」の関係を、ごく簡単に触れておきたいと思います。

法華經二十八品は、あとにも述べるように、「生命」についての解明の書です。しかし、いかに「生命」について解明を試みたとしても、それはまだ、真理しんり觀かんの域いきを脱するものではありません。

ん。

卑近な例でいえば、法華經二十八品は、たとえば「恋愛」とはこういうものだ、と説明したようなものです。それに対して「南無妙法蓮華經」とは、まさしく「恋愛」そのものであり、わが心の中に事実の感情として、恋愛が息づいているようなものです。

この「恋愛」という言葉を「生命」と置き換えてみてください。そうすると、両者の関係が、明瞭になると思います。

すなわち、法華經二十八品は、生命とはこういうものだ、という真理観であり、「南無妙法蓮華經」とは、まさしく生命の現実感なのです。

法華經二十八品は、その意味で、図上の正確な地図であり、「南無妙法蓮華經」は、現実の山河・大地の地形そのものです。二十八品は、家の設計図であり、「南無妙法蓮華經」は、家そのものです。

法華經の題号は「妙法蓮華經」です。題号とは、その經の真髓を短い言葉であらわした真髓です。妙法—蓮華—經と、それぞれの言葉に、深い哲学的意味がありますが、ここでは省略いたします。

その上に、日蓮大聖人は「南無」の二字を冠かんしたのです。それは、妙法蓮華經の上に、たんに二文字を置いた、といった簡単なものではなく、じつは、仏法史上において革命的な創造的発見をはらんでいます。

「南無^{なむ}」というのは、梵語^{ぼんご}に漢字をあてたものですが、漢訳すると「帰命^{きみょう}」（命を帰する）ということなのです。つまり「妙法蓮華經」へのひたぶるな「合一^{ごういつ}」こそ「南無」の意味するところです。「妙法蓮華經」と、わが生命の「合一」によって、宇宙生命の本質たる「妙法蓮華經」を、わが胸中のリズムとしていくことを意味します。

しかし、この「帰命」ということには、もっと深い意味があります。それは「帰命」ということが、「帰^き」するということと「命^{もとす}」くという、二つの意味あいをもっているということです。つまり、「妙法蓮華經」という宇宙普遍の真理に帰するとともに、「妙法蓮華經」を、わが生命に沸^わき立たせていく力強さ、ダイナミズムが、そこにあるわけです。

およそ「南無」というのは梵語^{ぼんご}であり、梵語とは表音文字であり、その「音調」に「生命」があります。「妙法蓮華經」とは漢語であり、漢語は表意文字であり、その「文字」に「生命」があります。

したがって、南無とは、もはや「帰命」という「意味」だけでなく「帰命」という、力、作用、リズムそのものなのです。妙法蓮華經という宇宙大の生命の力と作用が、わが胸中を震^{ふる}わせつつ、沸きたたせていく根源の力の発動以外のなにものでもありません。

仏法は、けっして、認識や観念の領域にとどまっていってよいものではありません。それは、設計図を引いて、家が建ったという錯覚に等しく、地図を見て、本物の地形にわが身を置かないのと同様です。

つまり、法華經二十八品とは、南無妙法蓮華經の説明書であり、二十八品の意味するところ、
「南無妙法蓮華經」という画竜点睛がりようてんせいがあつて、はじめて生き生きとした光彩を帯びてくるのです。
このように述べましても、なかなかまだ理解しにくいかもしれないと思いますので、ここに一つの例をあげます。

法華經には「宇宙即我」そくわれの原理が説かれています。私たちの生命に、大宇宙をはらんでいっているのです。しかし、そう説かれても「なるほどそうか」とうなずいてみたところで、その事実の感情はありません。わが生命に宇宙大な自我が躍動していて、はじめて、それを事実観のうえに納得がいくというものです。

以上、ひじょうに根本的な命題に最初から取り組んでしまいましたが、漠然とでもけっこうですから、この命題を念頭に置いていただいて、次に、いよいよ本題に入っていきたいと思ひます。

第一章

法ほ華け經きょうとは何か

第一章

法華ほけ經きょうとは何か

第一章

法ほ華け經きょうとは何か

生命の秘密を明かす唯一の経文

永遠のナゾを解決するための人生遍歴

「わが国の神道が、超国家主義・全体主義に利用されて、ついには、無謀なる太平洋戦争にまで発展していったときに、私（戸田前会長）は恩師牧口常三郎先生、および親愛なる同志とともに、当時の宗教政策のはなはだ非なることを力説した。すなわち、日本国民に神社の礼拝を強制することの非論理的、非道德的ゆえんを説いたのであるが、そのために、昭和十八年の夏、弾圧されて、爾来二カ年の拘置所生活を送ったのであった。

冷たい拘置所に、罪なくとらわれて、わびしいその日その日を送っているうちに、思索は思索を呼んで、ついには人生の根本問題であり、しかも、難解きわまる問題たる『生命の本質』に突きあたったのである。『生命とは何か』『この世だけの存在であるのか』『それとも永久につづくのか』これこそ、永遠のナゾであり、しかも、古来の聖人、賢人と称せられる人々は、各人各様に、この問題の解決を説いてきた。



不潔な拘置所には、シラミが好んで繁殖する。春の陽光を浴びて、シラミは、のこのこと遊びにはい出してきた。私が二匹のシラミを板の上に並べたら、かれらは、一心に手足をもがいている。まず、一匹をつぶしたが、ほかの一匹は、そんなことにとんちゃくなく動いている。つぶされたシラミの生命は、いったい、どこへ行ったのか、永久にこの世から消えうせたのであろうか。また、さくらの木がある。あの枝を折って、かびんに差しておいたら、やがて、つぼみは花となり、弱々しい若葉も開いてくる。このさくらの枝の生命と、元のさくらの木の生命とは、別のものであるか、同じものであるのだろうか。生命とは、ますます不可解のものである。

その昔、生まれて間もない一人の娘が死んで、悩み苦しみをぬいたことを思い出してみる。そのとき、自分は娘に死なれて、こんなに悩む、もし妻が死んだら（その妻も死んで、自分を悲しませたが）……もし親が死んだら（その親も死んで、私はひじょうに泣いたのであったが）……と思ったときに、身ぶるいして、さらに自分自身が死に直面したらどうか……と考えたら、目がくらするのであった。

それいらい、キリスト教の信仰に入ったり、または阿弥陀教あみだきょうによったりして、たえず道を求めてきたが、どうしても生命の問題に関して、心の奥底から納得するものは、何ひとつえられなかった。その悩みを、また独房のなかで繰り返したのである。元来が、科学・数学の研究に興味をもっていた私としては、理論的に納得できないことは、とうてい信ずることはできなかった。

そこで、私は、ひたすらに『法華経』と日蓮大聖人の『御書』ごしょを拝読した。そして、法華経の

不思議な句に出会い、これを身をもって読みきりたいと念願して、大聖人の教えのままにお題目を唱えぬいていた。唱題の数が二百万遍になんなんとするときに、私はひじょうに不思議なことに突きあたり、いまだかつて、はかり知りえなかった境地が眼前に展開した。よろこびにうちふるえつつ、一人独房の中に立って、三世十方の仏、菩薩、いっさいの衆生に向かって、かく叫んだのである。

遅るること五年にして惑わず、先だつこと五年にして天命を知りたり。

かかる体験から、私は、いま、法華経の生命観に立って、生命の本質について述べたいと思うのである」

生命とはこの世だけの存在か

これは、昭和二十四年、「大白蓮華」の創刊号に寄稿された、戸田前会長の「生命論」の書き

出しの部分です。もちろん、当時十歳の私が、そのときこれを読んだわけではありません。ずつとあとになり、戸田先生の論文がまとめられ「論文集」として発刊されたとき、初めて、この「生命論」に接しました。

私は、この論文を読み、全身に光のシャワーを浴びたような感動を覚えました。

とくに、戸田先生が、かつて、お子さんを亡くし、お母さんを亡くし、奥さんを亡くし、生命の問題で悩み苦しんだこと、また、自分が死んだらと考えて苦しんだこと、その苦悩のすえに、

キリスト教の信仰に入ったり、または阿弥陀教によったりして、思索をしぬいたこと、そして、ついに独房の中で唱題しぬきつつ、法華経を読みきったこと——その人生の遍歴と、激闘ともい

かつとう

うべき生命の思索の葛藤に、衝撃のように心の嵐が起こったものです。

たいせきじ きやくでん

同じような内容のことを、たしか昭和三十二年ごろの、総本山大石寺客殿の質問会で、戸田先生が話されました。質問は「この春、子どもが死にましたが、また親子の縁を結ぶことができるでしょうか」というものです。たしか、中年のご婦人だったと思います。戸田先生は、この人の心中を思いやったことでしょう。しかし、厳然と次のように答えておりました。

「それはわかりません。私は、年二十三で『ヤスヨ』という子どもを亡くしました。女の子であります。一晚、私は死んだ子を抱いておりました。そのころ、まだ御本尊を拝みませんから、もう悲しくて、抱いておりました。そして別れて私は、いま五十八歳です。彼女がおれば、当時三歳でありましたから、そうとう立派な婦人となっていることと思いますけれども、今世で会ったといえるか、いえないか……。それは信心の感得かんとくの問題です。（中略）もう一つ付け加えておこう。私は、そのときぐらい世の中に悲しいことはなかったのです。目黒に事務所があったのですが、そこで、もし自分の妻が死んだら……と私は恐れました。その妻も死にました。もし母親が死んだらと思いました。それは私としても、母親が恋しいです。

今度はもう一歩突っこんで、ぼく自身が死んだらどうしようと考えたら、私はからだがふるえてしまいました。それが牢に入って、少しばかりの経典を読ませてもらって『ああ、よくわかり

ました』と解決したのですが、死の問題は二十何年間かかりました。親子を亡くして泣きすぎ、妻の死も自分の死もこわかった。これがようやく解決できたればこそ、戸田は創価学会の会長になったのであります。

今世で会えるか会えないかは、それは私から言うわけにはいきません。あなた自身の感得の問題だと思うけれど、会えるというのもおかしいし、会えないというのもおかしいし、あなた自身の信心がつくるものだから、私の力のおよばぬところ、ご自分の力でおやりなさい」

戸田先生の生命解決の人生遍歴は、じつに二十数年にわたったのです。そして、その解答を、ついに獄中における「法華経」で得たと、強い確信をもって語るのです。

それでは、いったい、戸田前会長が、身を削るような思いで、生命との対決をした「法華経」とは、いかなる経典なのでありましょうか。

仏法の“密林”をどう踏破するか

トインビー「無意識の奥にある人類共通の生命」

小さいころから私はよく夢をみます。誰でも、一日数回は夢をみているようですが、私の場合は、不思議に目覚めたあとでも鮮明に残っていることが多いのです。

大きな犬に追っかけられて、どんなに一生懸命足を動かしても、少しも前に進まない夢とか、断崖絶壁から突き落とされそうになり、助けを求めた瞬間に目覚めたときなど、恐怖の余韻よゐんが後を引きまします。反対に、日ごろから、憎にくからぬ情熱を寄せていた少女と出会ったとたんに、現実現実に引きもどされたくやしさを味わったこともあります。

夢とは不思議なものです。もう数年間も顔を見ない人が突然現われたり、日本にいながら遠い異国の情緒にひたっていたり、そうかと思うと、突如として大空に浮きあがるなどという、物理的に不可能なことが、夢のなかでは平然と起こっています。つまり、覚さめているときの常識がまったく通用しないのです。



この夢に焦点をあてて、夢の湧きでる源泉を、探し求めた一人の心理学者がいました。

深層心理学を開いたフロイトです。彼は「夢は無意識への王道である」と言っていますが、この著名な心理学者は、夢を探索することにより、私たちの意識の底に広がる広大な無意識の領域を発見したのです。

意識を、大洋に浮かぶ氷山の海面上の部分とすれば、その奥にある無意識は、海面下に隠された氷山の塊りに譬えられるでしょう。いうまでもなく、氷山の頭の部分は、海に没した巨大な塊りの一部分にしかすぎません。

同じように、私たちが覚醒時に意識している精神活動は、その奥に広がった無意識層のほんの一部にすぎないのです。

夢は、こうした私たちの無意識の層から、意識層を突きぬけて発現してくるのです。このなかには、人間生命誕生以来の、すべての記憶が貯えられているのです。

フロイトの系統をひく哲学者・ユングは、夢にもほりえない生命の深層を見いだしました。彼は、それを「集合無意識」と命名しています。つまり、この領域では、すべての人の心が融合し、巨大な生命の海となって脈動しているというのです。

人類のすべての心を支える生命の大海には、この地球上に人類が誕生してからの、ありとあらゆる遺産が流れこんでいるのです。「人類の記憶」といってよいでしょう。

三年ほど前、池田会長がトインビー博士と対談したおりにも、ユングの「集合無意識」に話が

及んだと聞いています。博士は、次のような巧みな譬喩ひゆを用いていたそうです。

人間の心は、個人的な無意識のもう一步奥に、人類共通の生命をもっている。二つの無意識の関係は、ちょうど二重底のようになっているというのです。ほとんどの人は、上のほうの底には気がついて、その底を引きあげれば、さらにも一つの領域があるなどとは、それこそ、夢にも思わないでしよう。

なにしろ、夢にさえ姿をあらわさない生命の深奥しんおうですから――。

時代劇などを見ていると、重箱の二重底の下のほうには、たいてい、大判小判がひしめいています。私たちが心の奥には、人類の築きあげたあらゆる「精神の宝」がそなわっています。それも、時代劇に出てくる商人のように、あくどい商売でもうけたものではなく、生まれながらにして、私たちの生命にそなわった財産なのです。

「あらゆる宇宙の實在が一個の人間生命にある」

西洋の学者が探索したのは、現在でも、この領域までのようです。ところが、東洋においては、すでに釈尊しやくそんの時代に、人類共通の生命を突きぬけて、植物や動物の生命さえもはらみながら、大宇宙そのものの根源にまで到達していたのです。

釈尊の仏としての覚悟かくごは、一人の人間生命を支え、そこに無限に広がりゆく大宇宙の根源への直視であり、直入であったのです。

日蓮大聖人は、「蒙古使御書」のなかで、仏法の洞察を明瞭にえがかれています。
「所詮・万法は己心に収まりて一塵もかけず九山・八海も我が身に備わりて日月・衆星も己心にあり、然りといへども盲目の者の鏡に影を浮べるに見えず・嬰兒の水火を怖れざるが如し」
万法、すなわち宇宙の現象とか法理、地球、太陽、月であれ、あらゆる宇宙の実在がすべて一個の人間生命のなかに含まれているとの言葉です。

こういうと、ひじょうに不思議に思われる人がいるかもしれませんが、ユングの「集合無意識」までくれば、もう数歩のところ、宇宙生命の源流を洞察しぬくことも、けっして不可能ではないでしょう。

それにしても、わが身に宇宙大の広がりがあり、宇宙万象を生みだす根源力がそなわっているとしても、その事実を実感できる人は、きわめて少ないのではないのでしょうか。

ソクラテスは「汝自身を知れ」と言いましたが、私たちが自己自身を知ったとしても、どうも私たちの生命の奥には、あまり期待できそうなものは発見できない、という人がいるかもしれません。つくづく「自分はダメな人間だ」と結論を引きだす人もいます。

そういう人は、生命の表層に出没する欲望とか衝動とか、エゴイスティックな自我だけが目について、その内奥に広がる生命の海の実在には、いまだに盲目であると考えられます。

どんな人の生命にも、万物を育て慈しむ力と知恵が内在しているのです。宇宙をも動かす巨大な生命のエネルギーが充満しているのです。ただ、ほとんどの人が、万物の源流にまで到達でき

ないだけにすぎません。

仏法は、生命の根源に至り、宇宙と生命の本然的ほんねんな姿、実相をありのままに知見ちけんすることに成功しました。そうした仏陀ぶつだ（仏ぶつ悟ごった人）の覚悟が、東洋三千年の民族の心を流れるうちに、種の經典となって結実したのです。

宇宙と生命の根源から湧きいずる万物生起の法と力を、すべて説きあかそうとするのですから、けっして容易なことではありません。仏陀の覚悟にもとづきつつ、じつに多くの仏教者の、血のにじみでるような努力がつづきました。

その結果、私たちの手もとには「八万法蔵」といわれる膨大ぼうだいな量の經典となって伝えられることになったのです。

仏法は密林、踏破には生命哲理の視座から……

日蓮大聖人は、きわめて明瞭に「八万四十の法蔵は我身一人の日記文書にっきもんじよなり」（『三世諸仏総勘文抄しやう』）と述べられています。

つまり八万法蔵は、宇宙生命とともに律動する、一個の人間の生命を説きあかしたものにほかなりません。また逆にいえば、八万法蔵は、生命哲理の無量の展開であると規定できましよう。

一つの例を、お話しましよう。

ある人が、小学校のころからずっと日記をつけてきたとします。最初のころは、日々の出来事を記^{しる}していたのですが、高校入学ともなれば、その人自身の生命の変転に興味を持つようになりしました。青春期は、誰でも、身体と心が揺れ動きやすいものです。精神が敏感になり、情熱が嵐を起こすこともたびたびです。

その人は、自分の生命の動きをできるだけ克^{こく}明^{めい}に、日記に書きつけるよう心がけました。その人自身の生命の記録です。それでも、その人が日記に書きつけられるのは、意識にのぼった領域だけにすぎません。意識の奥の心の大海の様相は、生命そのものには刻^{きざ}みつけられているでしょうが、記録としてはとどまっていません。

時々意識活動のほんの一部を書きのこすだけでも、二十年間もたてば、大学ノートにして数千冊にもなります。もし、無意識の心の流^る転^{てん}まで記すとなれば、それこそ、山のようなノートが必要でしょう。

実際に、このような体験をもっている人はいる、と思います。まして永^{えい}劫^{こく}の過去から無限の未来へと流れゆく万物のすべての動きをとらえんとした仏法が、その哲理を伝えるのに、いかに多量の教典を必要とするかは、推測に難^{かた}くないと思われれます。

昨今、心ある人のなかには、真剣に仏法哲理を学び、限りない知恵を汲^くみだそうと努めている人もいるようです。ある人は、原始仏教の經典に興味をいだき、また、他の人は、深層心理との関連から唯^{ゆい}識^{しき}系の教典に焦点をあてはじめています。オカルト・ブームに代表されるように、心

の奥の神秘に惹かれる人は、密教とか、ヨガの実践におもむいています。

しかし、興味あるところから手をつけるのはいいのですが、一度、仏教の内部に足を踏み入れたとたんに、あまりの複雑さに、行くべき道を見失ってしまうのではないのでしょうか。

八万法蔵は、奥深くうっそうとした原始林にたとえられましよう。ひとたび迷いこめば、容易に抜けだせない熱帯地方の密林を想像してください。太陽の光もとどかず、道らしい道もない密林を踏破するには、正確な磁石をたずさえていなければなりません。つねに方角をたしかめ、全体観に立つことです。

仏法の密林を踏破するにあたって、全体観を与え、いかなる方向に進んでいるかを明確に指示するものは、「仏法とは生命の哲理である」との視座しざ（根本的な立場に立つて考えること）にほかりません。

この生命の哲理という点に視座をおいて、つねにたしかめながら、仏法哲理の密林に分け入ってこそ、正確な仏教の体得も可能になるのです。

たとえば、生命哲理の視座から、自分の探索している部分が、生命の現象面であると判明したとします。

そうすれば、今度は、もう少し、心の領域に分け入ってみようと考えられるわけです。また、人によっては、逆の方向に進む場合もあるでしょう。

私は、仏法の原始林を踏破しようと志こころざす人に、膨大ぼうだいな經典は、生命の無限に展開する哲理を

示したものである、との視座を、まず提示しておきたいと思います。

仏教における法華經の位置

「コーヒークリープ」

仏教を会得^{えとく}するための視座を手に入れたところで、今度は、具体的に密林のなかに分け入って、法華經と他の經典との根本的な違いがどこにあるかを、探索してみましよう。

日蓮大聖人は、先ほどの「蒙古使御書」のつづきに、明瞭な指針を示されています。
「外典^{げてん}の外道^{げどう}・内典^{ないてん}の小乗^{しょうじょう}・権大乘^{こんだいじょう}等は皆己心^{こしん}の法を片端片端^{かたはし}説きて候^{そうろう}なり、然^{しか}りといへども法華經の如^{ごと}く説かず」

仏法では、あらゆる思想、哲学を大きく二つに分けます。そして仏教經典を内典とし、他の思想、哲学をすべて外典の外道と呼んでいます。仏教のなかでも、小乗、権大乘、実大乘（法華經）などの区別をもうけていますが、ここでは、法華經と他のあらゆる經典、思想、哲学の二つに分けて考えることにします。

そうしますと、法華經以外の經典、並びに他の思想などは、生命の無量の展開の「片端片端説



きて候なり」ということになります。

すなわち、一個の人間生命を、それぞれの立場、角度から、部分的に説き示したのが、小乗とか大乘といわれる經典です。

ちようど、これは昔あった話ですが、目の見えない人たち（この譬喩は、人生に対して部分しか見えない人のことを指しています）が象を撫でて、自分の触れた部分から象をさまざまに想像したという群盲評象の譬えのようなものです。

足だけをさわった人は、象は、丸太ん棒のようなものだ、と言うでしょう。耳だけをさわった人は、象というのは、大きなうちわのようだ、と表現し、腹だけに触れた人にとって、象は、平べったい壁のように思われるでしょう。物事を見究める場合、多くの人はこうした誤りを犯すものです。

いずれも、部分的には正しくても、全体観では大きな誤りを犯しています。部分観だけの認識から、全体像をえがきあげたから、このような誤りが生じたのです。

外典げてんのなかで、フロイトやユングの会得えとくした学問体系は、生命の大海の比較的上層の領域に相当するでしょう。

仏教に入って、小乗仏教の原典でもある阿含經あこんきようは、私たちの生命の内部にうずまき煩惱ぼんのうに着目しました。九十八、あるいは、百八つの煩惱を数えあげています。これらの煩惱が人間の不幸、苦悩を現出するというのは正しいのですが、この經典では、厳しい戒律によって、外から煩惱を

断とうと試みたのです。

煩惱は生を営むかぎりつきまとうものであり、煩惱を断絶することなどできるわけがありません。喜怒哀楽の情あつての人間であり、もし人がそれら一切を否定しることができるとしたならば、人生はいかに無味乾燥となることでしょう。それを強行すれば、ときには、生きることさえも嫌悪する人間性破壊の宗教とならざるをえないのです。

権大乘のなかの華嚴経は、生命自体がいかに莊嚴なものであるかを紹介した經典です。

また、般若心経は、般若、つまり、生命具備の知恵の一面を説き明かしています。

しかし、生命の姿が莊嚴であると紹介しても、また、すばらしい知恵の働きを示されても、本来莊嚴であるべき姿を現出できず、知恵の働きが衰えはてた人間にとっては、いずれの經典も生命変革の原理とはなりえないのです。

生命内在の英知を顕現化し、生命を莊嚴ならしめる本源的な力は何にもとづくのか、宇宙大のエネルギーをはらんだ生命の根源力を開発するにはどうすればよいのか——それらすべてに解答を与えたのが、法華経です。

法華経のない釈尊の教えは、平たくいえば「クリープのないコーヒー」というより、むしろ「コーヒーのないクリープ」のようなものです。

数々の譬喩と事例で生命の宇宙を説く

法華經以外の經典が、広大な生命流轉るてんの片端片端かたはしを示したのに対し、法華經は、他の經典を統合しつゝ、生命の全体像を浮かびあがらせているのです。法華經が、釈尊の教えの集大成であると称される理由も、ここにあるといえましょう。

法華經は、生命の全体像を、統合し、完璧なまでに説き明かすがゆえに、人間生命内在の知恵を開発し、慈悲の力を湧きあがらせる生命の本源力を示しうる、經典となりえたのです。

生命のはらむ無限の可能性を、法華經では、ある時は、何十万の衆生しゅじょうが集まった儀式をもって示し、ある時は、想像を絶する巨大な宝塔（七つの宝で飾られた宝の塔であり、万人の生命内奥に実在する宇宙大の生命を表わしている）が、空中に出現するという驚天動地きやうてんどうちの出来事で表わし、あるいはまた、大地を叩き割たたって、多くの「地涌の菩薩じゆつぼさつ」と名づける大慈悲の生命が湧現ゆげんすることによって表現しています。

つまり、宇宙の源流にまで根ざした一個の人間生命の全体観を、種々の譬喩ひよとか事例を縦横無尽じんに駆使して、説こうとしているのです。

そして、宇宙森羅万象しんらばんしやうは、一個の人間生命に収まりおさ、そこから無量の展開を織りなしていくのです。

法華經の開經かいきやう（本論を起す經）とされる無量義經むりやうぎきやうには「無量義とは一法より生ず」と記されていますが、無量の義として展開する生命哲理の根源に位置する一法、万物創造の原動力をはらんだ一法を「妙法蓮華經」であると説き明かした經文が、法華經なのです。

ここまでくれば、法華経が内典、外典のすべての思想、哲学を生命哲理の部分観として位置づけながら、自らは、すべてを総括した中核に、その王座を占めている事実が明らかになったはずです。

“生命讃歌”の壮大なドラマ

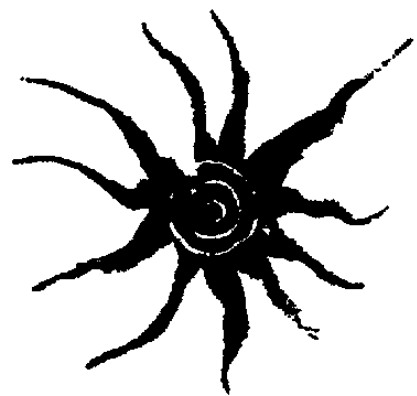
全体の構成は二十八品ほん（章）から成る

では、いったい、八万法蔵の王座に位置する法華経とは、いかなる經典でしようか。

これから、ともどもに、法華経そのもののなかに分け入っていきましよう。そのさい、私たちの方向指示器や羅針盤になるのは、さきほども説明したように、“生命の哲理としての視座”であることは言うまでもありません。

この視座をはずさないかぎり、古来、難解とされてきた法華経も、ひじょうに親しみやすく、また読みやすい經典となって、私たちの前に姿を現わします。

ところで、法華経は正確には「妙法蓮華経みょうほうれんげきよう」といっています。梵語ほんごの原名は「サ・ダルマ・ブンダリーカ・スートラ」ですが、これを、有名な鳩摩羅什くまらじしゅうが「妙法蓮華経」と漢訳したのです。この妙法蓮華経は二十八品から成っています。「品ほん」というのは今日でいえば、書物の目次に出てくる「し章」にあたると思っています。ただければ結構です。



かつて、作家の伊藤整が『女性に関する十二章』という本を書いて、ベストセラーになり、一世を風靡したことを記憶にとどめておられる方もあるかと思いますが、そのひそみにならって、法華經二十八品を現代風に言い換えれば、「生命に関する二十八章」とでもいったところでしょうか。

一個の人間生命をタテに奥底まで掘り下げ、ヨコに宇宙大に広げて説き尽くし、二十八章に収めたのが法華經ということになります。

さて、私が法華經というとき、法華三部經ほっけといって、いま述べた二十八品を中心にして、前に開經・「無量義經」を置き、後に結經・「普賢經」(正確には、『觀普賢菩薩行法經』)を置いたものを合わせて呼んでいます。

まず、開經・無量義經に始まり、次に妙法蓮華經二十八品に入り、そして、結經・普賢經に終わるという大きな流れとしてとらえるとき、かえって、法華經二十八品の内容が明確に浮かびあがってくるのです。

それは、ちょうど、私たちの友人や知人に差し出す手紙の形式を、思い出していただければよいのではないでしうか。

「拝啓、その後、お元気ですか……」とか「前略……」などの書き出しの部分は、さしずめ、法華三部經の開經・無量義經にあたるでしう。

そして、手紙を書いた目的や本当に言いたい事柄が手紙の中心部にきますが、それは三部経でいえば、妙法蓮華経二十八品の部分になります。

最後に「それでは、くれぐれもお体を大切に、さようなら」などの締めくくりのところは、結経・普賢経にあたります。

これが「拝啓、その後、お元気ですか」との書き出しも、「それでは、さようなら」の結びもまったく手紙であつたら、受け取った人はどんな気持ちになるでしょうか。たしかに、相手の用件や目的はすぐ理解できますが、それにしても、なんとなく無愛想で、冷たい感じを受けるのではないのでしょうか。直接用件には関係なくとも、もう少し、心暖まる文章や部分がほしいと思うのが人情というものです。それと同じようなことが、法華三部経の開経と結経についても、いえるようです。

以上、述べた点を考慮しながら、いよいよ法華経の生命の哲理のなかに、足を踏み入れていきましょう。

私たちの眼前に、いかなる展望が開かれてくるか、期待に胸をふくらませながら、ともどもに歩を進めていきたいと思えます。

「無量義経」の提起する三十四の「非^{あら}ず」とは？

まず、手紙の「拝啓」 「前略」の書き出しの部分にあたる最初の開経・無量義経には何が

説かれているのでしょうか。

『法華經の位置』の箇所でも少し触れましたが、ここには「無量義とは一法より生ず」ということが説かれています。

「無量義」とは量ることのできない多数の義ということで、一個の人間生命が織りなす、多彩にして無量の生命現象を指しています。

それが「一法より生ず」と無量義經では説いたのですが、その「一法」が何であるかについては、ここでは明確に説明されていません。その答えが次の法華經二十八品で出されるのです。その意味では、無量義經は問題提起の經典といってよいでしょう。問題を的確に出せば、見事な解答が返ってくるというのは、いかなる場合でも、難問の解決の鉄則といってよいと思います。

かつて私の読んだフランスの哲学者・ベルグソンが、どこかで、問題を上手に出せばそれが解答である、といった趣旨のことを書いていたのを、いま改めて思い出すのですが、無量義經は、その典型的な經典であるとかねがね考えています。

しかしながら、無量義經の問題提起は、「無量義とは一法より生ず」といった文に尽きるのではなく、もうひとつ、私にとって生涯忘れ得ぬ問題も提起しています。

それは、映画『人間革命』を見られた方なら知っておられると思いますが、丹波哲郎の演ずる戸田城聖が、獄中で悟達するクライマックスの場面と、大いに関係するのです。戸田城聖が悟達

する前に思索したのが、無量義經の「其の身は有に非ず亦無に非ず因に非ず縁に非ず……」という箇所です。ここには「……非ず」という否定形が三十四も繰り返して出てきます。

三十四の「……非ず」によって示される「其の身」とはいったい何か——これが戸田城聖を苦慮させ、生命を賭けた思索に入らせた問題提起でした。ただひたすら唱題と思索を重ねた結果、ついに「仏とは生命なんだ！ 生命の表現なんだ。外にあるものではなく、自分自身の命にあるものだ。いや、外にもある。それは宇宙生命の一実体なんだ！」と獄中で叫んだ瞬間は、おそらく映画を見られた方なら印象深く胸に刻印されているのではないでしょうか。この悟達こそ、無量義經の問題提起に対する戸田前会長の得た解答であつたわけです。このことは、小説『人間革命』に池田会長によって詳細につづられています。さて、この解答、すなわち悟達こそ、密林にも等しい八万法蔵に分け入るさいの私たちの羅針盤、方向指示器になったのです。

私が先ほどから何度も述べてきた「生命哲理としての視座」も、じつに、戸田前会長の悟達が根底になっているのです。

前半十四品を「迹門」・後半十四品を「本門」

さて、問題提起の無量義經の後には、その答えとして、法華經二十八品がきます。

一言でいうならば、無量義經で提起された「一法」こそ、妙法蓮華經であるとし、この妙法蓮華經について説いたのが法華經二十八品です。つまり、無量の義に展開する生命現象は、妙法蓮

華經の一法より生じてくることを、明らかにしたのです。

では、法華經二十八品ぼんぼんには、どのように、妙法蓮華經の一法が説かれていくのでしょうか。二十八品の品々ぼんぼんに従って、内容をたどる時がきたようです。

その前に、二十八品の流れをよりよく理解するために、大ざっぱに四つのグループに分けておきたいと思います。書物の目次でいえば、何章かをまとめる「編」にあたるものがあると、全体を把握しやすいことは、誰もが経験しているところでしょう。

まず、二十八品を前半と後半の二つに大別します。この分け方は、中国の法華經學者によって試みられたものですが、前半十四品を「迹門しやくもん」、後半十四品を「本門ほんもん」と呼びます。

「門」というのは、仏の教えということ、迹門とは、迹仏しやくぶつの説いた教え、本門とは、本仏の説いた教えという意味です。

迹仏と本仏については、後で寿量品じゆりやうぼん16の内容紹介のときに詳しく説明したいと思いますが、迹仏は、本仏から衆生教化しゆじやうきやうかのために垂迹すいじやくした仏のこと。本仏は、自らの生命が永遠の昔から仏であったという本地ほんちを明かした仏のこと、ぐらゐにここではとどめておきます。

ただ、本仏と迹仏の関係は、天にかかっている実際の月と、池に映っている月との関係を頭に描いていただければ、少しは理解しやすいのではないでしょうか。

さて、迹門しやくもんの十四品は最初から順次に、序品じよぼん1（現代的に表現すれば、第一章序論ということになります）、方便品ほうべん2（第二章方便について、と同じ意味。以下同様）、譬喻品ひゆぼん3、信解品しんげぼん4、藥草喻品やくそうゆぼん5、

授記品6、化城喻品7、五百弟子受記品8、授学無学人記品9、法師品10、見宝塔品11、提婆達多品12、勸持品13、安樂行品14、から構成されています。

次に、本門の十四品は、從地涌出品15、如来寿量品16、分別功德品17、隨喜功德品18、法師功德品19、常不輕菩薩品20、如來神力品21、囑累品22、藥王菩薩本事品23、妙音菩薩品24、觀世音菩薩普門品25、陀羅尼品26、妙莊嚴王本事品27、普賢菩薩勸發品28、から構成されています。さきに、四つのグループに分ける、ということ述べましたが、それは、迹門と本門のそれぞれを、内容によってまた二つに分けるのです。

迹門は①方便品2を中心としたグループと、②見宝塔品11を中心としたグループに分けます。また、本門は③從地涌出品15、如来寿量品16を中心としたグループと、④常不輕菩薩品20以降を一括したグループに分けます。

さて、この四つのグループに従って、内容をたどるとき、法華經がいかになどに壮大なドラマであるかが明瞭になってきます。

そのドラマ性は、まず冒頭の序品1から見られます。

数十万の衆生が狭い靈鷲山に集まった意味——序品

序品は、さきほどの手紙の例でいうならば、「拝啓」「前略」の後に「さて、物価高騰の折、經濟緊迫にて、苦しみはてております……」などと書く部分です。この場合だと、本当に言いた

いことは、たとえば「お金を借りたい」ということなのでしょうが、それと同じように、序品1も、方便品2以下の法華経の核心に入るための序論というべき性質の章です。

この序品には、きわめて不思議なドラマが展開されます。舞台は靈鷲山りょうじゆせんという、ちょうど鷲わしの形をした岩山の上です。ここに、合計すれば、じつに数十万という人が集まってくるのです。

実際に今日でも、インドに靈鷲山そのものはあります。しかし、そこはとても数十万の人が集まれる広さではなさそうです。いったい、これはどう理解すべきでしょうか。これに対して、戸田先生は次のように解答を与えています。

序品の数十万という衆生の結集は、じつは、釈迦しゃかの己心こしん（自らの生命）の中に、あらゆる衆生が映し出されたことを象徴する表現であるということです。

したがって、何十万集まっても、驚くにはあたらないのです。己心の表現ですから、何百万でも何千万でも可能でしょう。

序品では、釈迦一人の生命に集約して、己心のなかにあらゆる衆生が内在していることを説いたのです。このことを敷衍ふえんしていえば、私たち個々の生命のなかにも、舍利弗しゃりほつ（釈迦の十大弟子の一人）の生命も、竜女や提婆達多だいばだつた（釈迦の従弟いとこで、釈迦に反逆した人）の生命も、すべて含まれているということです。釈迦は、それを強調するために、序品で、数十万の衆生を結集したのです。

これはまた、観点を改めれば、「法華経の位置」の節でも述べたように、一個の人間生命に内在する無限の可能性を示す、一つの表現ともいえます。

「三乗を開いて一仏乗を顕わす」——方便品さんじょう いちぶつじょう あら ほうべんぽん

まず、一個の人間生命の中に、あらゆる衆生の生命が内在している可能性を示した法華経は、方便品2を中心とする①のグループにおいて、一切衆生の生命のなかに、仏界Ⅱ妙法蓮華経というもつとも尊い生命の力と法が内在していることを明かします。

寿量品16とともに、法華経二十八品の中核である方便品2では、天台教学でいう「開三顯一」かいさんけんいち（三乗を開いて一仏乗を顕わす）の原理が示されます。すなわち、声聞、緣覺、菩薩の三乗を開いて、一仏乗を顕わすということです。

私たちの人生の目的は、声聞、緣覺や菩薩になることではなく、私たちの生命内奥の仏界を開き顯わすことにある、ということを読いたのです。そして、釈迦出世（世に出現すること）の目的が、すべての人々の生命に内在する仏界を開き、自己と同じく成仏させることである、との一大宣言がなされたのも、この方便品です。

ところで、「成仏」とはどういうことでしょうか。テレビの時代劇などを見ていますと、よく、死人が出てくるシーンがあります。

すると、「ちょっと仏さまを拜ませてもらいましょいか」などという場面が出てきます。

この場合、死人イコール仏になっっていますますが、死者を尊重することは当然としても、ここにいる「仏」とは、そのようにゆがめられた概念ではなく、じつは、自分の心の中にある宇宙大の広

大な生命力、偉大な生命の実体をいいます。そして、それを開き顯あらわすことが成仏の意義です。したがって、“仏”といっても、なにか別世界のものではなく、もっとも平凡にしてもっともありのままの自分の中に、ダイヤモンドのように光り輝く生命を開花することをいうのです。方便品2を受けて、譬喻品3、信解品4、藥草喻品5、授記品6、化城喻品7、五百弟子受記品8、授学無学人記品9などの①のグループは、開三顯一の——三乗を開いて一仏乗を顯す——原理を、あるときは譬喻を用い、あるときは因縁を説いて、あらゆる角度から説明するのです。

生命の尊嚴と広大さを象徴する見宝塔品けんぼうとうほんじゆうじゆうじつぽん從地涌出品

次に、見宝塔品11を中心とする②のグループに入ります。とくに見宝塔品11では、タテ五百由旬じゆん、ヨコ二百五十由旬という大宝塔が、地下から出て空中に立ちます。あとでも触れますが、今日の計量に換算すれば、五百由旬——二百五十由旬の大宝塔は、縦が地球の直径、横がその半径に当たるといふものです。これは、まさに私たちの想像を絶する宝塔です。

その四面がいたるところ、七宝で飾られているので宝塔といえます。

七宝は、金、銀、瑠璃るり、砮磬しやこ、瑪瑙めのう、真珠しんじゆ、玫瑰まいえです。七宝のほかに、無數の幢幡どうばん（竜頭りゆうとうや宝珠で飾った竿柱さおばしらに、長い帛はくをたれ下げた一種の旗）や宝物によっても莊嚴されています。

おそらく、地球の半分にも等しい、まばゆいばかりの宝塔を見た衆生は、驚嘆したことでしょう。

しかし、このような大宝塔が地下から出て、空中に立ったというのは、いったい何を意味するのでしょうか。

私は、次のように思います。

①のグループは、すべての人に仏界の生命が内在することを、いろいろな角度から述べてきたわけですが、その仏界の生命がどんなものか——その広大さと荘厳さを、このような想像を絶する表現により、象徴したということです。スケールの大きさといい、想像を絶するドラマ性といい、すべて、私たちの生命の中に内在する仏界という広大な生命を表現しようとしたものと考えるとき、法華經二十八品の意図の一端をうかがい知ることができます。

さらに、この見宝塔品11に優るとも劣らないスケールとドラマで展開されるのが、次の③のグループの従地涌出品15における、地涌の菩薩群の出現です。これは、釈尊の説法の途中で、大地を叩き破って現われ、法華經の会座に連なる大菩薩たちです。

“地涌”とは“大地から涌き出した”という意味です。

あとで詳細に述べますが、簡単に触れますと、この現象もまた、私たちの想像を超えたものです。しかし、これは宇宙大の生命力、生命の大海原が、実際に私たちの生命の内奥から開き顕わす姿を、象徴したといえるでしょう。

そして、仏界——宇宙大の生命力——は、また現実社会の中では、大慈悲として発動するものですから、その大慈悲を菩薩に託して表現したといえます。

仏の永遠の存在性を明かした

——**寿量品**じゅりょうぼん

如来にょらい寿量品じゅりょうぼん16では、これまで、いわば空間的にその壮大さと尊さを示してきた仏の生命を、今度は、時間的に永遠にして無限の存在であることを、釈尊自身の体験によって明らかにします。寿量品の中に「我実に成仏してより已来このかた、無量無辺百千万億那由他なやた劫なり」という一文があります。この文の意味するところは、釈尊は五百塵点劫じんてんこくという考えも及ばない遠い昔に成仏したということです。このことは成仏の本源の鍵がどこにあったかを示しているとともに、仏になったからといって、ふつうの人間と違った特別な存在になるのではない、ということを裏づけているといえます。

さらに「我本行菩薩道ぎやうだう、所成寿命こんじゆうみじん、今猶未尽おほいじじようしゆ、復倍上数」との文により、五百塵点劫に倍する以前から、菩薩の行を行なってきたと述べています。

そして、「方便現涅槃ほうべんげんねはん」といって、これは「方便として涅槃を現する」ということで、釈迦の立場では衆生に渴仰かつごう（厚く信仰する）の心を起こさせるための方便であることを、宣言しています。仏といっても永遠に死なない存在ではなく、ふつうの人間と同じように死ななくてはならない。しかし、仏の肉身は滅びても、その教えた法は永久に残り、衆生を救う働きをしていきます。死ぬということも、仏にとっては、衆生を救う働きの一つの形態にほかならないのです。つまり、仏の死によって、かえって衆生は渴仰の心を起こすことになるからです。

以上、①②⑧のグループを通して、一個の人間生命に内在する仏の生命の尊厳さと壮大さを、ある時には空間的に、またある時には時間的に、縦横無尽に説き明かしてきた法華経は、④のグループにおいて、その仏の生命を基調にして、衆生救済の実践に励む菩薩の姿を説いていきます。

すなわち、常不輕菩薩、藥王菩薩、妙音菩薩、觀世音菩薩、普賢菩薩などのさまざまな活躍を通して、法華経が、単に、すべての人々の内奥に存する仏の生命を賛嘆するだけに終始するのではなく、その生命を限りなく汲み出していこうとする現実変革の經典であることも、明確に示しています。

以上で、法華経二十八品の大まかな流れをたどりましたが、八万法蔵の中で、これほど一個の人間生命の尊さと偉大さを賛嘆し、謳い上げた經典はほかにはありません。

古来、法華経が「諸経中の王」としてたたえられたのも、宜なるかなです。

さて、二十八品の後には、結経・普賢経がきます。これは、結びにふさわしく、二十八品の内容を要約した經典です。

四方十方を、自由に往来するという普賢菩薩が、妙法蓮華経の一法を持して、これを世界中のあらゆる地域、民族に広め伝えていくことを説いた經典です。

これは、人類共通の「生命」に根ざした妙法蓮華経が、民族、人種の皮相的な差異を超え、全

世界に流布^{るふ}していくという、世界性と普遍性を宣言したといえるでしょう。

“諸経の中の王”

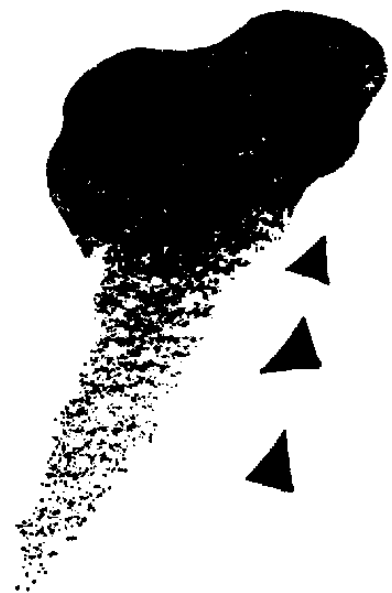
事実か幻想か

事実か幻想か——これは法華経の雄大なドラマ、通常の認識をはるかに超えた話の展開を読むとき、誰もが一度は考える問題でしょう。

序品で、靈山りようぜんえ会の会座えざに集まった三十万有余の大衆の描写、さらには、見宝塔品けんぼうとうぼんで、地下から涌出ゆじゆうつし、空中に立った五百由旬ゆじゆんの大宝塔、また従地涌出品じゆうじゆじゆうつぽんにおける六万恒河沙ごうがしやという地涌の菩薩の出現など、法華経には私たちの想像を絶する話の展開が随所に見られます。

私もかつて、法華経を序品から普賢品まで読んだことはありますが、そのときに、いつもこれらの驚くべき話の展開に、はたと困ってしまったことを、今でも懐かしく思い出します。

これらの雄大な想像を絶する話を読んで、学者たちのなかには、法華経を、想像力に富んだインド民族の特性をもっともよく表わした經典である、という人があります。法華経を、インド民族特有の想像力の産物として片づけるのは簡単ですが、しかし、想像力を駆かって、いったい何を



表現しようとしたものであるかを考えることは、大變むずかしいことです。

少し残酷な批判になると、法華經を幻想の物語としてしまう例は、これまでにありました。

しかし、こうした考え方の奥には、近代の科学的な物の見方や、合理的な思考法を絶対視する傲慢な姿勢を、私は見ないわけにはいきません。自分の限界を知っている科学こそ、真の科学です。科学的な思考法によって、昔の人々がいだいた考え方や思想を頭から否定する態度は、本当にもののわかった人とする態度ではないと思います。

私は、かつて読んだ、こうした法華經に対する安直な批評を見て、「これは本当ではない」と感じておりましたけれども、最近、ますますその感を深くします。

まず、私たちの既成の思想や物の見方を捨てて、虚心坦懷に、ありのままに、法華經そのものに迫ることが必要ではないでしょうか。

そのとき、一見、幻想的、空想的にみえる法華經の雄大なドラマも、あるはつきりした事実の壮大な表現であることを、知るのではないでしようか。いったい、その事実とは何か。それこそ、人間一個の生命の奥底に、厳然と宇宙生命が実存するという事実です。

この驚嘆すべき事実を、他の人にわからせ、ともに同じ事実を分かちあうために、いかにして巧みに、印象深く表現するかという慈悲の念が、こうした壮大なドラマの展開になったのです。

この観点から、法華經をもう一度、改めて見直すとき、法華經がいかに巧みに譬喩や物語を駆使して、その奥にある深遠な哲理を民衆に理解させようとしたかが、明白になってきます。幻想、

空想に思える描写が、じつは、いたって真剣で、緊張感をはらんだものであったことを、逆に法華經の文々句々の行間に、垣間見ることができなのです。

そうした一例にすぎませんが、法華經で説く三千大千世界を単位とした膨大な宇宙観は、長い間、まるで架空の話のようにとられるむきもありましたが、今では、宇宙科学の発達によって、この銀河系大宇宙を形容した、はるかなる達観であることが、宇宙科学者たちによって言われています。このように、仏法の達観と、科学の洞察が、今後、次元を異にしながらも、共通の視野を拡大していくように思えるのです。

「正き事はわずかなり」

古来、法華經ほど、インド、中国、日本の三国にわたって、庶民に親しまれ、庶民の生きる支えになってきた經典もありません。

ここでは、その一端を過去の歴史のなかにたどり、法華經にまつわるさまざまな話題を取りあげてみましょう。私たちにとっては、やはり日本人の心に与えた法華經の影響のほうに、密接な親近感を覚えるでしょうから、国を日本に限って、考えてみることにします。

日本人と法華經との結びつきは、奈良朝、平安朝の昔に遡ることが出来ます。

『日本靈異記』『今昔物語集』『三宝絵詞』などを讀むと、古代日本の庶民が、いかに法華經を靈

験あらたかな經典として、信仰していたかがわかります。

たとえば、『日本靈異記』には、「法花經品ほつけきようほんを読む人を咎あざけりて、現に口喎斜ゆがみて、惡報を得る緣」とか「誠の心を至して法花經を写し奉たてまつり、験有しるしありて異事を示す緣」、「法花經を写し奉り、供養することに因よりて、母の牛と作る因もとを顯あらわす緣」などの項目が多く出てきますが、この表題を見ただけでも、当時の庶民の法華經信仰の一端を知ることができます。

また、日本人と法華經の關係において忘れることのできない人物は、何といっても、飛鳥時代あすかの聖德太子しょうとくたいしでしょう。

今日では、一万円札に印刷された肖像として、ときどき思い出されるにすぎませんが、日本で最初に、法華經の注釈あらかわを著したことで有名です。それが『法華義疏ほつけぎしよ』です。これは、今日において、ますますその真価が問われた書物です。

さらに、平安朝に入ると、『枕草子まくらのそうし』『源氏物語』『平家納經のうきやう』などの随所に、法華經の思想が反映していると、今日の学界では定説となっております。

たとえば、『枕草子』を見ると、法華經が仏教の代表的な經典として、当時の知識人たちの常識となっていたことが明らかです。

しかし、江戸時代に入ると、日本の庶民に親しまれてきた法華經に対して、批判する学者が出てきたことは、新たな出来事とみながなかもとといつてよいでしょう。

江戸中期の大阪の学者・富永仲基とみながなかもとは、その著『出定後語しゅつじようご』において、法華經について、次のよ

うに説いています。

「一篇中、終始齟齬^{そご}して、全く文を成さず。かつまた、法華經一部、終始みな仏を賛するの言にして、全く經說の実なし。もとより、經と名づくべき者なし」と。

富永仲基は、法華經二十八品全体を通じて、最初から最後まで、仏を賛嘆する言葉ばかりであって、内容は何もないと断定したわけですから。

一種の文献批判の立場にあった、といえるでしょう。

さらに、もう少し時代が下ると、今度は平田篤胤^{ひらた あつたね}という学者は、富永仲基の『出定後語』をもじった『出定笑話^{しやうわ}』において、法華經は効能書^{こうのうがき}ばかりで肝心の丸薬がないと批判しました。

この両者とも、いわば、法華經が無内容であることを主張したのです。

これまで述べてきたことから明らかなように、法華經に対して、賛嘆し、絶対の信仰が持たれてきた一面、他方では、徹底的に否定される一面もあり、法華經に関する評価は、賛否の両極端に分かれています。

古来、この事態を、法華經の不思議とされてきましたが、私は、むしろ、この事態こそ、法華經が偉大な内容を持った經典であることを、間接的に証明しているように思うのです。

評価が一方的に決まるといえるのは、それだけ把握^{はあく}されやすいことを示すのであって、逆に決まらないというのは、それだけその内容が、人々の思考や認識の力を超えていることを示している、といつてよいでしょう。

この観点から考えるとき、法華經には、偉大な思想が含まれているからこそ、評価も分かれてくるように思います。

ここで驚くべきことは、これらの批判の起こるはるか前に、鎌倉時代に出た日蓮大聖人が、次のように説いている一文です。すなわち、「二十八品は正き事まさしはわずかなり讃ほむる言こそ多く候へと思食おほしめすべし（そう思いなさい）」（『妙密上人御消息みよみつしやうにん』）と述べられています。まるで、後に出現する批判を先取りしたような言葉ではありませんか。

問題は、法華經に説かれている、わずかな「正き事まさし」を発見し、把握するかどうかにかかっているようです。

また、「正き事」がわかれば、法華經がいったい何を賛嘆したかが、明瞭になってくるように思います。

そして、私は、この「正き事」こそ、法華經が人間一個の生命の全体像を説き明かした、という視点である、と確信するものです。

偉大なる精神遺産

世紀の歴史家・トインビーは、二十一世紀に、人類が語り継ぐべき十の書物を挙げたなかに、ザ・ロータス・スートラ（法華經の英語名）を挙げています。

今日、客観的にも、法華經は、人類が生み出した数少ない精神的遺産の一つであることは、間

違いありません。なぜなら、法華経こそ、人類の普遍的な基盤である「生命」を深く凝視し、こよなく賛嘆した唯一の經典であるからです。また、数少ない他の精神的遺産に対して、法華経は民衆から慕われ、生きる喜びを与え、その支えとなってきた期間の長さにおいても、まったく諸経の追隨を許しません。

私たちは、この偉大な精神遺産を無にすることなく、後世の人類に伝えていく義務があるのではないでしょうか。

とくに、最近の生命軽視の風潮を見るにつけ、今後ますます世界は、「法華経の精神」を見直すとともに、この精神に立脚しなければならぬことを、痛感するものです。

しかし、一方で、かつて日本の知識階級に知れわたった「諸経の中の王」としての経文が、今日の混沌とした危機の時代に、ふたたび広く注目されだしたことに、時代の必然の流れを感じざるをえないのです。

第二章

生命の宝のありかを求めて

第二章

生命の宝のありかを求めて

第二章

生命の宝のありかを求めて

法華經の読み方

今まで私は、法華經についてのあらましについて述べてきましたが、実際問題として、読者の方は、法華經と聞いても、いったい、どういうものか、自分の実感として理解しにくいと思います。

したがって、私が、どんなに、法華經に、混迷する現代を開くカギがあるといっても、具体的にわからない面があることでしょう。

そこで、私は、法華經を理解するうえで、もっともあなたにわかりやすいと考えられるもの、しかも、魅力的なものを、と考えて、法華經の中から、幾つかを選んで、私の体験を含めつつ述べることにいたしました。

また、たんにわかりやすい、入りやすいというものだけでなく、これを読んでいただければ、ほとんどのエッセンスは含まれております。

あなたは、きっと、漠然とながら、法華經というものが、あらゆる人々が、成仏じょうぶつできるという平等の法である、といったイメージがあると思います。じつは、このイメージがあるとすれば、これはまったく正しいものであり、法華經のすぐ近くにまで来ているのです。あらためて、構かまえて、これから法華經をやるぞ、といったギスギスした考え方をもち必要はありません。もう、法華經は目の前にあるのです。

そこで、私としては、あなたのそうしたイメージを、さらに法華經に入っていくバネとするにふさわしいものを、と考えたのです。

これから、多宝の塔が涌現ゆげんするという宝塔品ほうとうぼんとか、羊ひつじと鹿しかと牛たどの譬たとえで示される開三顯一かいさんけんいちとか、大地からたくさんくどくの菩薩じんりきぼんたちが現われてくる涌出品ゆじゆつぽんの内容、また、寿量品じゆりようぼんの永遠の生命、さらに、法華經の功德くどくとか、神力品じんりきぼんの内容など、どれ一つとっても、法華經を学ぶうえで不可欠のものです。この基礎を知っていただければ、あなたは、ここから法華經の珠玉の原理を応用し、展開することができることと思います。

遅^{たぐま}しく生きよ　〈煩惱^{ぼんのう}即菩提^{そくぼだい}〉

絶世の美女も死んでしまえば白骨

法華經以外の經文のなかで、女性がきらわれているのは有名ですが、これもその一つで、骨相^{こつさう}観^{かん}というのがあります。女性は仏道を妨^{さまた}げる働きをするから、若く美しい女性が現われても心を動かされてはならない。そのために、もしそのような女性が現われたならば、その女性が死んで墓の中に入り、その中で白骨になった姿を想像せよ、というのです。人間は無常を免れないものであり、必ずそうなることは疑いない。その姿を想像したならば、心を動かされることもないであらう、というわけです。

なんともはや、すごい修行であるという以外にありませんが、ことほどさように、仏法を修行する人々は苦心^{さんたん}慘憺^{さんたん}して、自らの生命のなかに巢食^{さうじく}う煩惱^{ぼんのう}と戦ったようです。衆生^{しゆじやう}の心身を迷わせる妄念^{もうねん}こそ、一切の不幸の原因であると考えたのが、小乗仏教の特徴であるといってもよいようです。



仏教の説くところを、順を追って説明してみますと、次のようになります。この世の中の現象はすべて無常である。すなわち変転してやまないものです。ところが、人間はそれを常住不変のものと思って執着する。そこにさまざまな葛藤^{かつとう}が起こる原因があるわけです。恋人を失いたくないと思い、富を死守しようと願い、死にたくないと考えて、生に執着する——考えてみれば、無常を無常と認めない妄想^{もうそう}からきていてはないか、ということになります。そして、それらを起こしているのが煩惱であるというわけです。

煩惱としては、さまざまな事物に対する欲望^{とん}（貪）、また憎しみ、恨み^{うら}、怒りの生命^{じん}（瞋）、ものごとの本質をわきまえない愚かさ（癡^ち）、自分を大^{たい}したものだと思う慢心^{まん}（慢）、真実を信じようとしない生命^ぎ（疑）等々があげられています。ひとくちに言えば、広い意味での人間のエゴのなせるわざであるともいえましょう。

したがって、この煩惱を断ち切る以外に、真実の悟り、人生の喜びは獲得できないという考えに立ちます。小乗仏教徒における仏道修行は、かなり厳格なものにならざるをえないわけです。これは仏教にかぎらず、その前にあったバラモン教などにもあった考えですが、現在のわれわれの感覚からすると、言語に絶するものがあります。

たとえば、呼吸を止める修行というものがあるのですが、まず最初に鼻や口から息を止める。われわれなら、もうそれで一卷の終わりですが、そうすると、耳から息が出入りするらしい。そのときの苦痛は、耐えがたいものがあるという。その耳からの呼吸も止め、ついには全身に至る

という壮絶な修行であるといわれる。

ふつう、針のムシロの上にすわったり、火のついた炭の上を裸足^{はだし}で歩いたりする修行を耳にしたりして、すごい修行だと思うものですが、それなどまだ穏やかなものなかもしれません。小乗教では僧侶に二百五十の戒律^{かいりつ}、尼僧^{にそう}では、さらに上回って四百近い戒律を設けていますが、まさにがんじがらめとは、このことでしよう。

考えれば、そのような戒律など、守れる道理がないのです。たとえば、もっとも初歩的な戒律である不殺生戒^{ふせつじょうかい}もそうです。われわれ人間は、毎日無数の生き物を殺しています。肉食をしないと、では、植物は生物ではないのかということになる。不妄語戒^{ふもうごかい}（ウソをついてはいけない）にしても、守った人など皆無^{かいむ}でしよう。私はウソを申しませんという人こそ、大ウソつきであるといわれるぐらいです。

それに、もしそれらの戒律を守ったとして、果たして煩惱を断じ切れるのか。実際には、過酷な修行を貫いた仏教僧たちも、煩惱を断ち切ることはできなかったようです。そこで小乗教の最後の悟りは、煩惱を生み出しているわが肉体を滅することを要請するようになる。これを灰身滅^{けしんめつ}智^ちといっておりますが、文字どおりわが身を灰にして智を滅し、二度と煩惱の集積であるこの世には生まれてこないという修行です。悲惨という以外にありません。これが究極の悟りなら、その思想は誤っていると断言しても、けっして過言ではないと私は思います。

煩悩ぼんのうはおおいに燃やすべきである

じつは、わが肉体を滅する以外に煩悩を断ずることができないという事実の中に、解決の鍵があるのではないでしょうか。小乗教徒たちは、その事実突き当たったときに、発想の転換をすべきだったと思うのです。

それは、煩悩というものは、わが生命の存するかぎりある、いわば生の証あかしであるというところから出発すべきだということです。生きているかぎり煩悩はある。ならば、煩悩を断じようとする 것과自体、誤った発想ではないでしょうか。ここで法華経の煩悩即菩提ぼんのうそくぼだいの原理が浮かびあがってくるのです。

考えてみれば、煩悩というものがあるからこそ、人間はさまざまな努力をし、大げさにいえば文明の発達もあるのではないのでしょうか。冬を暖かく過ごしたいと思うからこそ、暖房器具を発明し、夜も明るくと考えて、電気も使用されるようになったのです。早く目的地へ到達したいという欲望がなければ新幹線も生まれなかったにちがいません。もっとも、騒音公害も起こしているのは問題ですが――。

少し恥ずかしいことなのですが、私の小学校時代に、ちょっと好きな女の子がいました。みんなからもアイドルになっている子でした。今では名前も忘れてしまったほどですが、その子からよく思われようと思って、一生懸命勉強したものです。それは初恋と呼べるほどのものではないのでしようが、淡い思慕のようなものが、ひとつのエネルギーとなって私の生命をたきつけ、勉

強への意欲となって噴出したのでしょう。おかげで勉強が好きになり、学校へ行くのが楽しみなったほどです。

煩惱というのは、いわば生命の「エネルギー」みたいなものではないでしょうか。そのエネルギーを失わせ、断ち切ろうとするのは人間の自然の生き方に反するものだとも思うのです。そのエネルギーをどう生かし、どの方向に向かわせるか、そこに発想の原点を置かなければならないはずです。

法華経を締めくくる経文として有名な普賢経に「煩惱を断ぜず五欲を離れずして、諸根を浄め諸罪を滅除することを得」とあります。

さまざまな煩惱、欲望を断じ尽くすことなく生命を清らかにし、さまざまな罪を滅することができる法を説いたものです。この考え方の原型は、すでに大乘経、たとえば般若経の中などにもあるのですが、法華経で明確にされたものです。

日々の生活の中で、悩み、苦しみ、煩悶する生命——じつは、その生命の中にこそ悟りがあるというのが煩惱即菩提の原理です。というより、悩みがあるからこそ、悟りもある。悩みを避けるところに悟りがあるのではなく、悩みと対決し、その本質を見つめ、それを自在に使いこなしたところに、真実の力強い悟りがあるということです。人生を生きぬく活力は、その時、脈々と生じるのではないでしょうか。

日蓮大聖人は、執着を離れるということを、執着を明らかに見ると読め、と言われています。自らの生命の中で動く煩惱の火を明らかに見つめ、その火を、現実生活を賢明に処する知恵の灯に変えていくこと、それが煩惱即菩提なのです。また「御義口伝」では、「煩惱の薪を焼いて菩提の慧火現前するなり」とあります。煩惱という薪がなければ、菩提の火は現われないということとです。

煩惱をなくす必要はない。恐れず見つめ、自由自在に使いこなすだけの力強い主体を確立できれば、煩惱のエネルギーは、自身を大きく前進させることに働くはずなのです。

煩惱を大いに燃やせ——とはまた、ずいぶん思いきった発想です。大胆だともいえます。しかし、煩惱を燃やしても十分にコントロールできるだけの人間主体の確立を説いているのですから、それが当然だともいえましょう。また、法華経は、それだけの包容性と力をもった経文なのです。この人間洞察に立脚するならば、私は人間であることへの愛も、慈しみも生まれることと 생각합니다。

主体性ある「現代の主人」となれ

少し話が違いかもしれませんが、ずいぶんと昔になりますが、私は先輩に自分は怒りっぽくて困っているがどうしたら治るか、と質問したことがあります。その先輩は、戸田前会長の言を引いて説明してくれました。

「怒りっぽいということが、どうして治さなければならぬ性質なのか。それは確かに、相手の話を聞かないで、一方的に怒るとするのは悪いことかもしれない。しかし、生命を傷つける存在、邪悪に対して怒りっぽいということほど立派で素晴らしいことはないか。悪を見て怒らない人間のほうが、はるかに軽蔑すべきである。怒りっぽいという性質をどう変えるかではなく、どの方向に生かしていくかが大切なのだ」と――。

私は、あなたに、煩惱を大いに燃やそうと訴えたいのです。

少し暴言に聞こえるかもしれませんが、傍観者になり、無気力な存在でいるよりは、煩惱を燃やし煩悶する人のほうが、ずっと人間的であり、生きているという実感がいたします。そして大いに苦しみ、悩み、その中から真実の道を求めるのが、人間としての人生の在り方ではないのかと思うのです。

もちろん、エゴむきだしの煩惱がまかり通れば、世の中、骨肉相食む修羅場になることは間違いないありません。それを防ぐためには生命の奥底から、煩惱を使いこなせるだけの「生命力」を確立しておく必要がある。そこに力ある法華経の存在価値を認める理由があるわけですが、そうしてこそ、人間は主体性ある「現代の主人」となれるのではないのでしょうか。

管理社会の部品と化し、情報に踊らされて、自分というものを見失った人間は、もはや人間とはいえないでしょう。「自分」というものを持ち、そのゆえに悩んでいる人のほうが、私は好きです。

法華經の煩惱即菩提は、煩惱というものを大胆に受け入れ、そのなかから悟りを見つけようとした革命的な思想の經文であるということが出来ます。その中に、現代人を蘇生させる鍵がひそんでいるように思うのです。

束縛されない自己の発見 かいさんけんいち 開三顯一

人間生活には法則が大事

私は春が好きです。気持ちが晴れやかに浮き立つのを覚えます。どうしてかといわれると、なんとなくね、と答えるしかできませんが……。だが、多少太り気味で寒がりやの私のことです。から、冬の間、身を包んでいた重いオーバーから解放されるということだけでも、伸びのびした生活ができる。案外、理由はそんなところかもしれません。

考えてみれば、寒いというと衣服を重ね着し、暑いというと薄着になる。これは他の動物にはみられない人間独特のものです。渡り鳥は、冬になると暖かい地域を求めて飛びゆくし、動物の中でも両棲類りょうしせいや爬虫類はちゆうるうは冬眠して冬を越す。ともに四季の変化に対応する方法を、人間以外の動物も、本能的に身につけています。

人間の独特さというのは、四季の変化、暑さ寒さに対して、いわゆる人工的な方法で対応しているところにあります。人間の、この自然への対応は、自然の移り変わり、法則というものを、



理性的に知るとともに、それに順応するために衣服をつくりだした点にありますが、ポイントとなるのは、やはり法則性の認知と対応に求められるでしょう。

私は自動車の運転はできませんが、親しい友人の車に同乗して、いつも感心しているのは、そのハンドルさばきの見事さです。この自動車の運転も、自動車のこまごましたメカニズムを知る必要はなくとも、クラッチの操作のタイミングや、ブレーキ、ハンドル操作など、自動車を走行させるための知識、法則を実際に身につけていないと運転もできません。私のような、まったく法則を知らぬ人間がハンドルを握ったら、ものの十メートルも行かないうちに、大惨事が起きることは必至です。

さて、多少横道にそれましたが、ここで述べたかったのは、法則を知ることが人間生活にとって大切な要件である、ということです。

法華経には、これまでも触れてきたように、種々の教えが譬え話たとをとおして説かれています。今、ここで取りあげる「羊と鹿と牛の話」もその一つであります。この譬え話も、たんなる話として知っただけでは、価値を生じません。それはちょうど、自動車は知っているが運転できないというのと同じです。この話から、その奥に秘められている真理、法則を知ることが大事なのです。

なにか、はじめに結論を述べてしまったかっこう恰好になりましたが、いちおう、その話の内容を述べてみましょう。

——昔、インドに大長者がいた。長者の大邸宅には五百人ほど住み、生活を楽しんでいた。ところがある日、火事になり、多くの子どものうち三十人ほどが逃げ遅れてしまった。長者は必死になって、早く逃げ出すように叫んだが、遊びに夢中になって、その声が届いても信用せず、屋敷から出ていかなかった。

いよいよ危険を感じた長者は、一計を案じた。それは子どもたちが、日ごろ珍しい玩具を好むことを思い出し、子どもたちを助けだすために「方便ほうべん」を用いるのです。

長者が用いた方便というのは、「表にみんなの好きな羊の車、鹿の車、牛の車があるから、早く出てきなさい」というものです。

この言葉に引き寄せられるように、邸内の子どもたちはわれ先にと出てきました。そこで長者は子どもたちを火の粉の届かない安全な場所へ避難させ、自分はホッと安堵あんどの胸をなでおろした。

長者の言葉を信じて出てきた子どもたちは、目的の「羊の車や鹿の車や牛の車」を早くくれるようにせがんだ。そこで長者は、今まで貯えてきた無上の宝物で、一つの立派な車をつくった。それは力の強い大白牛だいびやくこ（体の大きい白い牛）で引かれていたので大白牛車だいびやくこしやといった。子どもたちはみな大喜びで、その大白牛車に乗って自由自在に遊びたわむれることができた——。

この物語は、法華經ひふくきやうの譬喩品ひゆひんに出てくるものです。これを通して經文では「三界は安きこと無し猶火宅なほかたくの如しごと」と説いています。三界とは欲望の世界、物質の世界、精神の世界ということ

で、これにも深い意味がありますが、ともかくここではその説明を省略し、現実の世界という意味としておきます。それにしても、はるか昔の古典ではあっても、ずばり、混乱する現代社会をたとえているではありませんか。さらには火宅に遊ぶ子どもたちをとおして自分一個の安逸を貪り、遊戯にふけり、冷静に現実を直視しようとしないう人間にありがちな性向を鋭く指摘しております。

長者は子どもたちを無理やり屋敷外へ連れ出そうとしたものではありません。あくまでも子どもたちの自発的な意志を尊重しているのです。また長者は、日ごろから子どもたちが、いったい何を欲しがっているかを見きわめています。人間学的にいうならば、人間をどう育てるかという立場において、日ごろから子どもたちが何を欲しがっているかを知り、しかも子どもたちの自発の意志を伸ばそうとしていたといえます。

こちら側の一方的な判断に頼らず、相手の気持ちになつて接していく。このことは、人間関係を考える場合にも、大事な基本姿勢でありましょう。

究極は仏の力を借りず、自力で法の悟りを開け

譬喩品は、この文のあとで次のように教えています。

「今此の三界は 皆是れ我が有なり 其の中の衆生は 悉く是れ吾が子なり 而も今此の処は 諸の患難多し 唯我れ一人のみ 能く救護を為す 復教詔すと雖も 而も信受せず 諸の欲染

に於いて 貪著深きが故に 是れを以って方便して 為に三乗を説き 諸の衆生をして 三界の苦を知らしめ 出世間の道を 開示演説す 是の諸子等 若し心決定しぬれば 三明 及び六神通を具足し 緣覺 不退の菩薩を得ること有り 汝舍利弗 我衆生の為に 此の譬喩を以って 一仏乗を説く 汝等若し能く 是の語を信受せば 一切皆當に 仏道を成ずることを得べし」

詳しい解説は省略させていただきますが、ここで釈尊が言わんとしたところは「一仏乗を説く」という文に集約されます。この「一仏乗」というのは、その前に「三乗を説き」という語に相對されるものですが、次に、この点について少し触れてみましょう。

三乗というのは「声聞」と「緣覺」と「菩薩」の三つをいいますが、声聞とは「仏の声を聞く」ということで、釈尊の教えを聴聞する者、すなわち弟子のことです。また声聞には、教えの内容を理論的に理解しようとする精神の働き、知的態度が特徴的です。

また、緣覺とは獨覺とも呼ばれ、教えをとおし、それを縁として「独り」で「覺る」ことを本分とするところからきています。したがって、この緣覺にみられる精神的機能は、ある種の芸術的センスをもったものと考えることができます。

次に菩薩ですが、菩薩の本領は仏の教えを実践するところにあります。仏の教えを理論的に理解すると同時に、それを行動の次元で証明するのが菩薩の役割であり、特質なのです。

ここに、前の声聞、緣覺（これを二乗という）と菩薩の違いがあります。

以上で三乗については概略、その内容を把握されたことと思います。そして「三乗を説き」と

いうのは、今のべた「三種類の人々を対象とした教えを説いた」ということで、それぞれに適合した説法のことです。法華経以外の教えは皆、三乗の教えの範疇はんちゆうに入るものですが、では、この「三乗の教え」と「一仏乗の教え」との違いはどこにあるのでしょうか。また、「一仏乗の教え」とは为什么呢。

三乗の教えの特徴は、釈尊があくまでも説法する相手の側に立って、つまり聴衆の理解能力を考えたうえで、説く法の内容が取捨選択しゆしやされています。たとえば、一時、アインシュタインの相対性理論を説明するのに、浦島太郎の伝承童話がよく使われたようなもので、相手が中心であり、したがって、説かれる法の内容も相対的な域を脱することではできません。

それに対して、一仏乗の教えとは、釈尊が修行の結果到達しえた真理、法の実体というものが説法の中心となり、それを聴く大衆の理解力を中心とはしていません。それは仏が無慈悲だからではないのです。真実の法を明確にすることによって大衆は、これまで釈尊の説法によりかかって修行を積んできたのが、自力で法を悟さとることが可能となったわけです。

釈尊は法華経で自らの悟った法（サンスクリット語で、ダルマ）をすべて明らかにしました。そして、それ以外のもろもろの教えは、三乗の教えで相対的なものであることを断言したのです。さきにあげた譬喩品の「貪著深きが故に」とんじやく 是れを以って方便して 為に三乗を説き」という文章が、そのことをよく示しています。

このように、三乗の教えを開いて、一仏乗の教えである法華経を説くということを「開三顯一」かいさんけんいち

(三乗を開いて一仏乗を顯す)といひます。

以上のように「羊の車、鹿の車、牛の車」は、それぞれ声聞、縁覺、菩薩の三乗を表わし、大白牛車は一仏乗を表わしていますが、方便品にも「如我等無異」(我が如く等しくして異なること無からしむ)とあるように、仏の目的は自分と同じ境涯に人々を導くことにあつたのです。つまり、仏界を人々に開かしめるところにあり、これが仏法の根本原理なのです。これが、人間は神の似姿であり、神にはなれないとするキリスト教とは、根本的に異なるところのものです。

しかし、「等しくする」といっても、けっして人間個々の特性や性格などをおしなべて画一化してしまふということではありません。むしろ、人間ひとりひとりの特質を存分に發揮させるところに主眼点があります。

日蓮大聖人の「御義口伝」のなかに「桜梅桃李」という言葉がありますが、これは桜には桜の特質、梅には梅の、桃には桃の、そして李には李の特質があるように、それぞれ人間の個性を最大限に發揮させていくのが法華經であり、妙法蓮華經という法の華を、生命の中から引き出し、現実の世界に開かしめていくことを意味しています。

大白牛車は悟りの象徴

ここまで述べてくると、あなたは、「羊と鹿と牛」の話が、なぜ法華經のなかに取り上げられたか、というわけがおわかりのことと思います。

羊の車、鹿の車、牛の車を欲しがるというのは「貪著とんじやく深き」人間のつねであり、仏法は、まず、この人間の赤裸々な姿を見つめつつ、その奥に「貪著」に束縛されない、自在な自己を発見しています。大白牛車という金銀の宝物で飾られた乗り物は、仏法の悟りを譬喩ひゆ的に述べたものでありこれは法華経の精神からいって、生命の尊厳を言い表わしたものにほかなりません。

冒頭で、私は季節の話をしたり、自動車の話を出して法則を知ることの意味を述べました。法則を知るということは、それだけ自由な活動の範囲が広がり、生活をエンジョイできるといふことに通じます。法華経の目的は、生命の法則を知るといふことにあり、それによって、生命の自由を無限に高めていく点にあります。生命の自由とは、自らの煩惱によって束縛されない自己の発見、さらに他者への幸福のための自我の拡大ということなのです。

私は前に、プラトンの『国家』を読んだことがあります。そこに出てくる話で、有名な「洞窟どうくつのたとえ」というのがあります。そこでは、人間は洞窟の囚人にたとえられています。手足と首を縛しばられていて、前方の壁のほうしか見ることができない。そして、光は後方の壁の上から入ってくるので、囚人に見えるのは自分たちの影だけである。つまり影の世界しか知らないのです。このことをプラトンは『国家』の中で、師のソクラテスに語らせていますが、これは真実を知らない人間の虚構性をついた話として有名です。

影の世界には、影の法則というのも当然あるでしょうが、それは主体である人間の自由が、ちやうど手足を縛られ、首を前方に固定されている囚人と同じで、確保されていません。この場合

如來藏經五言威如觀心集抄
本朝妙見道隆
唐詩經卷之五
世間如是也
夫一心具一切法由不可法界又具一切法由
百法界由一界具一切法由一切法界

影の法則を知るということは、日常生活にとって必要なことではありませんが、もっと重要なことは、縛られた手足、固定された首の自由を回復するというところでしよう。プラトンがソクラテスに語らせたこの啓示は、興味深い。

ところで、法華経で説く哲理の数々は、仏界という実像の幸福感、自由感から、三乗も、いな、地獄界まで、一切を用いていく哲理なのです。さまざまな働きを持つ人間生命の活動を忌み嫌うことなく、人間であることへのかぎりない共感に立って、人間の持つ最高の善性というものを触発、高揚させていくのが、真の仏法ではないでしょうか。

大地の底から出現した菩薩たち 〈地涌の菩薩〉

仏法流布を指導する四菩薩

法華經の從地涌出品15に、こんな不思議な物語があります。

それは、釈尊が自身の滅後に法華經を流布する者は誰かいないか、と呼びかけた時のことです。法華經の會座（説法の場所）に集まった人々は、それぞれに、滅後、娑婆世界で法華經を流布することを誓った。しかし釈迦は、その人々を「止みね（もうやめなさい）善男子、汝等が此の經を護持せんことを須いじ」と制止したのです。

その時、突然、大地が震え裂けて、その中から無量千万億の菩薩が一時に出現したというのです。それらの菩薩は、皆金色の身をして光明に包まれていました。そして、ひとりひとりが、無数の眷属（その後につづくもの）を連れていたのです。これらの菩薩は、このように大地の底から出現したので、地涌の菩薩と呼ばれます。この地涌の菩薩に、四人の指導的立場の菩薩があり、その名を上行菩薩、無辺行菩薩、淨行菩薩、安立行菩薩といました。



この物語は、まったく唐突なものであり、合理的思考にならされた私たちには、おとぎ話としてしか受け入れられない性質のもです。しかもこの地涌の菩薩の出現が、法華經の中心をなす「じゅりよう寿命品」の說法への機縁となっており、後に釈尊から仏法への一切の付嘱を受けるということになっては、法華經全体の意味までもが疑わしいものになってしまいます。地涌の菩薩とは、いったい何者なのか。それが大地の底から出現したとは、何を意味するのか。私が高校二年の夏休みを利用して、徹底して『御書』を読んでみようという契機となったのも、またその後も、もつとも関心を引いたものの一つが、この問題でした。

高校時代といえば、想像力に富んだ時代です。空想の世界の中に、地涌の菩薩の出現を描いているかぎりにおいては、これはなかなか壮大な儀式といえます。釈迦の前に大勢の聴衆が集まっております、說法を聞いている。その人々に向かって、釈迦は「誰か私の法を、私の滅後に生命をかけて弘める者はいないか」と呼びかける。そこに集まった人々は、けっして臆病な人々ではありません。むしろ、社会的地位や、名誉、財産を捨てても、真実の人生の生き方、生命と宇宙の真実の法則を説いた思想を求めるといふ、強い求道の心きゆうどうに燃えた人たちでした。それでもなお、釈迦の滅後に正法しょうほうを弘めていくことを誓うには、いささかのためらいがあったのです。

新しい思想というものを、人々の心の中に植え、育てあげることが、なみたいていのことではありません。それが真理であればあるほど、人々の抵抗が大きいということは不思議なことです。真実の思想に立つということは、それだけ、自己の古い偏見と厳しく対決しなければならないこ

とを意味するのでしょうか。正法の流布にあたっては、さまざまな大難があり、不屈の忍耐が必要であることを、釈迦の姿を通して弟子たちは知っていたのです。

しかし、そのためらいを乗り越えて、勇気を奮い起こして、弟子たちは滅後の弘経（弘の教えを弘めること）を誓ったのです。にもかかわらず、釈迦はそれを制止した。いったいなぜか。それらの人々の力量や、決意では、法華経を滅後に流布することは困難だとみたからです。——とすると、法華経伝持の人は、誰もいなくなってしまうではありませんか。

ここに地涌の菩薩の出現があり、釈迦から法の流布を託されるのです。

さぞかし、地涌の菩薩は力があるのだろう。仏法を、釈迦の弟子たちよりずっと深く知っているのだろう。仏法流布の決意も、ずっとずっと深いに違いない。そんな立派な菩薩たちが、三千大千世界という、この宇宙を埋めつくしたというのだ。そして、四人の代表的指導者がいたという。いったい、どんな顔をしていたのかな、と私は考えました。ところが、この菩薩は、大地の底から出現したという。モグラモチでもあるまいに——。ここで、いつも私の空想は断ち切れ、地涌の菩薩とは、いったい何者なのか、そして、大地から出現したというのは、いったいどんな意味を持っているのかという、振り出しの疑問に戻るのです。

四菩薩は釈尊の中から生まれた

そんな時、戸田前会長が講義の中で、日蓮大聖人の「御義口伝」を引いて、地涌の菩薩を説明

している箇所に出会ったのです。

御義口伝には、『輔正記』という書物の文が引かれてありました。「経に四導師有りとは今四徳を表わす。上行は我を表し、無辺行は常を表し、淨行は淨を表わし、安立行は樂を表わす。有る時には一人に此の四義を具す」と。この文に出会って私は、おそまきながら、上行・無辺行・淨行・安立行という四大菩薩に代表される地涌の菩薩も、また釈尊の己心——それはつまり、私たち自身の生命になります——の働きを表わしたものであることを知ったのでした。釈迦という仏の生命に備わった「常・樂・我・淨」という強い働き、それを法華経では、地涌の菩薩、なにかんずく四大菩薩として表現したのです。

——ところで、そこまで理解できても、なおわからないことが、一つ、私にはありました。それは、それらの菩薩が大地を震裂させて、その中から出現したということの意味です。

御義口伝には、次のように訳されてありました。

「此の四菩薩は下方に住する故に『法性之淵底玄宗之極地』と云えり、下方を以て住处とす。下方とは真理なり」と。

「法性之淵底玄宗之極地」とは、大変むずかしい言葉ですが、生命の究極、根源の實在を、中国に出現した天台大師が、このように表現したものです。さらに、天台宗では、これを「真理」ともいっているわけです。この「真理」は、一般哲学的に使われている「真理」というよりも、大宇宙、生命自体を掘り下げていったところにあらわれてくる普遍の實在といった意味です。

いふなれば、地涌の菩薩は、自己の生命を奥深くに広がる普遍の實在——これを、日蓮大聖人は、南無妙法蓮華經であると結論づけられています——から、あらわれてくるというものです。

池田会長は「自己の生命の奥深くには、法性ほつしやうのえんでいげんしゆうのごくち之淵底玄宗之極地（南無妙法蓮華經）という確たる實在がある。それに到達し、そこから、豊かな生命力をくみ出していった時に、人間としての真価が発揮されていくのであります。卑近な例でいえば、地下八百メートルのところ温泉があったとする。それを、七百メートルしか掘らなければ温泉は出ない。八百メートル掘ってはじめて温泉が噴き出してくる。と同じように法性の淵底に至って、これまで冥伏みようふくしていた力が厳然とあらわれてくる。ここに到達していく生命の開拓作業が日々の信仰、唱題なのです」と述べています。

つまり、地涌の菩薩は、なにも、現実の地球の大地を割ってあらわれてきたのではなく、私たちの生命の奥深くに息づいている「南無妙法蓮華經」という大生命から湧いてくることになります。とすれば、地涌の菩薩が大地を割って出てきた意味は何でしょう。それは私たちの生命の中に、いつのまにかつくりあげられた、地殻ともいうべき、浅い物の考え方や、日常的習性の層を指さしているとはいえないのか……。

私たちは、自分自身の生命の中に、堅い殻からができあがっていることに、なかなか気づかないものです。わが生命は、虚空こくうのごとく広がって、妨さまたげるものとてない、と思いがちです。しかし、一歩ひるがえって、よくよく自身の心をのぞいてみると、たしかに、一つの層をみることができ

ます。

つまり、自分自身の物の考え方が一つのことには固執して、なかなかそこから抜け出せず、幸福を阻害している例は多々あるはずです。人種差別の壁、職業の貴賤きせん、上下による人間差別の壁、科学万能主義の信奉による偏向等々、すべて人間の心の中に築かれた、地殻とはいえないでしょうか。

この生命の地殻を突き破ったところにこそ、真実の自由の「常楽我淨じょうらくがじょう」の境涯があることを示したものの——それが、地涌の菩薩たちが大地を震裂させて出現したことの意味であるといえるでしょう。私は当初、あまりに譬喩ひよの表面にこだわっていたことに気づいたのです。これは私の学が進んだというより、やはり、境涯の問題だと思えます。法華経との取り組みで自分の経験からいえることは、壮大なドラマの演出の陰のドラマの訴えるところを、深く知らなければならぬということなのです。

さて、この地涌の菩薩だけが、法華経を釈迦から付嘱ふぞくされたということは、法華経が、人間生命にまつわる一切の殻を打ち破った法であり、自己の殻を打ち破れる人のみが、法華経の真意を体得できることを示したものとみることができます。

私たちの中にも菩薩はいる

ところが、このようにみると、地涌の菩薩の代表である四菩薩は、自己の生命の殻を打ち

破ったところにある、真に自由なる生命に備わった、本来の働きを表わしていることになりま
す。つまりそれは、仏という生命に備わった徳を表わしていることになり、私たちの生命の奥深
くに眠っている力でもあります。

ここでは、その四菩薩の徳、人間生命に備わった幸福への力を、ごく簡単に紹介しておくこと
にいたします。

御義口伝の文によれば、上行菩薩は、常樂我淨の「我」を表わし、真の主體的な生命の発動を
表わします。外のものに振り回されることのない自身の確立ということなのです。

無辺行菩薩は、「常」を表わし、無常の変転を繰り返す現象世界の奥にあって、その変転を起
こさせていく力を表わす。永遠の生命觀のうえから、人生を逞しく生きていく力といえましょう。
淨行菩薩は、「淨」を表わし、さまざまな悪縁に染まらず、むしろ環境に働きかけて、すべて
を浄化していく力を表わす。自身の生命の濁りや煩惱に束縛されない力なのです。

安立行菩薩は「樂」を表わし、いかなる社会、境遇にあっても、それを自己の生命発動の縁
として楽しみきっていける力です。

この四菩薩の徳が私たちの生命にきちんと備わっていて、この偉大な力が生命の大地を破って
現われるというのが、地涌の菩薩出現の儀式の意味なのです。

この四菩薩を代表とする地涌の菩薩は、経文には「泥沼の中に清らかに咲く蓮華のようだ」と
ありますが、これは泥沼のような現実社会の中でこそ活躍し、社会変革の万波を起こしていくと

いう意味です。目を開けば、この儀式のなかに私たちの人間としての生き方への示唆^{しき}が判然としているではありませんか。

壮大な儀式のドラマの主役である地涌の菩薩とは、混迷の現代に、変革と建設の指標を与えゆく人間群といえるのです。

生命はこの世限りかへ^{じゆりようほん}寿量品に説く永遠の生命

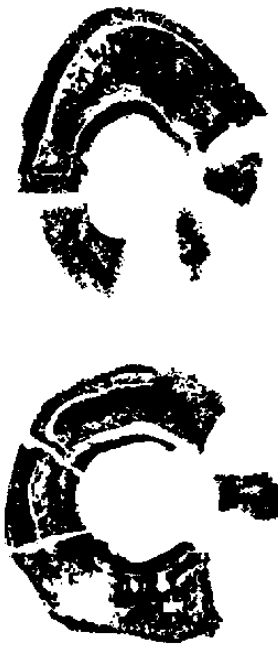
不死を求めた古代の勇者ギルガメシュ

メソポタミアで発見された紀元前二千年ごろのものに、^{せつけい}楔形文字で、次のような物語が記されていたということです。

あるところにギルガメシュという勇傑の^{ほま}誉れ高い男がいました。獅子と戦い、天の雄牛^{おうし}と戦い、怪獣とも戦って、すべてに打ち勝った勇者です。彼は、世の中に何も恐れるものがありませんでした。

ところが、彼の親友エンキドゥが、病いのため突然倒れ、世を去りました。悲嘆にくれたギルガメシュは、この時初めて、自分の力ではどうすることもできない問題があることを知り、どうしようもない恐れと、不安が彼の心を占めてしまいました。

以来、ギルガメシュは、不死を求めて、しゃにむに旅をつづけました。途中、酒の女神シドゥ



リが経営する酒場に立ち寄った時、彼女はギルガメッシュに次のように語りかけました。

「ギルガメッシュよ、お前はどこまでさまよいゆくのだ。お前の探す不死は見つけられないよ。

神々は人間をつくった時、人間は死ぬべき者と定めたのだ。不死は神々の手にある。ギルガメッシュよ、腹を一杯にし、昼も夜も楽しめ。日々毎日陽気に暮らせ。夜も昼も踊り遊べ。衣服をきれいにし、頭を洗い、水を浴び、お前の手を支えてくれる子どもを期待せよ。お前の胸の中で妻を楽しませよ。それこそが人間のつとめというものだ」

——生死の問題は「神」に委^{まか}せ、現実生活にだけ目を向け、楽しんでいればよいと誘いかけたのです。しかし、ひとたび、生死という人生の根本命題に目覚めたギルガメッシュにとって、この説得は何の力もありませんでした。

シドゥリの酒場を出てから、大変な苦労を経た後、ギルガメッシュは、大洪水を生き延び、不死を獲得したといわれている聖王ウトナピシュティムのもとへ行きます。しかし、そこでも、ついに不死の法を聞くことができず、ギルガメッシュは泣き崩れてしまいました。

大略以上のような話です。私はこれを聞いて、人間の根本的問題は、いつの時代も変わらないものであり、人間の英知は、つねに鋭く、そこへ光をあてているものだ、ということを実感しました。と同時に、現代人は、この「生死の問題」を巧みにおおいかくし、というよりも、それを避けて、現実の華やかさに、自らもおぼれさせているのではないかと考えました。一見、華やか

な現実の奥にある、生死という冷厳な法則をしっかりと見つめたギルガメッシュが、現代の人々の心の中に蘇^{よみがえ}ってもいいように、私には思えるのです。

生は、人間に一切をもたらし、死は、その人から一切を奪^だい去^{はな}っていきます。とはいえ、死をきらって永遠の生を願うことの愚かさは、現代の人々は、誰^{だれ}人も知^しっていることです。とすれば、死の「意味」を究^きめることこそが、現代のギルガメッシュに課せられたテーマであることになります。これに対して目をつぶってしまうのは、土台の点検をしないままに、ビルを建てていくようなものといえるでしょう。古来の最大の文学的テーマが、この生と死にあったことから、それは窺^{うかが}われます。

死の影にとらえられた私

生とは何か、そして死とは、生命は、はたして今世限りのものか、それとも永遠につづいていくものなのか——この問題は、誰もが、必ず一度は当面し、対決しなければならぬことといえるでしょう。そして問題のあまりの深刻さと不可解さに解決をあきらめ、ふたたびそっと、心の引き出しの奥深くに解答用紙をしまい込んでしまう人もいます。また、本当は不満ながら、一応の解答をつくって、無理に納得をして、現実生活の中で検算をして、その解答の不確かさを確認することを恐れて、現実とは切り離された観念の世界のこととしてしまう人もいます。

私も、かつてこの問題をさまざまに考えてみたことがありました。それは、高校時代、仲のよ

い同級生が山で遭難したのが、きっかけでした。昨日まで話もし、同じような生活をしていた級友の席が一つポツカリとあいているのを見るにつけ、いいようなない虚^{むな}しさが心を占めたのを、今でも覚えています。

ギルガメシュではありませんが、幼いころ死線をさまよった経験とともに、私もこの事件によって、ふたたび「死」の影を突きつけられ、同時に、自分自身の生きていることの意味を考えはじめたものです。その考えの手掛かりとなったのは、それまでの人々の、生死に関するさまざまな考え方でした。もっとも、このころ、私自身かなり仏法に関心を持ち、教学に取り組んでいたために、仏法の生命論に、確信を抱いてはいましたが、自分なりに主体性をもって、把握したかったのです。

仏法は、それだけの広さと、大きさをもっていることも知っていたからです。その中でも、もっとも手ごろでとっつきやすかったのは、人間の生命は、生によって始まり、死によって終わるという考え方です。一見、これは、ひじょうに科学的で、現実に即した見方のように思われました。しかし、よく考えてみれば、これでは説明できないことが無数に出てきました。私は小さいころから病弱な体質で、友だちと遊びまわれない時など、どうして自分だけがこんなに体が弱いのだろうと考えました。また、人間には、やはり宿命とか運命とかいったものがあると考えるほうが、実感として納得できるものでした。というのも、人間は生まれ出た時から、ひとりひとり大きな差別をもっていることになりませんが、この差別を、どのようにして説明したらよいのか、と

いうことを考えてみたのです。

生によって始まり、死によって終わるという考え方からすれば、その差別は自然に生じたものであり、人間は与えられたものとして黙ってその差別を受け入れなければならぬことになりました。客観的に人生を見ているかぎりにおいては、それもよいでしょう。しかし、人生とは主観的なものであり、現実の差別に泣く人にとっては、まったく解決への道が開かれないことになってしまいます。

また、生前、どんな生き方をしても、死んでしまえばみんな無に帰するとするなら、すこし乱暴な言い方をすれば、やりたい放題のことをやって、それでどうにも身動きがとれなくなったら自殺でもなんでもしてしまえばよいということになります。私にとっては、このような考え方は大事な何か欠落しているように思えたのです。

もっとも、これはこう考えることも可能です。すなわち、一回限りの生であるがゆえに、その一生を大事にすべきだという思考法です。これは、かなり私に説得力をもって迫ってきました。しかし、それでは生まれて間もなく死んでいく人もいます。あるいは途中で不慮の死にあう人もいます。私とて明日もわからぬ人生を送っている。それだけでは、どうしても納得はいかなかったのです。

その次に私の前に現われた、生死についての考え方は、生命は死によって終わることなく、霊魂となって来世へ続くという考え方でした。

これは、今世における行動の結果が来世において清算されるという意味においては、生命を今世限りのものとみる見方よりも、少し進んでいるように思われました。しかし、この考え方でもなお、生まれついでの人間の差別は、神ないし不可思議な力によってもたらされたものであり、当人の関与しないところにおいてなされた「いたずら」としてしか説明できないことになってしまふのです。また、来世（天国とか、地獄とか）という、まったく知覚できない世界の存在を認めることも、私の合理的思考がゆるしませんでした。

「寿量品」によつて「死」を新しく見直す

私はやはり、仏法の生命論がもつとも納得がいくのでした。そして「寿量品」の次の言葉に出会った時、それを完全には理解できないまでも、いままでにない、まったく新しい視点を与えられたことを知りました。

それは「如来は如実に三界の相を知見す。生死の若しは退、若しは出あること無く、亦在世及び滅度の者無し」との言葉です。

如来とは仏の別名ですが、如来は、三界の相、つまり、宇宙、生命の実相をありのままに見究めたということです。その結果、生と死をどのようにみたのでしょうか。

生死もなく、退出もなく、在世も滅度もない——これが生命の姿であるということです。私ははじめ、生と死、現われいで、消え去っていく姿、仏が活躍している時（在世）と、その入滅の後

(滅度)ということとは、厳然たる事実ではないか、それをどうして「無い」と否定しきってしまふのか、と不思議に思いました。そのことはあとで、日蓮大聖人の御義口伝によって、解答がもたらされました。

わかったことは、これは生命が生によって始まり、死によって終わるという考え方を根底から覆^{くつがえ}し、新たなエポックを与える言葉であるということです。法華経の目からみれば、生命とは永遠に続くものであり、生まれるとか死ぬとかということとは、永遠の生命のたんなる変化相にすぎないとみるのです。

この永遠の生命が生死を繰り返していく姿を、創価学会の戸田城聖前会長は、次のような譬^{たと}えを引いて述べています。

「自分の生命というものは永遠である。この体のままで永遠に生きるのです。ただ、お爺^{じい}さんになってから赤ん坊になれませんか、いっぺん死ぬのです。そして、赤ん坊になって生まれてくるのです。生まれ変わるのではない。ちょうど、われわれが赤ん坊のときからこの年まで、ずーっと続いてきているのと同じです。途中で切れたことはないでしょう。しかし、切れたみたいなきがあります。グッスリ眠っているときは、自分では生命があったのか、なかったのかわからないでしょう。しかし、夜の生命から、朝の生命に生まれ変わったとはいわないでしょう。それと同じで、来世に生命が生まれ変わるのではなくて、この生命の続きなんです。たとえば、朝起きて元氣ハツラツとして、晩になると疲れてグッスリ眠って元氣を取り

戻したみたいだに、ずーっと年寄りになって死んで、その生命の続きが今度は赤ん坊になって生まれてきて、またお爺ちゃんになって死んで、また生まれてくるのです」

このような永遠の生命観にたってみた時、生まれながらのひとりひとりの差別というものも、結局は、その人自身の、それまでの一切の行ないの結果によるものであることが明らかになります。したがって、それはまた、自分自身の努力の積み重ねによって打開できるものであるということにもなります。

さらに、今世における自分自身の一切の行為は、そのまま、自身の生命に刻まれて、未来の自分を決定していくことが明らかにされています。また、永遠の生命観に立つたうえで、「不老・不死」ということを考えるならば、つねに潑刺はつらつとした、瑞々みずみずしい躍動感のみなざる生命こそ「不老・不死」であるといえるでしょう。

法華経が発見したこの生命の法則は、私に生きることの真の意味を教え、厳しい現実を生きぬくための勇氣と力を与えてくれました。あなた方の中には、かつて私がそうであったように、もし生命が続くとするなら、死後の生命は、いったいどのようなものになっているのだ、今世においてなした善悪の行為は、どのようにして来世まで連続するのか等々の、種々の疑問をもたれる方もおられることでしょう。しかし、これをどのように納得ゆくかたちで説明するかは、ひじょうにむずかしいし、私も教学に励む途上の一人の人間です。したがって、別項で多少触れるのにとどめておきたいと思えます。

ただいえることは、過去、現在、未来——人間はその流れのなかで瞬間瞬間を生きつつけます。過去は現在に影響を与えつつ、未来は現在の投影を浮かべつつやってきました。やはり、今と
いうこの瞬間瞬間を、生命の活力をもって生きることが大切でありましょう。

死後の生命へ^{じゅうりようぼん}寿量品の意義

永遠の生命は、仏法の真髓

たしか、昭和三十八年ごろだったと記憶していますが、池田先生に個人的にお会いする機会があった時に、次のような質問をしたことがあります。

「先生、一つ質問があります。仏法では、色心不二^{しきしんふに}（色“肉体的側面”と、心“精神的側面”が二でないこと）と説いております。現在生きている人間にとって、それは納得がいきます。それでは、死後における色心の連続、とくに色法^{しきほう}（肉体的側面の法）については、どう考えたらよいのでしょうか」

先生は、静かな口調で「私も、この問題は会長就任以来、思索をつづけている。君自身も思索してみなさい」

といった内容の答えでありました。私は、意外な答えに、驚きました。同時に感銘しました。「私も会長就任以来、思索をつづけている」という答えに、生涯、仏法の極理^{ごくり}に迫ろうとする、



強い響きを感じたものです。死後の生命の連続については、戸田先生が、その大略をすでに示されていました。しかし、池田先生は、それをさらに発展させ、究明されようとしているのでした。それが、十年後、「^{だいびやくれんげ}大白蓮華」(教学部の機関誌)の「てい談・生命論」として展開されることは、当時としては思いもよりませんでした。やがて、仏法の生命哲学のさらなる徹底した解明と、その体系も組み立てられていく日も近いと思います。

それはともかくとして、私自身、こうした重大問題に、わずかな紙数で触れることのむずかしさを感じております。ただ、読者諸兄姉の仏法の生命論に入っていく、一つの手掛かりとなればと思い、参考として述べてみたいと思います。

永遠の生命は、仏法の真髓であり、究極であります。生命が永劫に生死流転を織りなす姿を説かなければ、仏法の価値は無に等しいとさえいえましょう。法華経も、当然、生命の永遠性のうえに成り立っています。

ところが、現代人にとって、死後の生命を信じることはきわめてむずかしいようです。多くの人々は、ただ漠然と、死は生命の断絶をもたらすと考えています。むろん、確たる実証があるわけではありません。だが、はたして、死によって、生命は無に帰してしまうのでしょうか。

仏法の英知は、死後の生命の実在を洞察していますが、現代人のなかにも、生と死の流転を信じている識者もけっして少なくはありません。

物理学と哲学にみる死の世界

私は、仏法の哲理に少しでも近づくために、ひとまず、深く生死を考えた二人の識者の主張を取りあげたいと思います。

一人は、物理学者、岡部金次郎博士^{おかべ きんじろう}です。博士は、『人間は死んだらどうなるか』というタイトルの著書^{おおよ}を公けにされていますが、そのなかで、独自の推理科学を展開しています。

推理科学とは、現代科学の成果をふまえて、科学の手のとどかない生死などの問題を推理しようとする試みです。その推理科学によると、人間生命は、生と死の状態を限りなく繰り返すと推理せざるをえないということです。

博士は、エネルギー不生不滅の法則にもとづいて、まず、大宇宙に存在するすべてのものは、この法則にしたがう。無から突然生じたり、反対に、跡かたもなく消えてしまうものはありえないと推理します。人間生命にも、この法則はあてはまります。

さて、人間生命には、魂の核というべきものがあり、生きている時は、活性状態を示しています。肉体と心の働きが顕現している状態です。私たちが死をむかえると、種々の生命活動は潜在化し、魂の核は非活性の状態になります。つまり、死によって、生活は活性から非活性の状態に移るだけであり、けっして消滅するものではありません。生の時をむかえれば、魂の核はふたたび活性化し、活発な身体と心の営み^{よみがえ}を蘇らせるのです。

こうして、宇宙変転とともに、人間生命も生と死をめぐりゆくという予測が成立することにな

ります。

岡部氏が物理学の權威であるのに対して、私が紹介しようとする、もう一人の学者は、ギリシヤ哲学の最高峰をゆく田中美知太郎博士です。

私は、田中博士の著書『人生論風』を夜の更けるのも忘れて読み通した経験があります。そのなかで、仏法の基盤でもある輪廻転生の教えを考察した部分に、次のような話がでていました。

博士は、輪廻転生とは「今生のわれわれの生活の如何によつて、死後のわれわれは、また、他の動物や人間に生まれ変わつてこなければならぬ」という考えである」と述べたあとで、ギリシヤの数学者、ピュタゴラスにまつわる逸話を取りあげています。

ある時、ピュタゴラスが道を歩いていると、小犬がいじめられていた。ピュタゴラスは「やめろ、なぐつてはいけない。これはきっと私の友人の魂にちがいない。鳴き声を聞いていると、私にはそれがわかるのだ」と言ったといひます。

こんな話をする、現代人の多くは、一笑に付してしまふかもしれませんが、しかし、哲学者の思考は、あくまで真理を求めぬこうとします。

たしかに、私たちは出生以前の記憶を持っていません。記憶力のすぐれた人でも、三歳ぐらいまでしか思い出せないそうですから、まして、生誕以前の記憶などあるはずはありません。輪廻説では、生誕時、忘却の水を飲まされるから、記憶を失うのだと説明するのですが、その当否は

別として、記憶の有無によって、前世のことを判断するのはきわめて危険な行為でしょう。

博士も「赤ん坊の私と現在の私の間だって、記憶の連続性があるとは言えない」と述べています。睡眠時には意識の水準が下がり、記憶はとだえてしまいます。夜、床につく前の自分と、朝のさわやかな陽光をうけて目覚めた自分が、同一の人間であるかどうかさえ、疑えばきりがありません。

でも、たとえば、記憶がとだえたり、うすれていても、睡眠の前後の自己、赤ん坊の時と現在の自分は、同一の「私自身」であると信じるのが、正常な人間の思考ではないでしょうか。それは、人間生命の絶えざる変化にもかかわらず、そこに持続し、変化しないもの——自己同一性——を、自己そのものに確信しているからでしょう。

この自己同一性を保証するなにかを信ずるとすれば、一種の「たましい」の不滅を考えざるをえないと、博士は言うのです。

博士の言う、一種の「たましい」と、仏法の示す「生命の我」^{われ}が同じものかどうかということ、ここでは別にして、今世での生命変化にもとづいて、輪廻説への接近を試みる哲学者の思索には、私も深い感銘を受けざるをえません。

大宇宙は、一個の偉大な生命体

仏法でも、人間生命それ自身のなかに、一貫した本質を見抜いています。肉体的にも、精神的

にも限らない変化を織りなしつつも、そこに一定の本質の連続を見いだすのです。

その連続する本質を、「生命の我」と呼んでおきます。

生命の我の肉体面への反映を、私たちは次のようにして確かめることができます。つまり、肉体の変化も一定の傾向にしたがっているということです。

私の幼いころの姿と今とでは、ずいぶん違っていますが、それでも、幼少期からの傾向性は貫かれています。突如としてまんまるい顔が細長くなることはありません。

身長がもう少し伸びてくれればと思うのですが、どうやら、この願いは、生命の傾向性を無視した仏法者らしからぬ望みといえそうです。

精神面でも、小さいころからの勝気勝ち気は、ずっとつづいているようです。

ともあれ、個の生命に貫かれた傾向性は、その人の生涯を流れつづけていきます。そして、仏法では、生命の我は、死を越えて、ふたたび生を現出しようと説くのです。

世間ではよく「生まれ変わる」と表現しますが、正確には、今世と来世は、同じ生命の連続にほかならないのです。このことは、幼少の自分と、現在の自分との同一性から、類推することができます。

でも、今世の生とは異なって、死は肉体の崩壊をもたらします。とすれば、崩壊した肉体が、死後までその肉体の連続であるとは考えられない、という疑問が生まれるはずです。

もっともな疑問ですが、ここで私は、戸田先生の仏法者としての悟達ごだつにもとづいた話を思い出

します。

戸田先生は、「肉体にもせよ精神にもせよ運命にもせよ、目に見ることのできない、しかも厳然たる存在の反映である」と力説したあとで、死後の生命について話されました。

「我らが死ねば、肉体の処分にかかわらず、我らの生命が大宇宙の生命へ溶け込むのであって、宇宙はこれ一個の偉大な生命体である。

この大宇宙の生命体へと溶け込んだわれわれの生命は、どこにもありやうがない、大宇宙の生命それ自体である。これを空くうというのである。空とは存在するといえ、その存在を確めることができない。存在せぬとすれば、存在としてあらわれてくるという実体を指しているのである。『有る』『無い』という二つの概念以外の概念である。たとえてみれば、『あなたは怒るという性しやう分ぶんを持っていますか』と問われたときに『持っております』と答えたとする。それなら『その性分を表わして見せてください』といわれても、表わしようがないから『無』と同様である。『有りません』と答えたとしても、縁にふれて怒るという性分が現われてくる。かかる状態の存在を空というのである。

我らの死後の生命も、この空の状態で存在する。されば、縁にふれて、五十年、百年または一年後にふたたびこの娑婆世界（現実世界）に前の生命の連続として出現してくるのである」と――。死において、私たちの生命は、仏法でいう「空」の状態で、宇宙生命に融合しています。つまり、私たちの生命が、宇宙という大生命それ自体になるのです。したがって、もし、死の

状態を示す「生命の我」の肉体はどこにあるのか、と問われれば、「宇宙自体が、私たちの身体である」と答えるほかはありません。この「空」の概念を導きだした東洋の英知の一つの到達点に、私は感動を禁じ得ません。それは数学の世界が「ゼロ」の概念の導入によって大きく発達したように、「空」の概念は人間の哲学的思惟しゆいを一段と高めるものと信じております。

宇宙自体を身体となし、心となしつつ、死の生命は実在し、やがて、生への顕在化の時をむかえば、過去の生と死を通して連続してきた傾向性にしたがって、宇宙の物質を凝縮ぎようしゆくしての有機的生命へと蘇よみがえるのです。ゆえに、死をはさんだ前後の生命は、同一の生命であるといえるのです。宇宙とはまさしく生命の青き海原うなばらなのでしょう。

死後も苦悩の中を流転るてんする生命

私は、仕事が終わって、碁盤ごばんをかこむことがあります。あくまで趣味としてですから、本因坊戦などのように、一局を打ち終わるのに何日間にもわたる激戦を繰り返すなどといったことはありません。

それでも、夜の遅い時など、明日、このつづきを打とうと話し合って、ひとまず、碁石をくずします。碁石をもとの箱におさめても、その配置は正確に、両者の頭のなかに刻みつけられています。念のために、配置図を作成しておくことはむろんですが――。

次の日、対局者は、昨夜と同じように、碁石を並べて、そこから、ふたたび戦いが繰り広げら

れます。

碁の話にたとえてみれば、碁石をくずした時が死に相当し、昨夜と次の日の対局を生にあてはめてみることもできましよう。

こうした生死流転のなかで、個の生命は一定の傾向性にしたがって変化していくのですが、生命の変化を通してにじみでる傾向性について、もう少し詳細に述べてみます。

たとえば、田中博士が引用したピュタゴラスの逸話のように、人間生命が犬になったり、また逆に、各種の動物が人間生命へと変転するのは、はたして可能なのでしょうか。また、この世における生命状態は、いかなる出来事を以後の生と死にもたらすのか、といった疑問に答えておきたいと思います。

法華経譬喩品ひゆには、この世で、地獄の苦悩を味わいつづけて死をむかえた人の未来を、次のように記しています。

「そ其の人命終みようじゆうして阿鼻獄あびごくに入らん、一劫いつこくを具足して劫尽きうじんきなば更生また生まれん、是かくの如く展転てんでんして無数劫むしゅこくに至らん、地獄じごくより出でては当まさに畜生ちくしやうに墮おつべし」とあります。

阿鼻獄あびごくとは、阿鼻叫喚きやうかんの地獄を意味しています。苦悩の極限が、一劫——八百万年、または千六百万年——もの長いあいだ続くというのです。それを過ぎてまた生を受け、もし、地獄より出ることがあれば、今度は畜生という本能に支配されつづける生命形態をとる場合もありうるのです。この場合、私たちが地球上で知っている本能支配の生命形態といえは、やはり、各種の動物

にあたるでしょう。

日蓮大聖人は、さらに明確な記述をされています。「しょうぐもんどうしょう聖愚問答抄」には「悲しいかな痛いたしいかな、我等無始より已この来、無明の酒に酔よて六道・四生に輪回りんねして、或時は焦熱・大焦熱の炎にむせび、或時は紅蓮・大紅蓮の氷にとぢられ、或時は餓鬼・飢渴の悲みに値あいて五百生の間飲食の名をも聞かず、或時は畜生、残害の苦みをうけて、小さきは大きなるに・のまれ、短きは長きに・まかる。是を残害の苦と云う。或時は修羅・鬪諍の苦をうけ、或時は人間に生れて八苦をうく。
(中略)或時は天上に生れて五衰をうく」とあります。

ずいぶん、仏法用語が出てきますので、くわしい説明はさしひかえますが、永劫の過去から流転してきた個の生命は、その時の傾向性にしたがって、地獄の苦悩を味わいつづけたり、餓鬼の境涯をめぐったり、畜生としての本能のままに「残害の苦」(弱肉強食にともなう苦しみ)をうけたり、また、阿修羅のようにたけり狂った闘争の連続を経験することもあります。さらには、人間としての生老病死などにともなう苦しみにおそわれたり、すべての願望が満足して天上界にも昇るような喜びにひたるのもつかの間で、次の瞬間には、ふたたび三惡道の苦悩に転落していく——こうした流転を繰り返さざるをえないのです。

地獄を漂流する生命を救う法華経

地獄の苦や餓鬼の飢餓感などは、個の生命が顕在化する生の期間のみならず、死の状態の生命

にも容赦なく襲いかかります。

したがって、私たちが目撃できる生の世界にうずまく種々の苦悩や喜びや悲哀は、そのまま死せる者の領域にもあてはまりましょう。

ちょうど、この空間には、種々多彩な電波が流れています。天上の喜びを謳いあげる恋を託した電波もあれば、極限の苦悩からの切迫した叫びを伝えるSOSの電波もあります。

かつて、国と国とのすべての人々を修羅闘争の巷にひきずりこむ宣戦布告の電波がとびかった、いまわしい出来事もありました。逆に、平和の到来を告げる波長が地球を取り巻いたこともありました。

この例を参考にすれば、少しは理解できやすいと思うのですが、私たちの死後の生命も、それぞれの傾向性、境涯に即した状態を示しながら、宇宙自体のなかに溶けこんでいるのです。

仏法でいう「空」の状態でありながら、ある生命は苦しみのどん底にあえいでいます。

また、他の生命は、飢餓感におののいているでしょう。強者に出会った時に体験するような心の底からの怯えが、ぬぐい去れないものもあります。静かな境涯にひたる生命も少なくはありません。

宇宙には、さまざまな生命感を体験している無数の生命が、ことごとく宇宙生命自体と融合していると考えられます。そして、ある生命が、種々の条件のもとに、生の顕在化に入る時がくれば、その生命感、境涯にぴったりと合った、具体的な生命形態をとることになるのです。

それは、ちょうど、特定の波長を合わせば、受信機に、適合する電波が現われるようなものです。放送局から送られてくる電波に、テレビのチャンネルを合わせて、画像を出現さすことにも譬えられましょう。

以上のような考察からすれば、今世における本能のままに過ごした生命形成のプロセスが、その傾向性にもとづいた死をはさんで、各種の動物の形態を示す来世へとひきつがれる場合も、けっして否定はできないようです。

だからといって、動物的な人間の生活が、必ず、来世も動物の姿をとるであろうと主張しているわけではありません。あくまで、その個体の傾向性にもっともふさわしい姿を再現するのであって、私たちが予想もしない天体上の生命形態を示すほうが、むしろ多いのではないかと考えます。

仏法では、この大宇宙は、ありとあらゆる生命にみちていてと洞察しています。宇宙は、万物の生をささえ、育はぐくみながら、永劫の変転をつづけています。この宇宙生命にいだかれて、私たちの生命もまた、生死のはてしなき旅路をつづけているのです。こうして、永遠に流転する生命——そのありのままの姿を凝視ぎょうしするところから、仏法の実践、修行がはじまるのです。

私は、この項目の最初に、法華経も、寿量品で説かれる生命の永遠性のうえに成り立っていると言いました。それは、法華経という経文が、永劫流転の生命の実相を洞察しぬき、そこから、地獄や三惡道に向かう傾向性を示す生命でさえも、真実の幸福きょうふを享受しうる生命の流転るてんへと百八

十度の転回を遂げさせる方途の確立を志した、偉大な英知の集積にほかならない、との意味を含ませたかったからです。

生命永遠の姿を会得して、この法華経から、崩れない幸福へと向かう生命確立のために、ダイヤモンドにも比すべき知恵の光の数々を学んでほしいものです。

現実を変革する哲理 〈娑婆即寂光土〉 しやば そくじやつこうど

七日七晩苦しんだ念仏の開祖・善導ぜんどう

私は子どものころ夕日を眺めるのが好きでした。四方が山に囲まれた氷川ひかわの地にいた時、山の端に沈む大きな赤い夕日を、飽くことなく見つめ、西のほうになにか素晴らしい世界があるかのように夢想しましたものです。絵を描くのが趣味だったこともあって、そのような絵を描いたこともしばしばでした。

もちろん、地球は丸いのですから、西のほうへいくら行っても、そのような理想郷があるわけもあります。しかし、上空の雲まで真っ赤に染めなす夕日は、たしかに少年の夢心をかきたてるに十分でした。

ところで、地球が丸いということを、大部分の昔の人は知らなかったのはいうまでもありません。西にまっすぐどこまでも進めば、また元に戻ってくるなど、コペルニクス以前は考えたこともなかったでしょう。その人々が、夕日を見てどう思ったかということは、また別の意味で興



味があります。

阿弥陀經あみだきょうといえば、仏教經典のなかでも有名なものの一つですが、そこでは西方さいほう十万億土の極樂淨土らくじようどが説き示されています。西方には阿弥陀仏の住む淨土があり、そこでは空中に音楽が聞こえ、道は黄金でできており、そこに住んでいるのは、修行の妨げになる女性は一人もいず、男性ばかりで——これは私がいうのではなく經文に説かれていることで、私はいささかもそんな偏見はもっておりませんから、念のため。むしろ私は、そんな所には行きたくありません——最高の桃源郷であるというのです。阿弥陀仏の名前を唱となえていれば、死後には必ずその極樂淨土へ行けるといのが阿弥陀經の教えですが、これは、昔の人々にはかなりの説得力があったと思われるのです。

というのは、その一つとして、やはり冒頭に述べた夕日の力があずかっているのではないかということです。地球を平面とと思っている人々にとっては、そして一つのところに縛りつけられて暮らし、離れたところへ旅行などおそらくしなかっただろう人々にとっては、毎日、天空を赤く染めて沈む夕日を見るたび、西の方角に素晴らしい世界があるのではないか、と思ったにちがいないと思うのです。

日々の暮らしにあえぐ庶民にとっては、阿弥陀經のこの教えは、まさに溺おほれそうになったときに見つけた船以上の力があつたのでしょう。

日本の歴史をみてみますと、ちょうど武士が台頭して、戦国時代に入ろうとしているころです

が——おもしろいことに、經典によると、そのころが末法、釈尊の仏教の力が衰えてくる時代であるということになります——そのころ念仏が流行し、その教えを信じた人々が、来世に極楽浄土に生まれることを願って、続々と自殺したことが記録に残されています。念仏を始めたといわれる中国の善導自身が、極楽浄土に生まれる実証を示そうとして、自ら柳の枝から飛び降りて自殺を図り、失敗して七日七晩苦しんで死んだ、といわれています。

娑婆とは堪忍、堪え忍ぶことだが……

念仏のこの教えは「厭離穢土、欣求浄土」（この世は穢い世界でそれをきらい、浄土を求める）の思想として有名ですが、他の經典も、大なり小なりそのような考え方を含んでいます。たとえば薬師如来は東方の浄瑠璃世界（浄らかで瑠璃という宝がちりばめられた世界）に住んでいる仏として説かれていますが、これなども、阿弥陀のデンで考えると、朝日を象徴しているのかもしれない。夕日の阿弥陀のほうが有名になったのは、夕日だと皆が目を見ましているからで、朝日のほうはまだ起きていないからではないかなどと、下司のカンダリみたいなものはたらかせたこともあります。いずれにしても、この世界は苦しみ、悩みが渦巻く世界であり、仏は他の国土に住んでいるという考え方が強かったのです。

娑婆世界とは、この現実世界をいうのですが、娑婆とは堪忍＝堪え忍ぶ＝ということ。今では刑務所を出所するときなどに用いられているようですが、もともとは、さまざまな束縛の多

い、この現実社会を表わした言葉であるわけです。

とくに庶民が、権力者に、地位、財産を専有されていただけでなく、個人の自由、さらには生命さえも奪われることが日常茶飯事であった時代にあつては、堪忍世界であるという表現は、切実なものとして受けとられたでしょう。

人間革命に必要な二つの作業段階

ところが、法華経の如来寿量品16、この章は仏の生命について説かれる、法華経の中でも最も重要な章ですが、そこでは仏（釈迦）は、この娑婆世界において説法教化してきたのだ、と説くのです。これは、まことに爆弾宣言とでもいうべきもので、釈迦の跡継ぎとさえいわれた弥勒菩薩までもが、驚天動地の体で聞くわけですが、人々が苦しく、もうこの世の終わりではないかと思つているこの世界が、じつは仏の住む、仏の哲理が支配する寂光土なのだというわけなのです。

仏はここで、苦しい娑婆世界に勇氣をもつて挑戦すべきことを説いているようです。考えてみれば、仏が西方の極楽浄土を説いたのも、現実の社会の現象に目を奪われて人生の意味を見つめようとしなない人々に、仏教への目を開かせようとした一つの「寓話」であり、「手段」であつたのではないかとさえ思えるのです。そうして仏教への目を開かせたうえで、今度は、仏教の哲理をもつて勇氣を奮い起こして、現実の人生と取り組むことを教えたと思われれます。

私は、人間革命という作業は、二つの段階を必要とすると思っております。一つは日常性に埋没する自己を脱却して、人生の真実の意味を求める作業であり、次の段階は、そこで得た悟りをもつてふたたび現実の人生に戻り、そこで変革の作業に取り組むということです。

日常性に埋没するのみの低い人生観を打ち破るという意義を、阿弥陀経などはもっていたのであり、法華経の娑婆世界説法教化の原理は、第二の段階を示しているものだ、と言えるように思うのです。

「地涌の菩薩」のところで述べましたが、法華経では、この二つのことを「蓮^{はす}」の花で巧みに譬えております。ハスの花は、私も上野の不忍池^{しのばすのいけ}などで見ましたが、美しいものです。しかし、その花も泥に満ちた池の中でこそ咲くものです。その泥の中から咲きながら、しかも、その泥に染まらない花だということです。これは現実社会とまったく関わ^{かか}らうとしない浮き上がった、指導者然とした人間を意味するものでもなく、また、いたずらに世間に迎合して、自らの節を曲げて平然とする人間を意味するものでもありません。自らの悟りの花を、社会の泥の中で開かせていく努力と姿勢を説いているのです。蓮には、この「於泥不染^{おでいふせん}」（泥にあって染まらず）の徳があるというわけです。

大乘仏法は、生きて生きぬく教えである

よく宗教といえば、心の内面の世界を充実させることに本義があるのであって、現世のことを

説くのは誤りである、という考え方がなされているようです。しかし、宗教とは、いわば人生の生き方を説くものである以上、それが心の世界にとどまって、人生に影響を与えないものであることのほうが、本来の意義を失うものであるわけです。したがって、現実社会のさまざまな制約と取り組み、それをどう打開していくかに心を砕いてこそ、また、自らをどれだけその力ある存在にしていかにこそ、宗教者の本来の立場があるように思えてなりません。

大乘仏法は、生きて生きぬくことを教えています。仏法は死への準備の教えではなく、死ぬことさえ許されぬ人々にも、希望と勇気と生命力を与え、沸きたたせていくものです。

「諸行無常」については前にも触れましたが、万物はみな流転るてんするものであり、常住（不変）たることはありえない、という考え方です。これは、人間の生命をはじめとして、一切の現象はすべて移りゆくものであるから、その無常を見つめて、さまざまな執着を捨てよ、ということをお教えたものです。『平家物語』などを見ますと、その諦観主義ていかんしぎが、たまらない調子で、栄枯盛衰えいこせいせうの物語の背景を形成しているようです。

しかし、諸行無常のいわんとするところは、表面上のあらゆる現象というものは、流転まわを免れないのであり、それに目を奪われて執着してはならない、ということであって、その内奥に流れる常住の法を探し求めよ、しかして、その法をもって現実の人生を処せ、ということをお教えるとしているものなのです。

これは、娑婆世界説法教化につながる思想であるわけですが、そういう意味からすれば、法華

経は、とてつもなく強い勇氣をもつて、ものごとを直視することを教えた思想だ、ということになります。

現実生活は、なるほど娑婆Ⅱ堪忍であつて苦しい。しかも、変転きわまりないものである。その現実を見つめるのは、つらく勇氣のいる行為でしょう。そこから逃避できるなら、どれだけ楽しめない。しかも、内面の心の安定だけを求めるなら、どれだけ楽しめないことです。

しかし、その堪忍世界の現実を明らかに見つめ、その奥に流れる法Ⅱ法華経Ⅱをもつて、現実社会を変革せねばならないことを要求するわけです。

私は、宗教が現代社会に力を失い、色あせた存在になった理由の一つは、宗教が現実社会と取り組むことを恐れ、いたずらにドグマ化し、民衆、社会から遊離したところにあると思つています。人間が人間であろうとするかぎり、それは、人生、生命の「意味」を知ろうとすることであろうと思いますが、そうであるかぎり、宗教はなくならない。というより、迷信はなくなつても、眞実の宗教はますます光り輝くものだ、という確信を持っております。

生命の尊さの自覚と実践

ふきようぼ さつ
〈不軽菩薩〉

母親の子殺し増加、二つの背景

昨今の生命軽視の風潮は、目に余るものがあります。いうまでもないことですが、母親という存在は、子どもにとって絶対的なものであり、子どもは母に全生命を無意識のうちに託しきっているものです。その子どもの無言の期待が、最近の母親の子殺しの増加によって、無残にも裏切られています。生まれたばかりの子どもの顔に、ビニール袋をかぶせて窒息死させ、始末に困った母親が、駅のロッカーに放り込むという事件が跡をたたない。母親から母性本能、育兒本能が喪失してしまったかの感が深い。

こうした問題の原因を、社会制度の欠陥に求めることもできましょう。しかし、この種の事件の背後を知ると、どうやら経済苦という社会体制の欠陥から生じた、せっぱ詰まった動機だけではないようです。若い母親が、遊ぶために子どもが邪魔になり、なんの理由もなく、安易に、罪の意識すらさらさらずに、殺すことも多いからです。これは人間の歴史にとって、驚くべきこと



であり、過去に例のないことです。

『スポック博士の育児学』で有名なアメリカのベンジャミン・スポック氏は、このような風潮を二つの観点で分析しています。一つは、社会自体が病んでいゝることであり、もう一つは、社会が過渡期にあるときに起こる、個人の混乱ということ事です。

私も、このスポック博士の分析に同感するところが多いのです。スポック氏のこの二つの分析のはじめの、社会が病んでいる、という指摘は、言い換えれば、旧来の価値観（精神的にはキリスト教的博愛主義であり、物質的には科学技術文明を中心とした生き方）が音をたてて崩れていく状態をいゝうと思われまゝす。また、あとの個人の混乱という現象は、そうした文明の崩壊過程（スポック氏の言う過渡期）のなかで、人々が、自らが生きる指標を見いだせなくなつてしまつてゐる状態といゝえましよう。そして、この二つの病状の進行は、本来、もつとも尊厳なるべき生命を直撃し、それが今日の生命軽視の風潮を促進してゐるといゝえます。

“不^{ふきよう}軽”とは「軽^{かる}んぜず」生命の尊さの自覚

このような、時代のなかで、法華経の原理は何を示唆するのでしゝうか。法華経の精神は、生命という無上の価値を中軸に捉えたものであることは、これまでも繰り返して述べてきたとおりです。今、この生命軽視の進行に、真つ向うから立ち向かう実践原理として「不^{ふきよう}軽菩薩」の教えが力強く蘇^{よみがえ}つてくるのです。

不輕菩薩は昔、威音王いおんのうおつ仏の像法時代（仏法が形骸化した時代）というときに、二十四文字の法華經を弘ひろめた人です。これは法華經の常不輕菩薩品に出ています。二十四文字の法華經とは、「我われ深く汝等なんだちを敬うやまう。敢あえて輕慢きやうまんせず。所以ゆえんは何んいか。汝等なんだち皆菩薩の道どうを行じて、当まさに作仏することを得べし」というもので、これを漢字にすると、二十四文字になるところから、二十四文字の法華經といわれています。

不輕菩薩の教えるところは、この不輕の文字から類推されるように、「輕んぜず」ということで、生命の尊さを自覺することを行います。

池田会長は、その著『御義口伝講義』のなかで、

「常不輕とは、生命の尊嚴をいい、一切衆生の生命に、三世にわたって常住する妙法蓮華經の法性を意味するとの仰せである。常とは三世常住を意味し、不輕とは、一切衆生の生命は、妙法の珠をつつんだ尊嚴なる当体どうたい（ありのままの本性）であり、けっして輕んずべきではないということ。常不輕という言葉自体があらわしている」

この池田会長の言葉でも明らかなように、不輕菩薩の精神は、生命を守り、大切に育はぐくむ意義を示しております。

非難中傷をする相手をも救う不輕菩薩ふきやう

いま、もう少し不輕菩薩の行動について、法華經に説かれた内容を述べてみましょう。

不輕菩薩は、さきほど触れたように、威音王仏の像法時代に出現し、二十四文字の法華經を弘ひろめましたが、ところが、当時の人々は、この不輕菩薩の修行に不審の心を抱いたのです。

不輕菩薩は、では、どういう修行をしたかというのと、一切衆生、すなわちすべての人の生命には仏性という無上の宝を内在している。その仏性に対して但行たんぎょうらいはい礼拝らいはいといつて、但だた礼拝の行だけを実行していったのです。当時、不輕菩薩から礼拝された人々は、どういう態度をとったかというのと、ただひたすらに合掌礼拝する不輕菩薩のことを、汚ないものでも見るように、さげすんだのでした。これらの人々を不輕輕毀きようきの四衆ししゆ（僧侶、僧尼、男の在家、女の在家）というのですが、この四衆の中傷、非難にも、いささかもひるむところを見せず、不輕菩薩は但行礼拝の行をつづけていったのです。しかし究極的には、この輕毀きようきの四衆をも救っていくのです。

すなわち、法華經をすなおに信じなかったけれど、中傷、非難という反対の形であれ、法華經に縁えんした（縁を持った）ことが、のちのち成仏じようぶつの因として、その人の生命のなかに残っていくのです。

不輕菩薩に関連した法華經の話というのは、ほぼ以上のような内容です。

どんな人間の中にも仏性がある

さて、私たちは、この不輕菩薩の實踐を通して、何を学ぶことができるでしょうか。また、何を学ぶべきでしょうか。

まず、人間関係という側面に焦点をあてて、考えてみましょう。

十数年前に『孤独なる群衆』(原題 *Lonely Crowd*) という名著を世に発表したハーバード大学の社会学教授デヴィッド・リースマンは、その著作の中で、“他人志向型”の人間の価値を訴えています。他人志向型というと、日本語の語感では、すぐ主体性のない不安定な人格と錯覚しがちですが、リースマン教授の言うところは、まったく反対で、他人の感情を十分に汲み取ることでできる人間という意味なのです。そこには、個人主義の風土と、伝統のなかに根づいたエゴイズティックな性向を、いかに克服していくかという鋭い分析が見られます。

この十数年前のリースマン教授の洞察は、今日の文明社会のなかで見事に復権してきます。もはや具体例を取りあげるまでもなく、今日の核家族化の進行とあいまって、ずたずたに引き裂かれた人間関係の様相は、文明社会のあだ花として、現代人の心を腐蝕しつつけております。

どこことって身寄りのない、生活保護だけで、かろうじて生をつないでいる老人が、ある日、突然亡くなっても、一ヵ月も二ヵ月も、周囲の人が気づかずにいる世の中なのです。

このままで人間砂漠とでも言えるような現代社会にあって、温かい血の通った人間関係を取り戻すためには、人間はもう一度、人間らしく生きること、つまり、お互いが、お互いの生命の尊貴に対して目を向けることが必要なのです。ひとくちに生命の尊厳といっても、ただ口で唱えているだけでは無意味です。スローガン化した言葉からは、生産的な何物をも生み出しえないのは、現代社会の特質ともいえる傾向なのです。

生命の尊厳は、まず自らの生命に内在する仏性ぶつしやう（仏界という本性）を確信するとともに、他の人の生命のなかにも、仏性が実在していることに思いをいたし、それを敬う。そしてお互いに尊敬し合い、守り合うという意識を持っていくとき、人間関係は、みずみずしく蘇よみがえることでしょう。これは、たんに弱者に対する憐憫れんぴんの情といった、上から下を見るようなものではなく、自分自身にも、他者のすべてにも共通の光があることを信ずることから出発した行動なのです。

したがって、不輕菩薩の実践の例は、失われた人間関係を回復する方法を、実践に即して教えているのです。こういったからといって、なにも、二十四文字を唱えて礼拝せよ、と言っているわけではありません。礼拝行というのは、過去の行であって、現代に適用しません。しかし、あらゆる人々の生命の中に、善性の光のあることを信じての行動が、今ほど必要なときはありません。不輕菩薩の実践は、反対者をも包んでいくヒューマニズム、つまり仏法ヒューマニズムともいうべき発現であったともいえるでしょう。迫害する人間にさえ仏性を認め、必ず幸福にした、との五体に満ちた決意が、あの杖木瓦石じやうもくがしやく（杖や木で打たれ、かわらや石を投げられること）のなかの不拔の実践を生んでいるのです。私はそこに、現代に欠落した人間行動の尊さを見ることができると思います。

しかし、問題は、生命の偉大な力を、現代においていかにして引き出すかにあります。その触発の問題になると、どうしても、現代に即応した、法華經の実践が必要になってくるのです。それを、私たちは、その実践原理が日蓮大聖人の仏法にある、と確信しております。

女性解放の先駆け〈女人成仏〉

女性は成仏じようぶつできないというが……

中国にこんな話があります。儒教じゆきようの祖、孔子こうしがいたところですが、孔子が榮啓期えいけいきという人と会
い、人生の楽しみは何か、と問うたところ、まず第一に、人間と生まれたことをあげ、第二に、
男と生まれたこと、第三に齡九十よわいまで生きたことをあげた、といいます。これを三樂といってい
るそうですが、このうち、第一と第三、すなわち人間と生まれたこと、長生きしたことを喜ぶの
は当然として、「無女樂」——女と生まれなかったことが、人生の最大の楽しみの一つであると、
榮啓期は言っているのです。

考えてみれば、これほど女性を馬鹿にした言葉はありません。靴下とともに強くなった、とい
うより、一時ほどには強くない靴下などを置いてきぼりにして、今や社会の大道かうぼを闊歩かつぽせん
とする「ウーマン・リブ」の闘士が耳にすれば、なんたる侮辱と、柳眉りゆうびを逆立さかだてて攻撃するであ
ろうことは、目に見えております。



ところで、仏教においては、ある段階まで女性はもつとも蔑視されているのを、世の女性方は知っておいででしょうか。たとえば「五障」(五つの障害)という言葉があります。女性は劣っているもので、梵天、帝釈——これはともに善神と呼ばれているものですが——王、そして仏、さらには、魔王にさえもなれない、ということです。王や、善神、仏になれないというのも決定的な表現ですが、魔王にもなれないということは、考えてみれば、これほどの蔑視もあります。善や悪をなして、なんらかの存在価値をもつものとはなりえない、という意味にもとれるからです。いわば、人間扱いされていないということにもなるのでしょうか。もつとも、男性たるもの、一方で高邁な理想を掲げて、大言壮語するかと思えば、一方では、蛮勇にものをいわせて非道も行ないうる存在であることを、示唆しているのかもしれませんが――。

そのほか、女性は煎った種のようなもので、仏になることは絶対にないとか、この世では女性は絶対に成仏できず、将来の世で男性に生まれ変わったら可能性があるなど、徹底して女性は不成仏の存在である、と強調されます。

これは女性だけではなく、悪人もそうであり、さらに、声聞、縁覚の二乗、今日でいえば知識階級の人々も、その種類に入れられています。これは、自分は大したものだと思って、他に教えるを請おうとせず、しかも、わが身をなげうって他人に尽くそうとしない利己的なところを、痛烈に指摘しているのでしょうか、いずれにしても、女性、悪人、知識人が成仏できないと説くのは、成仏という最高人格を獲得するのに適していない、としているのでしょうか。

では、なぜ女性は成仏できないというのでしょうか。もちろん、当時のインドの社会が極端な男尊女卑社会で、女性に十分な地位、働き場所が与えられなかった情勢が反映していることは否めません。しかし、と同時に、そうした社会のしがらみに負けて、女性は自らの殻からの中に閉じこもり、もっと広い場に自分を押し出そうとする努力を怠ったのも、事実ではないでしょうか。

八歳の娘「竜女」りゅうによが即座に悟りさとを得た意味

成仏、仏に成るというのは、なにか特別な修行をして、一個の別な人格になるということではありません。自らを向上させ、殻を打ち破り、自分の中にある可能性を大きく開花させていくところにあるものです。日蓮大聖人は、成仏の「成」を「ひらく」と読むのだと教えられています。つまり、自らの生命の中に仏の境地を開いていくことである、と言っています。まさに至言だと思っています。

したがって、成仏ということとは、日常の千変する現象に心を奪われるのではなく、己おのれの奥にある本質、法則を見つめ、現在ではなく永遠、狭い空間ではなく全宇宙的視野に立ってものごとを洞察し、その本質論に立って自己を変革していくという、革新的な行為であるということになります。ちょっとむずかしい表現かもしれませんが、要するに、仏になるということは、ものすごく革新的なエネルギーを伴わなければできない、ということなのです。ですから、日常の瑣事さじのみに心を奪われ、目先の利益に動かされるのみの生命であっては、成仏は思いもよらないということ

になります。そういった意味で、保守的、現状維持に陥りやすい女性は、成仏できない、と説いたのではないかとも思われます。

しかし、こうしたことは、社会体制も影響しており、女性の生命の本質論ではありません。女性をそうした地位におかしめたのは、やはり、説法の一段階にすぎないのです。あくまでも仏の真意は、そうした保守的、現状維持的風潮に流されやすい自らの生命を凝視して、真実の悟りを求めよ、と教えることにあったわけですから、釈尊の悟りの経である法華経では、一転して女性の成仏が高らかにうたわれるのです。

竜女りゅうにょという、竜王の娘で、八歳になる女性が、法華経の提婆達多品だいばだつたほんで登場してきます。経文では、海中から出現する模様が説かれるので、浦島太郎うらしまたろうの話はなしを髣髴ほうふつとさせますが、これは海洋に住んでいた民族を指すのかもしれませんが、それはそれとして、その竜女が仏の説法の座にきて、大衆の面前で即座に悟りを得て、人々を救済するため説法することが説かれているのです。そのありさまを経文は、忽然こつぜんの間に男子と変じ、菩薩ぼさつの行をそなえ、南方に行って法を教えた、と説いております。

ここでもまだ、男子に変わるという表現がとられているのですが、ここで大切なのは、瞬間的に変わったということ。瞬間的に変わったということは、女性が男性に生まれ変わったということではない、と思われれます。これはまさしく即身成仏そくしんじょうぶつである。社会慣習にそった表現をとったままで、今までの考え方とは根本的に異なっている。この提婆達多品における竜女の成仏が、

經文で明確に女性の成仏をうたったものとして、高く評価されているのは、そうした理由によるものです。

法華經においては、そのほか、耶輸陀羅やしゅたらという尼僧も、仏になると説かれていますし、藥王品やくおうぼんというところでも、女性が成仏すると強調しております。ただ、なんといっても、女性が即座に悟りを開いた提婆達多品を、その代表格とするのは当然のことです。

女性だからこそわかる多くの苦しみ

男性と女性には、どういう違いがあるか。むずかしい議論を始めればキリがありませんし、私は、それに耐えうる知識も持ち合わせておりませんが、結局、生理学的には、女性は出産し授乳するという役目を持つことは、将来においても変わりそうにありません。そこで、その生理学的特徴が精神に及ぼすものとして、生命を慈いつくしみ育はぐむという性向が、特徴としてそなえられることが考えられますし、そこから、どちらかといえば、革新的であるより保守的、理想より現実を見つめやすい、という傾向が幾分なりともあらわれるかもしれません。

しかし、もしそうした特徴をもつことが事実だとしても、男女のそのような違いというのは、個人の違いよりもはるかに小さいということです。男性でも、保守的な人間は山ほどいますし、女性でも、革新的な思想の持ち主もけっして少なくない。文化人類学者のマーガレット・ミード女史の研究によれば、ニューギニアに住む部族のあるものは、女性が男性の役割を果たし、男性

が女性的であるということです。社会に出て積極的に働くのは、女性であり、男性は、家に閉じこもり、座談の場では、つねに隅に座をとり、彼らの目を輝かすことといえ、人のうわさ話であり、もっとも得意とすることといえ、それは井戸端会議であるといふのです。なんとも皮肉に満ちた現象ですが、そうしたことに驚きを感じるほど、現代社会が、いわば「男性型社会」であるということなのでしょう。

しかし、そのような社会的、伝統的束縛が、男性らしき、女性らしきといった本来のものまでを、すべて抑圧してしまうものとは、思いたくありませんし、また、そうあってはならない。女性に対する束縛がたとえあったとしても、それを乗り越えるにたる生命の可能性を、すべての人はもっていると考えたいのです。それを、竜女の即身成仏は、示していると思うのです。

たしかに、社会の体制を変えることも必要でしょう。それを否定するわけではありません。しかし、そのみをもって、女性解放のすべてと考えることも、同様に誤ったことです。

私が数十人の女性に、もし次に生まれ変わるとすれば、男性に生まれたいか、それとも、もう一度女性に生まれたいかと聞いたことがあるのですが、そのときの答えは、女性に生まれたい人が半数、男性になりたいという人が三分の一、残りはわからない、ということでした。私は、男性になりたい人が大半ではないか、と考えていました。そこで、理由を聞いてみると、答えはさまざまでしたが、その中で多かったのは、女性だからこそ、いろいろな苦しみがある。その苦しみを人々と分かち合い、乗り越えていってこそ、真実の生きる喜びがあるから——という答え

だったのです。驚くとともに、一種の尊敬に似た気持ちが私の胸をよぎったのは事実です。そして、それが真実のウーマン・リブではないか、とも思ったのです。

何千年も前、男尊女卑はなほだしい社会のなかでうたわれた、男女平等の思想が、今こそ花開いた、とも言えるのではないでしょうか。

しかも、法華經の女性成仏の思想が「成仏」という生命次元で打ち出されていることに、大きな意義があると思うのです。体制というのでもなく、単なるうたい文句でもない。仏性——最高の人格——を、それぞれの生命の内にもっているという次元において、平等であるということです。この女性解放の先駆的思想が、社会におけるさまざまな男女差別の体制の変革と、相乗作用を起こしつつ広がっていくとき、女性が真実の自由を獲得する、というより、人間としての本来の自由を、男性も女性も、自身の内面に確立していける社会が生まれるのではないかと、私は、大きな期待をする一人です。

幸せは自分の手で克かちとろう 〈法華經の功徳くどく〉

「功徳くどく」「利益りやく」は、自分の力で切り開くもの

正確には忘れましたが、次のようなヒバリの親子の童話があります。夏も近づき、麦の穂は重く頭を垂れ、遠い山から吹きおろす風にユラユラ揺れている季節です。とある麦畑の一隅に、ヒバリの親子が巣をつくっていました。親ヒバリが餌さかを探しに行っている間、子ヒバリたちは巢の中で静かにその帰りを待っていました。すると、その畑の持ち主が畑を見回りに来て、「そろそろ刈り入れどきだな。明日は隣りの……さんに手伝ってもらって刈ってしまおう」とつぶやいているのが聞こえてきました。

すっかり驚いた子ヒバリたちは、親ヒバリが帰ってくると、さっそくこのことを報告しました。すると親ヒバリは、落ちつきはらって「あわてることはないよ。隣りの人に手伝ってもらうと言っていたんだね。まだ大丈夫」と言いました。そのまま数日が過ぎて、また農夫が見回りに来て、「さあ明日は……さんから刈り入れ機を借りて、全部一挙にすませてしまおう」とつぶやいて帰



って行きました。

子ヒバリたちは、またまたあわてて、親ヒバリに報告しました。するとまた、親ヒバリは、「あわてることはない。まだ大丈夫だよ」と言うのでした。それから数日がまた無事に過ぎて、ふたたび農夫が、子ヒバリがひそんでいる巢のそばに立ちました。そして「もうこれ以上おいておくと、みんな風に倒れてしまうな。よし、明日は、鎌で刈り入れをしてしまおう」とひとりごとを言いながら立ち去りました。子ヒバリたちからこのことを聞いた親ヒバリは、「さあ、みんなで引越しをしよう」と言って、その日のうちに巢を移してしまい、翌日、晴れあがった青空の下で、農夫は、汗を流してサクサクと麦を刈り入っていました。

——この童話が、他人に頼ったり、無いものをあてにしているうちは、なにも進まない、自分の力ですべては切り開いていかなければならない、ということを教えたものであることは、いうまでもありません。

ところで、仏教で説く「功德くどく」とか「利益りやく」というものも、その真の意味は、この童話の精神と同じものであるといったら、どうでしょう。か。おやおやと、意外な感に打たれる人も多いのではないかと思えます。

人間を矮小化わいしょうかする他力たうりきの絶対化

神仏の利益・功德という、一般的には、人間の力を超えた、なんらかの存在が、かよわき人

間に恩恵を授けるものとして考えられがちです。たしかに、そのように説く宗教も少なくはありません。キリスト教、回教、日本の神道しんどうなど、また、仏教の中でも他力たうりき的なものなどは、ほとんどそうです。それらに共通していえることは、人間を弱き者、罪深き者、無能な者としてみて、絶対的な力をもってそれを救う、という考え方です。

このような考え方は、大変非合理的です。大体において、このような思考をもつ宗教が、超人間的な存在を見事に立証している例などは見たこともありません。その存在すらおぼつかない神や仏の助けを待って、自己の人生をそこにゆだねるなどということは、人間の本来の力、活力の矮小化わいしょうかといっても、過言ではありません。先の農夫の例の場合には、助けを期待した隣人や刈り入れ機は、現に存在するものであったから、まだ神仏の利益を期待するよりも、確かな根拠があったといえるのではないか。——若くて、向こう見ずで、病弱という以外、とりたてて自分自身に関する悩みごとをもたなかった私は、こんなふう考えたのでした。そして今でも、この考えは大筋において間違っていないと思っています。

それならば「他から授かる」のではない「利益」とか「功德」というものが、いったい、あるのか、と疑問に思われるでしょう。しかし、それが厳然とあるのです。すなわち、それが仏法の真髓である法華經の説く、利益、功德なのです。

さて、話を進めるにあたって、利益と功德の関係を整理しておきましょう。中国の天台大師てんだいだいしの『法華玄義ほつけげんぎ』という書物に、この関係について、次のように述べられています。「功德利益とは、

祇だ功德利益にして、一にして異なり無し。若し分別せば、自益を功德と名づけ、益他を利益と名づく」と。つまり、功德と利益の本質は同じものであり、あえて立て分ければ、利益というのは、他に功德を得させることをいうのであり、そして、その功德とは、自らを益することだというのです。

そこで話を「功德」にしぼって、もう少しくわしくみていきしたいと思います。功德という言葉について、法華經の出典を見ると、分別功德品17、隨喜功德品18、法師功德品19などに、しばしば出ております。これは、法華經を持ち、弘通する人の、さまざまな功德を説いたものです。そこに説き示された「功德」の本義を知るためには、日蓮大聖人の「御義口伝」を引くのが直道です。

それによると、①功德とは、六根清淨の果報である。②功も徳も「さいわい」ということである。③功とは「悪を滅すること」であり、徳とは「善を生ずること」である。④功德とは即身成仏のことである。⑤六根清淨それ自体が功德である。以上の五点に整理することができます。

功德の一つ「六根清淨」とは「生命淨化」のこと

まず第一の「六根清淨の果報」ということですが、この「六根清淨」という言葉は、すでにどこかでお聞きのはずだと思います。そう、山岳信仰などで、山登りする人たちが口ずさむ言葉です。私も昔は、文字も意味もわからず「ずいぶんおもしろい掛け声だな、ドッコイショット」

の変形かな」と思っていたものです。

六根というのは、眼、耳、鼻、舌、身、意の六つの「生命の働き」をいいます。そのうち、前の五つは五官と違って、肉体自体のそなえている働きであるのに対して、意根は「こころ」の働きです。したがって、六根清浄というのは、身体も心も、ともに清浄な働きをするということなのです。このことからもおわかりのように、宗教というものは、あくまで人間を離れたところには存在しないのです。

それでは、清浄とはどういうことなのか。考えてみると、六根というのは、本来、人間生命が持っているすばらしい宝である。地球上のどんな価値あるものも、これにとつてかわることはできません。にもかかわらず、人々が、この宝の価値を十分に發揮しているかとなると、はなはだ心もとないといえます。むしろ、その宝を使っていがみあい、他人をおとしいれ、自分自身も不幸に落ちこんでいる人が、なんと多いことでしょうか。それは結局、生命それ自体が濁っているからではないでしょうか。そのために、六根の作用も、清浄な働きを失い、曲がり、狂い、偏かたよつてしまうのです。

もっとも、たとえば「眼」といっても、たんに肉眼だけを指すのではなく、物事の判断力も含むのであり、その作用を起す根源を「根」といったのです。このような諸もろもろの根は生命作用を起す根源が清らかになること、これが「六根清浄」の意味なのです。もっと簡単に一口でいえば、「六根清浄」とは、「生命浄化」であるということになります。

功德とは、この六根清淨の結果としてあらわれてくるものなのです。したがって、法華經の説く功德とは、「棚からボタモチ」式に天から降ったり、地から湧いたりするものではないのです。自分自身を磨き、淨化していった結果として、生活の上にあられるものであり、それは、農夫が自身の力で麦を刈り取ったように、その人自身の生命活動をもって、能動的に開いていったものです。

繰り返して言えば、六根は生命に備わった機能であり、豊かな生命力の顯現によって、その機能は正常に、^{はつちう}潑刺と働いていく。そして、そのみずみずしい行動の積み重ねが、その人自身の姿の上に、生活、社会の上に、変革の力となり、実証となってあらわれてくる。これが功德ということなのです。

仏法では「仏」を生命の外には求めない

次に、第二の「功も徳もさいわいを意味する」ということですが、ここで「さいわい」とは何かということになります。一口にいつて、それは「生命の充実感」、真実の意味の「生きがい」である、私は考えます。難に遭^あわなくてさいわいだった、ただきものをしてさいわいだ、などとも使われますが、心からの「さいわい」という実感は、能動的な行動のなかにあるものです。停滞、惰性、受身のなかには、暗い陰鬱^{いんうつ}しかない、といえるでしょう。さきほどの六根清淨の果報の中身が、この「さいわい」という生命状態を指していると考えられます。

第三に、「功とは悪を滅すること、徳とは善を生ずること」についてです。仏法でいう善悪とは、生命自体の善悪です。無慈悲な自分、煩惱に振り回されている自分を乗り越えて、慈悲ある姿、苦悩に挑戦し、それを切り開いていく自身をつくりあげることができると――これが悪を滅し善を生ずることなのです。すなわち、この生命の本源的な転換にこそ、功德の本義があると
いうものです。

第四に、功德とは即身成仏であるということ。即身成仏とは、聞きなれない言葉かもしれませんが、簡単にいえば、ありのままの自分でありながら、仏という力強い生命を、自身の胸中から湧き出させることができる、ということなのです。仏法は「仏」というものを、人間の外には求めない。すべての人間の胸中深くに、その実体が秘められていることを発見したのです。法華經を信ずる功德とは、この秘められた仏を、自身の生命の内から、輝きあらわすことができるという点にあります。現に生きている自分、その姿のなかに、最大限に、その生を謳歌する力が、こんなこと湧き出してくるのです。

現実の人生、社会にあって、ヒゴイがすいすいと水の中を泳いでいくように、また駿馬しゅんめが自在に、広々とした大地を駆けめぐるように、あるいは、朝日が生命力を満身にたたえつつ昇るように、すがすがしい、しかも力感に満ちた「生」となっていくことなのです。この意味からすれば、第一のところ、功德とは「六根清浄の果報」が説かれていましたが、すでに「六根清浄」それ自体が、功德であることになります。これが第五番目の、功德の意味になります。

これまで見てきたように、法華經に説く功德とは、自身の生命を清浄にし、その中に、汲めども尽きぬ力、充実感がみなぎってくることです。自在に人生を生き、価値を創造する知恵と勇氣とがあふれてくることです。しかも、それは誰から与えられるものでもなく、自らの生命の内に咲いた「法の華」^{はな}であります。一言でいえば、人間変革、自己完成こそが、法華經の「功德」といえるのです。

第三章

人生の扉とびらを開く鍵かぎ

第三章

人生の扉とびらを開く鍵かぎ

人間としてあるべき七つの条件 〈多宝の塔〉



「七宝の塔」は、仏界の尊さを説いたもの

法華経が壮大な生命のドラマであることは前にも触れましたが、このドラマの展開のなかには、数多くの不可思議な出来事が起こります。ここで述べる「宝塔品」の儀式についても、法華経の精神を理解しないで読んでいると、まるで空想小説になってしまいます。

宝塔品は、法華経二十八品あるうちで、第十一番目の経文ですが、法華経のなかで、きわめて重要な位置を占めております。

というのは、宝塔品の前までは、釈尊は、靈鷲山りようじゆせんという現実の大地で説法しますが、宝塔品からは、まるで「人工衛星」よろしく、虚空こくう（大空）で説法するのです。あるいは地上座談会から、空中座談会へといったところでしょう。

宝塔品では、冒頭から、七宝しつぽうの塔が大地から湧き出て空中にのぼり、そこで宙に浮いていたというのです。この七宝というのは、七つの宝ということで、「金・銀・瑠璃るり、碑磔しやく、碼瑙めノウ、真珠、

玫瑰」などの宝物で塔全体が飾られているのです。

しかも、この塔は高さが五百由旬ゆじゆんで、ヨコが二百五十由旬とあります。これは、どのくらいの高さを表わすかといいますが、種々の説がありますが、一番小さい単位でいいますと、一由旬が、十六里とも、十二里ともいわれています。今かりに、最小の十二里説を採用しますと、当時の里程では、一里は六百メートルとされていますから、約七・二キロメートルの距離になります。したがって五百由旬は三千六百キロメートルになります。地球の半径が六千四百キロメートルですから、地球の直径の四分の一ほどの大きさです。もっと大きい単位でいえば、地球の直径ぐらいの大きさになってしまいます。

こんなとてつもない大きい宝塔が、大地から湧現ゆげんし、空中にかかったというのです。またこの宝塔には多宝如来たぼうにょらいという仏が乗っていて、釈迦もこの宝塔にのぼり二人の仏が並んですわったというのです。いったい、こんなことがありうるでしょうか。しかし、経文には、いささかのためらいもなく、厳然と、そのように説かれているのです。私も、いささか驚き、ずいぶん悩んだことがあります。ちょうど、昭和二十九年の暮れも押し詰まったころと思います。

そのころ、戸田前会長の「開目抄かいもくしょう」の講義録が発刊されたというニュースを耳にし、そこに宝塔品の儀式についての意義が明確に規定されていると聞いて小躍りせんばかりうれしく思ったものです。「開目抄」講義録は、奥付おくづけを見ますと、昭和二十九年十一月一日になっていますが、私がそれを手にすることができたのは、昭和三十年の春ごろだったと思います。

それによると、この巨大な宝塔というのは、生命の中に実在する仏界の尊さを譬喩的に説き示したもののなのです。

多少むずかしいかもしれませんが、その一節を引用してみたいと思います。

根源の力を湧現させる「南無妙法蓮華經」

「迹門（法華經二十八品のうち前の十四品）の流通分（序分、正宗分、流通分の一つで、法をいかに流布していくかを説いた部分）たる見宝塔品（宝塔品と同じ）において多宝の塔が立ち、釈迦・多宝の二仏が宝塔の中に並座し、十方分身の諸仏（宇宙のあらゆる仏）迹化他方の大菩薩（法華經迹門で化導された菩薩と、他の世界の菩薩）、二乗（声聞と縁覺）・人天（人界と天界）などがこれにつらなるいわゆる虚空会（虚空での会合）の儀式が説かれている。これは、はなはだ非科学的のように思われるがいかん。しかし、仏法の奥底よりこれを見るならば、きわめて自然の儀式である。もし、これを疑うならば序品のときにすでに大不思議がある。数十万の菩薩や声聞や十界の衆生がことごとく集まって釈迦仏の説法を聞くようになっていたが、こんなことができるかどうか。拡声器もなければ、また、そんな大きな声が出るわけがない。まして八年間（法華經が説かれた期間）それが続けられるわけがない。すなわち、これは釈迦己心（己心とは自己の生命の意）の衆生であり、釈迦己心の十界であるから、何十万集まったといっても不思議はない。されば宝塔品の儀式も觀心（生命）のうえに展開された儀式なのである。

われわれの生命には仏界という大不思議の生命が冥伏（みようふく）（目に見えず伏在していること）している。この生命の力および状態は想像もおよばなければ筆舌にも尽くせない。しかし、これをわれわれの生命のうえに具現することはできる。現実になれわれの生命それ自体も冥伏せる仏界を具現（ぐげん）できるのだと説き示したのが、この宝塔品の儀式である。すなわち、釈迦は宝塔品の儀式をもって己心の十界互具一念三千（じっかいごぐ いちねんさんぜん）を表わしているのである。日蓮大聖人は、同じく宝塔の儀式を借りて、寿量文底下種（もんていげしゆ）の法門を一幅（いっぷく）の御本尊として建立（こんりゆう）されたのである。されば、御本尊は釈迦仏の宝塔の儀式を借りてこそおれ、大聖人已心の十界互具一念三千——本仏の御生命である」（注「この中（）の内はいずれも筆者の注）」

「十界互具一念三千」とか「寿量文底下種」とかの仏法用語があつて、この内容を理解しにくいかもしれませんが、それはそれでけっこうです。ただ、ここでわかつていただきたいことは、この宝塔品の儀式も、生命の儀式であり、自身の中に、仏界という偉大な生命力をあらわすことができることを説いたものだということです。そして、日蓮大聖人は、この宝塔品の儀式を借りて、その仏界を湧現する根源の力、つまり南無妙法蓮華經（がりがりようてんせい）という画竜点睛（がりがりようてんせい）をうって、御本尊をあらわされたということです。

この戸田先生の講義に接し、私は感動しました。うれしさのあまり、友人にも読んで聞かせました。というのは、宝塔というものがわれわれの生命の中にある、この宝塔を胸中に打ち立てていくものこそ、御本尊なのだということが、しみじみとわかったからです。

「あなた自身の生命が、宝塔なのだ」

宝塔について疑問に思った人が、じつは、七百年前にもいました。それは、阿仏房あぶつぼうという人で、日蓮大聖人が、佐渡流罪さどるざい中に、弟子となって、純真な心で日蓮大聖人に仕えた人です。

阿仏房は、「いったい、あのような宝塔の儀式は、何を表わしているのでしょうか」と大聖人におたずねしたのです。それに対しての答えは、釈尊の説法を聞いた人たちが「法華經に来て己心の宝塔を見ると云う事なり」とし、さらに「今、日蓮が弟子檀那だんな又またかくのごとし、末法に入って法華經を持つ男女の、すがたより外ほかには宝塔なきなり、若し然しかれば貴賤きせん上下をえらばず南無妙法蓮華經と・となうるものは我が身宝塔にして我が身又多宝またたほうによらい如来なり」というものでした。

また「然しかれば阿仏房さながら宝塔・宝塔さながら阿仏房・此れより外ほかの才覚さいかく無益むやくなり」と言われ、別世界に宝塔があるのではない、阿仏房あなた自身の生命が宝塔なのだ、答えられているのです。

結局、阿仏房も、宝塔品のあの途方とほうもない儀式が、何を表わすものなのかに苦悩して、大聖人に質問したのでしょう。それが、宝塔というのは、阿仏房の生命自体の中にあることを教えられ、仏法というものが身近にあることに驚きと喜びをもって、さらに求道の心を燃やしたことでありましょう。

また、宝塔が、金や銀などの七つの宝で飾られていることも、もはや宝塔が生命の中にあるも

のであってみれば、生命の財宝であることは明らかです。つまり、生命を飾るものであり、それは、現実の人生において輝きを表わしていくところのものでありましょう。

したがって、日蓮大聖人は、阿仏房に対して、「聞・信・戒・定・進・捨・慚の七宝を以てかざりたる宝塔なり」と答えています。

私は、この七つの宝を、人間が人間としてあるべき七つの条件ではないか、と思うのです。このことについて、しばらく考えてみることにしましょう。

日常生活に不可欠の七つの大乗戒

「聞」とは、文字どおり「聞く」ということで、人の話を聞く、また書物から何かを学び取る、そして、それらを正しく価値判断し、生活の知恵として活用することを意味します。

また「信」とは、人間への信、生命への信——ここに大聖人の仏法の真骨頂があります。

法華経において、もっとも強調されることが「信」ということです。法華経ほど「信」の重要性を説いた経典はなく、また日蓮大聖人も、「信」というものが、仏法実践の根本の在り方であるとしています。しかし、これには深い意味があります。「信」をこれほど強調する裏付けには、欺かないということが対応しなければなりません。釈尊にせよ、日蓮大聖人にせよ、絶対に欺かない哲理としての確信に貫かれていたからこそ「信」を根本に置いたのだと思います。

こういったからといって、私は「懷疑」というものを否定するものではありません。いや、むしろ

ろ、私自身が、仏法を学びつつ、疑問と、それがわかったときの感動との連続でした。よく「大疑は大悟に通ずる」ということが言われるとおり、疑問をもつことは、人間が向上するうえで必要なことです。しかし、疑いは、信に帰着する手段であり、信を失ってよいということではありません。それでは、懷疑というより、盲疑となってしまう。

ひるがえって現代社会は、ますます進行する人間関係の悪化、信頼感の摩滅といったような深みにはまっています。これも、根本的には「信」をないがしろにしてきたことから起きたともいえましょう。

次に「戒」についてですが、これは仏教でも、小乗戒と大乘戒では、その意味がまったく異なります。小乗の戒は、外からの規制によって自らの行為、行動を束縛するということですが、大乘の戒はそうではなくて、自らの煩惱ぼんのうをよくコントロールする、欲望に振り回される自身ではなく、欲望を自己と他者との両方のプラスとなるような方向に向けていく、これが大乘の戒であります。欲望というものは、なくそうとしてもなくせるものではありません。欲望をいかに正しくリードし、コントロールしていくか、これが重大な課題なのです。

「定じょう」とは、散漫ではなく、人生に根本的な安定感があるということを表わしております。根なし草が波のまにまに、はかなく漂うごときものではなく、根本的な自らの精神の支え、基盤があるということ。あるいは、前途に対して、はっきりした目的観をもつことの必要性を説いているともいえます。

「進」は成長、向上心をもち、人間としての素養を身につけていくことを意味します。

「捨」とは、目的のために自らを捨てる。捨てるといっても、けっして命を捨てるというような自殺行為、犠牲行為をいうものではありません。自己を捨てるとは、粘り強い、エゴに負けない利他の行為の重要さを意味しています。

「捨とはほどこす」ということが「御義口伝」に出ていますが、自らの生命を他にほどこし、拡大していくことが「捨」になるのです。「慚」は自己を反省することであり、たえず自己変革をおこた怠らないことをいうといえましょう。これは、たんなる過去への反省ではありません。未来への飛翔を込めた自覚的な意識といえましょう。

使いこなしていない「七宝」の価値

今しばらく私たちの日常生活のなかで、聞・信・戒・定・進・捨・慚を視座として振り返ってみるならば、なんと、この人間の価値を振り捨てている人の多いことでしょうか。

たとえば、誰の言葉にも耳を傾けようとしらない人がいます。頑固は美德、といわれた時代も過去にありましたが、いたずらに自己の信条にだけとらわれて周囲を見ようとしなのは、本人にとってけっしてプラスとまらないだけでなく、人間として本来的にもっている価値を、才能をいたずらに殺しているに等しいといえましょう。「人の振り見て我が振り直せ」というのは、現代ではあまりかえりみられない箴言となったようですが、人間というものは、まったく一人で生活

しているのではないし、また、そういうことは不可能なのだから、やはり、自分にプラスになるような忠言には耳を貸すべきでありましょう。

また定まった人生観も、目的観もなく、ただ時の流れるままに生きている人もいます。それも人生ではありましょう。だが、人間としてこの世に一度生を享けた以上、この自らの生を完全に燃焼していつてこそ、価値があるのではないでしょうか。これは「定」の欠如といえます。その他、自己のエゴイズムにおぼれて、あるいは煩惱に負けて、自らを抑制することができなくなっている人などは、「戒」の欠如に相当するし、こうして順次みていけば、私たちは、この七宝の価値を十分に使いこなしているといえない面が、あまりにも多いようです。

けっして高慢な説教をしているのではない面が、現実社会を生なまの姿でとらえるとき、けっしてきれいごとばかりの羅列られつで解決できる問題ではないこともわかります。七宝の真意が、理念としての生命の尊貴を訴えるのではなく、実践に焦点をおいているのは、ここに意味があるのです。

以上が、ほぼ日蓮大聖人の「御義口伝」による七宝の解釈を、人間の価値という観点に即してみた場合ですが、生命の尊さを表わす七宝の塔は、こうしてみると、人間らしく生きるための指標を示しているといえましょう。

また「御義口伝」には「今日蓮等いまにうれんの類たぐい南無妙法蓮華経と唱となえ奉たてまつるは有七宝うしつぽうの行者なり」と教えられています。これは末法の法華経、南無妙法蓮華経を信じ実践する者は、生命の仏性・尊

厳をただ観念的に叫ぶのではない、ということ。あくまでも人間としての価値を、事実のう
えで開き示していくところにポイントがあることは、言うまでもありません。この意味におい
て、七宝の塔というのは、ただきらびやかな宝の塔―尊厳なる生命―をいうだけでなく、まさし
く生命の尊厳を、実際の行動の次元において実行していく規範を示されたものといえましょう。
このように、法華経を「読む」とき、空想小説どころか、そこには人間としての行動の指標
が、きらめいているのです。

人間としての姿勢へ六波羅蜜具足^{ろくはらみつぐそく}

「異常」に慣れる恐ろしさ

「アルジェの戦い」という映画が、何年か前にきて、だいぶ話題になりました。私も友人と見に行く機会がありました。戦争と人間という、興味つきないテーマを追求した映画に私は感動を覚えしました。戦争とは、人間社会における、もっとも緊迫した異常事態です。一つの極限状況がそこにあります。そうした状況の前では、ふだん隠れている人間生命の深淵^{しんえん}が露呈されて、深く人間存在というものを考えさせられました。そうした極限状況でこそ、人間の真価が問われるものなのでしょう。

その帰り道、自然の成り行きとして、友人との話題は、その映画評でした。私は、とくに、この映画に登場した、一人のフランス軍将校の生き方が心にかかり、友人に語りました。名前は忘れましたが、その将校は、第二次大戦の時は、ナチス・ドイツのフランス侵略に抵抗して、身を挺^{たい}して、地下の反ナチ運動に戦うようになります。フランス人民の自由と権利を獲得するため、勇敢に戦うのだ、と。ところが、時移り、その同じ人物が、次にフランス軍の将校として、アル



ジエにおもむく時は、アルジエの独立と解放を願い戦う人々を、武力と権力をもって抑圧し弾圧する側に立っているのです。

見事に、人間の二面性をのぞかせています。時も、状況も、体制も違ふのだと主張するかもしれない。また本人にしてみれば、祖国フランスのためということで、一貫した信念の行動であったのかもしれませんが。

しかし、一步掘り下げて、人間という次元で、ともに人間らしくあるとはどういうことを考えてみると、これはやはり、矛盾といわざるをえません。

これとよく似た、次のような事例が思い浮かんできます。第二次大戦下に、ナチの指導のもとにユダヤ人の大量殺戮に手を貸した人々も、中国で非道きわまる行為を行なった日本軍人も、あるいはベトナム戦争で、残忍な所業を行なったアメリカ兵士も、家庭にあっては、よき父であり、よき夫であり、よき息子であったと——。戦争という極限の状況にあっては、むしろ狂気が当たりまえになってしまふのです。

これは、なにも戦争という異常な事態だけの問題ではないと思う。私たちの、平凡な日常生活の諸所に待ちかまえている陥穽があるものです。異常を異常と気づかないことほど恐ろしいことはありません。気づかないのは、それが慢性化してしまっているからなのでしょう。初めのうちは、少し奇妙だとか、間違っているのではないかと思っただけでも、その時点で本気に考え、行動しないと、いつのまにか慣らされてしまふのです。

ことに現代は、公害・過密化社会、そして管理化された組織社会という、すでに久しく慢性化した異常状況のなかに私たちは住んでいます。時代・社会全体が異常化しているほど恐ろしいことではないと思います。全体がむしろまされれば、それを匡正きやうせいすることも、きわめて困難になってきます。

その異常さの慢性化がすすむと、ついには多くの人は、それが正常だと思い込むようになってしまいます。しかも、異常さはますますエスカレートして、よりいっそう強烈な異常を求める傾向すら生まれかねません。そして、最後は、臨界点を越えて自ら破滅していく。より強い刺激を求めて、ついには自己崩壊していく麻薬患者の姿に酷似こくじしています。

こうした社会で、健全な人間の精神と肉体を維持していくことは、なみたいていのことではないでしょう。この社会に、真に人間らしい、健全さを取り戻すことが、今ほど要請される時代はありません。

人間の健全な姿を示す六波羅蜜

次に、では、どう変革されねばならないのか。人間のもっとも人間らしい健全な姿とは、どういうものなのか。いかに人生を生きていけばよいのか。私たち現代人にとって、きわめて重大な課題となってくるのです。

それは、さきに「アルジェの戦い」で話題にしたような、時代状況とか、体制の変化で動揺し

たり、また逆転してしまうような不安定な指標であってはならないことは、当然です。

この人間の条件、つまり人生への基本的な指標ともいえるべき内容を、きわめて明快に把握し、私たちに提示しているものに、仏教の六波羅蜜があると、私は考えるのです。

もともと六波羅蜜とは、菩薩が悟りを得るために修行する六種の行法のことなのです。これは大乘仏教の思想です。「波羅蜜」とは、サンスクリット語のパラミター (Paramita) を意味し、また彼岸と訳され、「度」(わたる、わたすの意で「渡」と同じ) と同義になります。

今も、京都に六波羅という地が残っていますが、おそらくこの六波羅蜜に由来しているのだでしょう。

六種の内容とは、檀那波羅蜜(檀那とは布施ということ)、尸羅波羅蜜(尸羅とは持戒、戒のこと)、羼提波羅蜜(羼提とは忍辱の意)、毘梨耶波羅蜜(毘梨耶とは精進のこと)、禪那波羅蜜(禪那とは静慮の意)、般若波羅蜜(般若とは知恵のこと)です。

ちなみに、この六波羅蜜が大乘の菩薩の修行規範だというのは、小乗経で説かれる、これに類する行法である八正道と比べると、その大乘・小乗の違いがはっきりわかります。八正道とは、正見(正しい見解)、正思惟(正しい思索)、正語(正しいことば)、正業(正しい行為)、正命(正しい生活)、正精進(正しい努力)、正念(正しい思念)、正定(正しい瞑想)の八つの道のことです。これらを見ると、いずれも自己の精神鍛練、生命の清浄化を目指したものであることがわかります。大乘菩薩の六波羅蜜には、そうした自分自身のための修行も当然含まれています。

が、檀那波羅蜜、^{だんな} 毘提波羅蜜^{せんだい}のように、他者との関係が問題になります。

つまり、こうしたところにも、小乗と大乘の精神の違いが明確にあらわれています。小乗は、いかなる人間修行といっても、所詮^{しよせん}、利己^{りこ}のための修行にすぎません。自分という一個の生命の域を出ない。大乘の精神は、利他にあります。自己を犠牲にしても、他者のために身命をけずるという「慈悲」の実践が、その主眼になっております。しかも、それは本質的には、自己犠牲に終わるものではなく、かえって、自身の生命を豊かにし、拡大していくことになるというものです。

現代のように、人間同士が不信で固められ、誰もが利己と私欲に狂奔^{きやうほん}し、他人への思いやりや情愛が失われつつある時代にこそ、まさに、この六波羅蜜の指標が輝きを増してくるのではないかと思います。

六波羅蜜は、おのずと得られる

読者のなかには、この仏教に説かれた規範を、そのまま人生の指標として、一般化して論ずるのは、身勝手な我田引水^{がでんいんすい}だと考える人もいることでしょう。たしかに、法華経以外の経典では、そうした見方も当たるかもしれません。たとえば、釈迦の十大弟子のうち知恵第一といわれた舎利弗^{しゃりふ}が過去に六十劫という永い間、布施行^{ふせぎよう}を行じたが、途中で耐えきれずに退転したなどと説かれています。多分に人間ばなれした感をまぬがれないといえます。しかし、法華経では、そう

した批判は当たらないのです。法華經の開經（プロローグにあたる經典）である無量義經に「いまだ、六波羅蜜の修行を得ていないといっても、六波羅蜜は、おのずと得られる」と説かれています。つまり法華經哲学においては、六波羅蜜をそれ自体として、修行しなければならぬものとしてはいないのです。法華經を受持したときに、自然にそなわってくる特質——いわば、法華經という偉大な法を信受することによって、おのずと、発現してくる人間性の発露として、考えられていることがわかります。

慈悲心、生命力、忍耐を持つ

たとえば、初めの「布施波羅蜜」についていえば、布施という物物の布施と考えがちですが、仏法では生命の布施がもっとも尊いとしております。生命の布施とは私たちの生命を駆使して人の幸福のために活動していくことです。いうならば、社会の中にわが生命を布き施すことと考えてよいでしょう。具体的にいえば、人間としての、他人への思いやり、慈しみの心と、それともなう行動であると考えられます。

人間の生活も、社会の営みも、相互の間に相手の価値を認め、思いやる心情とその発露があつて、初めて円滑な活動が成り立っていきます。家庭のなかで、これが失われたとするなら、悲劇でしょう。憩いの場であるべきところが、非情な修羅の場になりかねません。一家離散の末路をたどることになります。政治の世界の場合は、さらに悲惨です。国民は、権力者の道具とし

か見なされないでしょう。国際間においては、大国のエゴイズムの横行を招きます。

小さき者、弱き者への思いやりをもち、自らその味方となっていくことは、人間として、また社会において、もっとも大切な要素の一つといわざるをえません。仏教では、これをまた、慈悲と呼んでいます。「慈」とは、樂を与えること、「悲」とは苦を抜き取ることを意味しています。

仏教だけでなく、いわゆる高等宗教において、概して愛が説かれているのも、人間にとって、これが不可欠の要件であることを、見抜いているからにちがいありません。

「持戒波羅蜜」とは、戒を持つ^{たも}ということですが、なにも小乗教に説かれるような、二百五十戒、何十戒といった非人間的な「掟^{おきて}」を守れということではありません。小乗の戒など、全部、実行していたら、生活さえできなくなってしまう。「戒」とは、元来、防非止惡^{ぼうひしあく}という意味で、非を防ぎ惡を止めるということです。その非とか惡とかは、自己の生命にある欲望や衝動に身をゆだねることから生ずるものでありましょう。つまり、ここでいう持戒の真意は、自分のどす黒い欲望や、衝動に振り回され、支配されてしまっ^てはならないということです。それを抑制し、正しくコントロールしていくことを指すのです。「克己^{こつぎ}」などというと、やや古くさい觀念に聞こえるかもしれませんが、やはり、自分を正しく知り、自分に打ち克^かつ生命力をもつということ、いかなる時代・社会にも欠かせない人間の条件の一つではないでしょうか。

現代の社会は、かつて、人間の欲望や衝動の足かせになっていた宗教的戒律や、社会的禁制が取り払われ、欲望や衝動が所せましと暴れまわっている觀を示しています。エコノミック・アニ

マル、セックス・アニマルと、本能や欲望だけで行動する動物（アニマル）たちと同列の位置に人間をおとし陥れてしまっております。むろん、その反省は見られるものの、現実これにどう解決するかという点では、まったく無力のようです。

むろん、一部でもくろまれていような、いわゆる戦前にならった、道德教育の復活では、解決するはずありません。かえって、たんなる無理な締めつけは、人間の精神の自由まで抑圧しかねません。

個々の人間ひとりひとりが、心の中で、自らの欲望や衝動を直視し、それを規制できる強い「自我」を確立する以外にないといえましょう。その意味からも、ひとりひとりの生命内奥ないおからの人間革命を叫ばずにいられないのです。

「忍辱波羅蜜」にんにくとは、忍耐のことです。忍耐という場合、自分の内と外と二面についていえます。外に対する忍耐とは、いうまでもなく、厳しい環境、生活条件に対し、耐え忍ぶことです。内の忍耐とは、自分の心に起こってくる驕たかぶった気持ち、慢心、または偏見、邪見を、自ら打ちひしいでいける力です。

もちろん、かつて、忍従という言葉が意味したような、家や世間、權威、権力のしがらみに縛られて我慢をしろといった、非人間的なそれを指すのでないことは当然のことです。いかなる事態にあっても、生命の芯しんをもった忍耐強い人は、けっして絶望や自暴自棄におち陥らない。必ず暗あんを明めいに変えていく深さと強さをもった人なのです。忍耐を放棄することは、易やさしい。しかし、それ

は、多分に、自己を安易な道に走らせていることが少なくないことを知るべきでありましょう。

精進し、内省し、深き知恵を学べ

「精進波羅蜜しやうじん」とは、つねに前進し、向上する意欲を持つということを意味します。仏法では「進まないことを退く」とさえいつております。これは一見そうではないようですが、人生においては真理なのです。自分では、少々、ひとところにとどまってもよいと思っている。しかし、じつは、とどまっているのではなく、すでに、何歩も後退していることになるのだということですね。日蓮正宗の江戸期の中興ちゆうきゆうの祖、日寛上人にちかんが、精進を釈して「無雑むざつの故に精しやう、無間むげんの故に進」といわれています。清浄しやうじやうな心を持って、自身の成長と完成と、人々の幸福のために、間断なく進むことが、精進しやうじんの人といえます。流れる川は清い。しかし、淀んだ場合は濁り、臭気さえ生じます。人間も同じで、今日も発心ほつしん、明日も発心という姿勢が大切なのです。

人間は、どこまでいっても未完であるという意味のことを言った人がいます。自らの人間としての完成を目指して、生涯、努力し、成長を遂とげていくところに、他の動物にはない人間らしさの本質があるのだと思います。職業に定年はあっても、人間という本職に定年はないのです。

「禅那波羅蜜ぜんな」、または「静慮波羅蜜じやうりよ」ともいいます。自己を顧みかえり、自分を知り、思索していくことでありましょう。禅というと、すぐ坐禅のことと、その姿を思い浮かべるかもしれませんが、禅とは本来、自己への内省、自我の確立ということなのです。その一つの手段として、いわゆる

坐禪があるにすぎません。自己への内省と、そこから確立される主体性の確立こそ、禪那波羅蜜の意義と考えます。

最後に「般若波羅蜜」です。日蓮大聖人の仏法では、六波羅蜜の中で、これを根本としております。般若とは知恵のことです。人類を特色づけて呼ばれる、ホモ・サピエンス（知恵ある人）とは、この人間の特質を端的に示しているといえましょう。

ただし、仏法という知恵というのは、一般世間でいう「知恵」とはいささかその意味を異にしております。それは、人間生命の内奥からダイレクトに発してくる、生命のダイナミズムといったニュアンスがあります。ともかく知恵とは、人間の実践行為の直接の鍵になるものでありましょう。変化する状況にいかに対処し、よりよき生を営もうとする働きも、人間の知恵の働きです。人間社会において、是非の判断を下し、価値を選択することも、知恵の働きです。

知恵は、現実の生活のあらゆる機会に要請される、人間の、人生に欠かせない一つの条件であるといえます。

これら六波羅蜜は、人間として、もっとも必要な基本条件といえましょう。また、人生の指標ともいえるものではないでしょうか。むろん、ほかにも、その条件として掲げるべき項目はあるかもしれません。しかし、少なくとも、この六つの要素は欠かすことができないものです。すべての人が、たえず、この六つの要件を、心に刻み、いかなる行動においても忘却せず、実践するならば、必ず、それらの変革された人間群像によって、新たな社会の蘇生がなされるものと確信

いたします。

人間教育の規範

〈開示悟入〉かいじごにゆう

「開示悟入」のかいじごにゆうとんでもない誤解

仏教とは、その言葉が示すように、仏の教えということ。仏というと、いちおう釈迦仏のことを考えますが、仏教では、釈迦だけが仏ではありません。法華経のなかにも、釈迦以外のさまざまな仏の名が出てきます。それぞれの仏には、その出現する時代と国土が決められているがふつうです。では、いったい、仏がこの世に出現する目的は何か。

その仏の出世しゅつせ（世に出現したこと）の目的を、もっとも端的な表現で示しているのが、方便品に説かれている、開示悟入かいじごにゆうの四仏知見しぶつちけんといわれるものです。

釈迦は、知恵第一の弟子である舎利弗しやりほつに語ります。

「舎利弗、いかなるをか諸仏世尊そんは、ただ一大事の因縁をもつてのゆえに、世に出現したもうと名づくる。諸仏世尊は、衆生しゅじょうをして仏知見ぶつちけんを開かしめ、清浄せいじようなるを得せしめんと欲するがゆえに世に出現したもう。衆生に仏知見を示さんと欲するがゆえに、世に出現したもう。衆生をして、



仏知見を悟らしめんと欲するがゆえに、世に出現したもう。衆生をして、仏知見の道どうに入らしめんと欲するがゆえに、世に出現したもう。舍利弗、これを諸仏はただ一大事の因縁をもつてのゆえに、世に出現したもうとなづく」と。

ここに出てくる「一大事」とは、「さあ、大変だ、一大事だ」と、ふつう使われる一大事ではありません。仏の根本の、もっとも大切な教えといった意味です。仏が出現した目的は、仏の知見、知恵を、人々に開かしめ、示し、悟らしめ、入らしめることにあるというのです。これを、ふつう開示悟入の四仏知見と呼んでいるのですが、この開・示・悟・入という言葉に深い意味があります。

ここを、ただ単純に読むと、なにもたいしたことを言っていないように思えます。仏のすぐれた知恵を、人々に得させることを説いているだけではないかと――。

しかし、それは、多少この一節の真意を読みちがえています。多少どころか、根本的な誤解が、そこにあるといえます。

仏のもっているなにかを、人々に与えるといったことではないのです。仏の知見を開示悟入する主体者は、ほかならぬ衆生（人間）だからです。仏はあくまでも、その触発者にすぎません。もう少し具体的にいえば、仏の知見といっても、それは、仏の独占物ではないということですね。ここが大事です。本来、あらゆる人々が、内にもっているものです。どんな人も、胸中に尊厳なる仏の生命がある。あらゆる人々に、自身に内在している尊極な生命を気づかせ、開発させ

るために、仏が出現したのだと説いているのです。神に近づくとか、神の御意どおりなどと「人間」と「神」を対置してみるのではなく、「人間」の中に「仏」を見るのです。見るというより、発現させていくといえるでしょうか。

「仏」から与えられるというのと、「仏」を知覚するとの解釈の違いは、たいした差異でない、と思うかもしれませんが、しかし、本質的な差異があるといわざるをえません。つまり、前者の立場は、仏と衆生が対置されています。仏だけが、最高の超人的な存在であり、人々はその仏に教えられ、仏に一步步近づいていくものだといった観念が、その背景にあります。西欧的な、神と人間との対立を思い浮かべるものがあります。それに対して、後者の立場は、本質的には、両者が対等の存在である。仏とはなにも特別の存在ではない。もともと、すべての人が仏なのだという、平等観が基盤になっているのです。そのうえで、あとは自身が胸中にもっている尊厳なる仏の生命を、どう開発するかという問題になるわけです。こうした考えが真に確立されるならば、それは真実の平等観の確立にもつながっていくことでしょう。すべての人が仏を内に持つ存在だとする到達点の偉大さは、そこにもあります。

「^{ほとけ}仏」とは、特別の存在ではない

このことを、もつともよく示している言葉が、開示悟入かいじごにゆうの初めの「開く」という言葉です。開くという言葉のイメージを考えてみてください。反対語は閉じる、閉ざすということになります。

す。扉とびらを開く、閉ざすというイメージです。開いたときにあらわれるものは、もともと内側に存在したもののはずです。閉ざせば、内にあるものでも、現実にはあらわれない。

開くということは、そこにはなかったものを、よそからもってくるということではありません。仏の知見を開かしめるという意味も、本来、生命のなかに実在する仏の働きを、開きあらわすということです。「開く」というのは、仏法独特の考え方です。けっして、外から与えられるものではないのです。

「開示悟入」の「開く」が、一切の出発点

日蓮大聖人が、成仏じょうぶつについて「成は開く義なり」と言われていますが、同様の意味です。成仏、つまり仏に成るというのは、私たち平凡な人間が、しだいに境涯を高め、成長を経て、仏に成っていくというものではない。まして、死んだら、仏さまだというものではありません。私たちの生命自体に仏が内在し、その働きを開きあらわしていくことが、成仏という意味なのだ、と教えられているのです。

仏とは、他にあるのではない。自身のなかにあるのだと知ることが、仏知見を開くという意味です。次に開示の「示す」とは、その内にある尊厳なる生命を、現実の生活、振舞いのうえに、自身の生命の躍動した姿として示すことといえましょう。さらに「悟る」とは、その躍動した生命活動のなかで、一つの境涯というか、確信をつかむことと考えてよいと思います。「入る」と

いうのは、もう一步、それが深まった段階といえましょう。完全に体得しきった姿です。生命それ自体の働きが、自然に力強く輝いた活動になっている。間違いない人生軌道に入っているという事です。したがって、開示悟入といっても、まずはじめの「開く」ことが、一切の出発点になります。

私たちの現実的な生活の場面でも、同じことがいえます。たとえば、なにか困難にぶつかる。難題に出会う。その苦難にどう対処していくのか。どう打開していくか。

私たちは、問題の責任を他人に転嫁したり、社会やまわりの環境のせいにしがちです。あるいは「運命」の星のもとに、あきらめたりします。しかし、その問題から離れ、自分から離れたところに、原因や解決を求めるのではなく、問題自体のなかに、その難問をかかえる自分自身に、根本的な打開の鍵があると知ることが「開く」という姿勢です。苦難に正面から挑み、乗り越えていくことが「開く」という姿勢にほかなりません。そうした、数々の試練を経て、揺るぎない確信をつかむことができるようになるのだ、といえます。確信を得て、あとは、嵐がこようと、波風がたとうと、ゆうゆうとわが人生を闊歩^{かつぽ}していける境涯が「悟入」といえましょう。

自分を離れて、他に目を奪われるかぎり……

教育という問題、ことに人間教育の在り方についても、同様のことがいえると思います。プラトンの対話編のなかに、興味深い話があります。ソクラテスとメノンの対話ですが、「学ぶ」と

いうこと、「教える」ということの意味を、巧みな対話をおして、語っています。

メノンの引き連れる一人の召使いの子どもに、幾何学の初步を「教える」のです。まったく数学に無知な子どもが、ソクラテスとの問答をおして、次々に、新しい知識を獲得していくという話です。ソクラテスが「教える」というのではなく、その子どものなかから、自然の形で、知識と知恵を引き出すのです。

詳しい話は、ここでは略しますが、ソクラテスの主張する結論は、人に「教える」ことではなく、思い出させることが大切だということです。どんな人も、潜在的には、あらゆる知識と知恵を、本来もっているのだということです。

私たちが、書物や教師に触れて「学ぶ」ということも、そこからまったく新しい発見をするのではなく、じつは、自分が忘却していたものを想起することなのだ、と主張しています。

このソクラテスの考え方は、厳密に検討すれば、多少、問題があるかもしれませんが、なかなか示唆に富んだ話だと思います。教育のあり方、学習の意味を、改めて考えさせられるものがあるといえないでしょうか。古代ギリシャの哲人の言葉に、学ぶところは、少なくともはずです。

この本来あるものを引き出し、導くという考えが「開く」という意味なのです。

池田会長が、よく言われることを思い出します——。人にもものを理解させるときに、教授主義ではいけない。指導主義でなければならぬ。なにか、上から教えてあげるといふ行き方では、結局、相手も自分も行き詰まってしまふ。

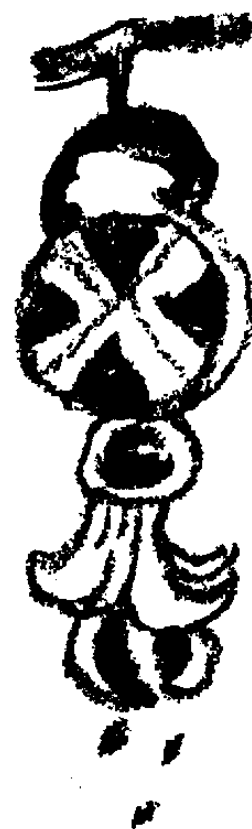
相手と同じ土俵に立ちながら、方向を指し示し、導くという行き方でなければだめだ。本当に、相手を尊敬する気持ちが必要ければ、指導などできない。相手の隠れた本能や特質を、どれだけ引き出せるかが、指導者の力である——と、教えられました。平和へ向かう民衆の自発の心をオルガナイズしていく原体験と、仏法から得た知恵ではなかったかと思っています。

人の教育だけでなく、自分自身についても、同じことがいえると思います。人間はだれでも、自分にはなんの取り柄もない、才能もないと、劣等感に陥りがちです。他人がよく見えてくる。人をうらやみ、人のまねをすることで、そうした気持ちをまぎらわしたりします。

しかし、自分を離れて、他に目を奪われているかぎり、ほんとうの満足感は得られないでしょう。もっと、自身を見つめるべきです。きらびやかな人生や、特異な才能だけが、人間の価値ではない。どんな人にも、その人なりの特質や個性の輝きがあるはずだと、確信すべきではないでしょう。

仏知見を開示悟入するとは——仏とはなにも特別な存在でないように——真の人間的価値の創造を促した、思想史上にも特筆すべき言葉といえましょう。一個の人間として、どれだけ生命の価値創造をしたかを、仏法では重要視しているのです。境涯を開き、確信に満ちた、不動の人生を歩むことを教えた言葉ではないでしょうか。

真の幸福は胸中にある 〈衣裏縫宝珠〉



私たち凡夫ほんぶの気づかない「無価むげの宝珠ほうじゆ」

法華經ごひやくでしじゆきほんの五百弟子受記品8に、次のような話が記されています。

ある人が親友の家に行つて懇談したり、ご馳走になつてゐるうちに、酒に酔つて、とうとう友人の宅で酔いふしてしまいました。ところが、彼がまだ酔いからさめないうちに、友人は公用でどうしても出張しなければならなくなり、客を寝かせたまままで出かけました。

そのとき、友人は価あたいをつけれないほどの素晴らしい宝珠ほうじゆ（無価むげの宝珠）を、酔いつぶれている客の着物の裏に、落ちなないように縫い込んでおきました。酔つて前後不覚になつてゐた男は、このような贈り物を友人がくれたことを、まったく知りませんでした。

やがて、酔いがさめた男は、起きあがつて親友の家を後に、流浪るろうの旅をしながら、他国おもむへと赴いていきました。どんなに努力しても、わずかばかりの衣食を得るのがやっとというありさまで

した。それでも彼は、少しでも手に入るものがあれば満足し、喜んでいました。

その後、たまたま、先の親友が彼と出会いました。そして彼のみすばらしい姿に驚いて言うのでした。

「なんと情けない姿をしているのだ。どうして、衣食に困ってそんな姿をしているのかね。私は昔、君の衣服の裏に無価の宝珠を縫い込んでおいたはずだ。それは君の願いが何でも叶えられるほどの高価な珠だったのだ。ほら今でもちゃんとあるじゃないか。それなのに君は、まったく知らないで苦しみ悩んで生活しているなんて、愚かなことだ。さあ、この宝をもって、意のままの生活をしなさい」と。

これを聞いて男は、今までの自分の愚かさを恥じるとともに、無価の宝珠を得た喜びに燃えたのでした。

さて、この話を聞いて、どんな感想をおもちですか。「大体、友人がメモでも書いて教えてやらなかったのが不親切だよ」「俺にもこんな友だちがいたら、ありがたいな」「よく同じ服をいつまでも着ていたものだね。服を取り替えていたら、それこそ絶望的なことになっていたらうな」などと、私自身も考えたりしたことがありました。しかし、これは譬喩というものの性格を知らないところからきたものだったことは、あとになってわかったことです。

それはともかく、この譬喩は、私たちの生命の内に「無価の宝珠」があって、それを私たち凡

夫がまったく気づかないことを教えたものです。その無価の宝珠とは、私たちの生命に内在する「仏界」という宝のことなのです。このように仏法では、さまざまな譬喩ひゆを通して、人間生命の内にもつ偉大な働きを自覚させていくのです。

ふたたび強調すれば、仏法で説く「仏」は、キリスト教などで説く「神」のような宇宙を支配する造物主ではありません。また、私たちの外にあつて、手を差し伸べ、助けてくれる人でもないのです。仏とは、どこまでも、人間としての最高の知恵と力をそなえた人のことです。そして、そのような理想的な知恵と力が、すべての人の生命に、本来そなわっていることを、この譬えは示しているのです。

幸、不幸も自身の内にある「宝」しだい

考えてみれば、幸福を感じたり、不幸を感じたりということは、環境と自分との関係性のうえから生じることです。どんなにおいしい食べ物があつたとしても、お腹なかの具合の悪い人にとっては、かえってそれが不幸の種にもなりかねません。どんなにお金がたくさんあつても、満足できずに、さらに貪むさぼっていくならば、それはけっして幸福とはいえないでしょう。問題は、あらゆる環境に対処しつつ、さらにそれに積極的に働きかけていく自分自身の側に、より多くの要因があるということです。

しかし、この基本的な原理を、今日までの文明は、いつのまにか忘れ去っていたといえないで

しょうか。環境さえとのおえば、人間は幸福になる。お金さえあれば、美しい着物さえあれば等等、人生の宝を外界に求めて放浪の旅を続けて、それらの宝が、瞬時の喜びを与えてくれることに満足してきたのが、今日までの人類の姿です。そこには、外界によって振り回されている、哀れな姿がありません。

仏法は、外界と自分という関係性を深く思索し、自己自身の内にこそ、外界のすべてに意味を与え、活用し、働きかけていく真の宝があることを発見したのです。そして、その宝のうちの最高の宝、というよりも、あらゆる宝を備えた人間生命を、根底から支えている力Ⅱ仏界という、力強く、清浄で、創造性に富んだ、しかも宇宙大の広がりをもった世界が、私たちの生命の奥深くに横たわっていることを、発見しました。

この仏界という生命を覚知し、それを基盤とした生活をしていくところには、外界のあらゆるものが、人生を潤す素材となり、何が起こっても、生命の根底においては微動だにすることなく、悠然と乗り越えていくことができます。そこでこの仏界を、法華経では「無価の宝珠」に譬えたのです。そして、その存在を知らない私たち凡夫を、酒に酔って前後不覚であった男に譬え、その男が諸国を流浪して生活の糧を求め歩いた姿によって、自身の生命の外に幸福を求めて尋ね歩くことの愚かさを、示したのです。さらに、わずかな衣食を得て喜んだということは、さまざまな学問、思想などによって少しの真理を発見し、喜んでゐる姿を示しています。

カール・ブッセの有名な詩に、次のような言葉があります。

山の彼方あなたの空遠く

「幸」さいはひに住むと人のいふ。

ああ我人われと尋めゆきて、
涙さしぐみ帰りきぬ。

山の彼方になほ遠く

「幸」に住むと人のいふ。

結局、これも、自身のほかに幸福の実体を求めゆくことは、果てしない旅路に終わることをう
たったものといえましょう。

人生の宝は、わが胸中にこそある——この法華經の発見にこそ、偉大な真理と、幸福創造への
鍵が秘められていることを、私は主張したいのです。

幸福は山の彼方の遠くにあるものではない、自らが内に生命の讃歌をかぎりなくうたいあげて
いく行動のなかにある——と私は言いたいのです。したがって、幸福観とは「人生いかに生きる
か」と同義であり、人間観への鋭い洞察のうえに展開されるべきものであるとも、いえるでし
う。

厭世主義か楽天主義か 〈衆生所遊樂〉

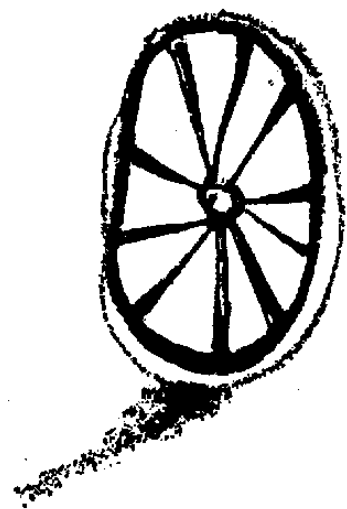
「恋の逃避行」は、仏道修行の逃避に通じる

「生まれた時が悪いのか。それとも、俺が悪いのか……」

歌にまで、世相が反映されます。いや、庶民のいつわらない心が、そのまま、歌をつくっていくのでしょう。流行歌を追っていくと、そのまま歴史になるとさえいわれています。

時代、社会が暗いと、どうしても人間の生き方が厭世主義になりがちです。自分の欲するよう
に、事が運ばなくなるからです。正直者がバカをみて、狡知と奸知にたけた者が、成功する。な
ぜ、こんな不幸を味わわなくてはならないのか。なぜ、こんなに報われないのか。なぜ、こんな
時代に生まれたのか。苦しむために生きるのか。こうした自問自答をしてみても、その解決の糸
口は得られないものです。そして、生きること自体が、忌まわしくなる。一切を、否定的に考え
やすい。そうになると、必然的に無気力とニヒリズムに傾いていきます。

また一方で、こうした時代には、その正反対の傾向もあらわれます。いわゆる享楽主義です。



世の中どうなろうと、いっこうにかまわない。他人のことにかかわってはいられない。自己の快楽を求めることこそ、人生だと――。これは、徹底した、ゆがんだ肯定主義ともいえます。

人間、否定か肯定か、厭世主義をとるか、快楽主義をとるかで、ずいぶん生き方がちがってきます。それは、物事に対処する態度としては、悲観主義と楽観主義の違いといえるかもしれません。

これは、一つ of 思想、哲学、宗教についても、いえます。つまり、この世を、現世を、どう捉えるかによって、ずいぶん、その他の面でも、考え方がちがってくるものです。

たとえば、キリスト教の現世観は、どちらかといえば、否定的な面が強いといえます。人間はすべて、生まれながら原罪を背負っているという考え方に、それが端的に現われています。神への信仰によって、その罪があがなわれ、死して、天国か地獄か、または煉獄かんごくかの審判が下される。この世の生は一回かぎりであり、その人生の総決算である神の審判も、決定的であって、けっしてひるがえすことのできないものであるとします。

そこに浮かびあがってくる人間像とは、きわめて制約された窮屈なものになってくるでしよう。

仏教においても、小乗教は、きわめて虚無的な思想が強いのです。ただ、キリスト教と異なるところは、この世の苦悩を、神の意志といった他者との関連でみるのではなく、どこまでも、自身の生命の軌跡のうえに求める点です。その苦悩の原因である生命の濁り、つまり、煩悩を断じ

滅することによって、心の平安が得られると考えるのです。

また、大乘教のなかでも、まだ権かり（仮かり）の教えという意味で、権大乘教といわれる、法華經以前の經典では、概して、現世否定、厭世主義の傾向が強いといえましょう。たとえば「厭離穢おんりえ土・欣求淨土」という思想など、その好例といえます。穢土えどというのは、淨土に対して穢れた世ということなのです。この現実の人間社会のことを指しています。苦悩うずまくこの世を厭いとい、離れ、はるか西方にある極樂淨土を希求せよ、と教えているのです。そこで、安心して、仏道修行に励めばよいというのです。

「恋の逃避行」という言葉があります。これは、仏道修行の逃避行といえるかもしれません。

難題を一つ一つ克服するのが真の「遊樂」

ところで、法華經においては、どうか。「極樂百年の修行は穢土えどの一日の功德に及ばず」とは、日蓮大聖人の言ですが、そうした現実からの逃避を厳しく戒いましめています。そしてその法華經の裏づけの原理は、前にも述べたように、「娑婆即寂光土しやばそくじやつこうど」という考え方になります。この苦悩の世を離れて幸福はない、という思想です。さらに、それは、人生の生き方として「衆生所遊樂しゅじやうしよゆうらく」と説かれています。

「衆生所遊樂」という言葉は、壽量品16の後半部の偈頌げじゆ（詩文）のなかに出てきます。書き下し文にいたしますと、「衆生の遊しゅじやうび樂しむしむ所」ということです。

この言葉が、私の脳裏に鮮烈に焼きつけられたのは、あの戸田先生の法華經の講義の時でした。戸田先生は、寿量品のこの箇所を、次のように講義されたと記憶しています。

「この娑婆世界しやばというのは、衆生所遊樂しゆじやうしよるやくといって楽しむところである。われわれは、本来、人生を楽しむために、遊ぶために、この世に生まれたのだ」と――。

ずいぶん、思い切ったことを言われるものだ、私は少なからず驚きました。宗教と名のつくものは、どんな宗教でも、この世は、苦悩だという前提から出発しているものと、思い込んでいたからです。

その後、私の教学もすみ「衆生所遊樂」という意味が、現実感としてわかりかけてきました。というのも「御義口伝」に「難来なんきたるをもつて安樂あんらくと意得こころうべ可きなり」とあり、仏法でいう「遊樂」とか「安樂」というのが、たんなる安逸や、何もない白紙のような、平安な状態を指すのではないことを知ったからです。

ただ、私は、池田会長が、この「衆生所遊樂」ということを、「大白蓮華」(教学部の機関誌)の巻頭言に書かれたものを読み、電撃的な感動を覚えたことがあります。

それは、こういう一節です。

「釈迦にぜんきやうは爾前經(法華經が説かれる前の經)において、この世界は苦の集まりであると説き、それは道によって修行を積み、苦を滅する必要があると、四諦しだいの法輪ほうりんを明かした。しかし、法華經に至って、常樂我淨じやうらくがじやうと説いて、この世界は淨土であり、樂土である。そして、われわれの生命は永遠

にして、十界三千の当体とうたい（そのままの生命）であると断じ、煩惱即菩提ぼんのうそくぼだいを明かして、爾前經にぜんきやうを完全に打ち破っている。

したがって、われわれの人生は、あくまでも法華經の原理に照らし、衆生所遊樂の御金言ごきんげんを確信して、生活の中に具現すべきである。

ひるがえって、この現実の生活は、九界の世界であり、人生の戦いは、けっしてなまやさしいものではない。われわれの前途には、幾多の難問題が横たわり、苦闘と激戦の連続である。

しかし、それらに対して、一步も引かず、その一つ一つを克服していく姿こそ、真の遊樂であると確信する。それがあたかも、波乗りを楽しむような、悠々ゆうゆうたる自己の生命力を自覚するとき、無上の幸福境涯であることを、絶対に確信されたい」

この中に「それがあたかも『波乗り』を楽しむような」との一句に、私の魂は揺さぶられたのです。まさしく、仏法の幸福觀は、けっして、静寂な世界ではない。生命のダイナミズムが、その的確な譬喩にうかがわれたのです。

「衆生所遊樂」という言葉には、みじんも厭世觀がない。かといって、楽天主義なのかといえ、そうでもない。それは、前にも述べたとおりです。

快樂だけを追えば、快樂のために苦しむ

「衆生所遊樂」という短い言葉に、人生の本当の遊樂とは何かという、実践原理が含まれていま

す。「衆生」とは、ごく一般的には、生きとし生けるもの、人々といった意味に使われますが、一個の人間についていえば、生命そのものを指す言葉なのです。

喜びを感じ、苦しみをいだくのは、ほかならぬ、自分自身の「生命」である。幸福の実体は、つきつめてみれば、自分自身のなかにあるものです。自己の生命を離れて外界に、幸福の実体があるわけではありません。それは、虚像にすぎません。生活環境をととのえる、テレビ・冷蔵庫・洗濯機・マイホームがある。しゃれた洋服が何着もある。車もある。財産もある。そして、美しい容貌をもっているといったことなどは、すべて、幸福への一つの手段であって、そこに幸福の実体があるのではないのです。たいていのものは、補助手段にすぎません。むろん、最低限、必要不可欠の手段ということはあります。しかし、その「もの」を幸福の絶対条件だと思い込んでいるところに、現代人の錯覚がある、といえないでしょうか。

もっとも大切なものは、自分自身の生命の財宝たからなのです。いかに外見を飾っても、自身の生命が貧しければ、なんにもならない。

人生の喜びといっても、はかない遊びのなかに、生まれるものではありません。苦勞を避けて、真の喜びが得られるものでもない。ただ、快樂だけを追っていく人生は、ついには、その快樂のために苦しまねばならないでしょう。衆生所遊樂が転じて、衆生所地獄になりかねません。困難に直面し、どれだけ、そこに生命を燃焼させたか、その苦闘のなかに、真の喜びが生まれてくるといえます。どんな苦境に立っても、悩みが多くとも、それを一つの縁とし、試練を受け

とめて、自己の生命を躍動させていく姿こそ、衆生所遊樂そのものなのです。

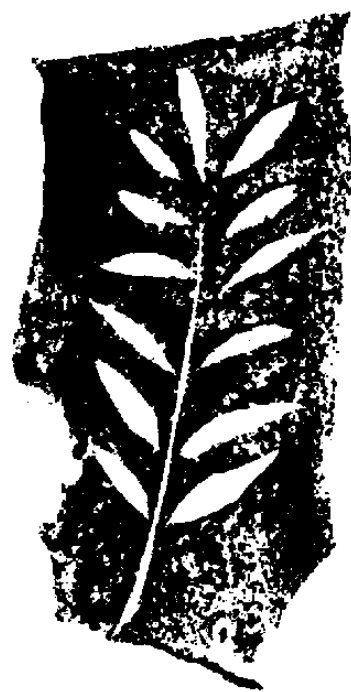
いまは亡き吉川英治氏の、次のような言葉が思い出されます。ある富裕な一青年に語ったというものです。「どの青年も、おしなべて情熱との戦いを繰り返しながら成長していくのに、君は不幸だ。早くから美しいものを見過ぎ、美味^{おい}しいものを食べているということは、こんな不幸はない。喜びを喜びとして感じる感受性が薄れていくということとは、青年として気の毒なことだ」「もの」の豊かさのなかに、幸福の実感を失っている人々の多いなかで、労苦をこそ、わが生命の財産としていけるだけの、人間のゆとりと幅をもちたいものです。

「衆生所遊樂」こそ、人生の坂を上り下りして生きゆく人間の、坂の歩み方を説き示したといえるでしょう。人生の坂を上りつめ、ふと見ると、路傍^{ろぼう}には、自らの生命燃焼の花が美しく咲いていたというような生涯でありたいものです。

御義口傳云南無者梵語也。歸命也。於歸命人
法。人歸命人。事人者。教尊奉歸命之法者。奉歸法
事。歸也。又。歸者。迷同不變。真如理。歸也。命。本門
隨緣真如。即歸也。歸命者。南無。紐是也。觀。隨緣不
變。一念。觀。又。歸者。我。我。法也。命者。我。心。法
也。心。不。二。極也。觀。又。使。歸。故。一。極。故。三
歸。故。又。云。南。無。者。梵。語。妙。法。蓮。華。語。也。梵。漢。共。翻。
南。無。者。梵。語。蓮。華。廣。義。陀。伽。華。上。寶。

「御義口傳」(上)「南無妙法蓮華經」の首文
元龜二年(1571年)の写本

毒薬におかされた現代人〈譬^ひ如^に良^り医^い〉



現代の混乱は「宗教的な混迷」——ポールディング博士

私の敬愛するある経済学者は、現代文明の抱える諸問題を、三つの観点から分析しています。

一つは、核兵器による人類の大量死、一つは、公害による人類の緩慢^{かんまん}な大量死、一つは、価値観の混乱からくる人類の精神の大量死である。さらに、この三つの大量死という問題を現象的に、分析的に取りあげて、手早く解決策を打たなければ、人間の文明は崩壊してしまうであろう、と警告しています。

何年か前に、『成長の限界』という統計を発表して、現代、地球文明が当面するさまさまに複合した問題を、総合的に調査研究しているローマ・クラブも、その設立の目的は、文明の終末をいかにして切り開くかという点にあったことは明らかです。

私は、昨年（一九七三年）十月に、日本でローマ・クラブ総会が開催されたおり、会長のアウレリオ・ペチェイ氏に会い、話を交^かわしたことがあります。談たまたま宗教と文明の話におよんだ

とき、氏は「現在、ローマ・クラブのメンバーには、宗教関係者はいない。すべて科学者、経済学者、心理学者などで占められている。しかし、現代の問題を総合的に考えるならば、どうしても、宗教関係者をメンバーに加えることが必要になるでしょう」と語っていました。その後、この話がどういう進展をみせたかわかりませんが、とにかくペチェイ氏の心の中には、宗教に対する何らかのアプローチがあったことは明らかです。

精神の大量死といい、アウレリオ・ペチェイ氏が宗教へのアプローチを構想していることとい、この奥には、私は、現代文明の問題というのは、その解決を宗教に求めはじめている、少なくとも、その方向に強い関心が向けられているということを、語っているように思うのです。

最近、宗教喪失の時代という声が聞かれます。たしかに、既成宗教のなかには、とりたてた動きを始めることなく、惰眠^{だみん}をむさぼっているとしかしいような姿も見られます。そして、現代人の精神の日に日に衰弱し、干からびていくさまをつぶさに見ていくと、まさしく、宗教の喪失に想い到らざるをえなくなります。

しかし、一方、この衰えゆく生命の力に新たな血を注入し、息を吹き込むのはペチェイ氏の言うように、宗教以外に求めることはできないことも、今の私には強い確信となっています。宗教喪失の一方で、宗教復権への静かな潮騒^{しおさい}もあることは事実でしょう。また、こうした現代の混乱を、一言のもとに規定したのは『経済学を越えて』で著名な、ケネス・ボールドウィングです。氏は今、アメリカのデンバーにあるコロラド大学の広大な自然に恵まれた研究室で、次なる著作に

余念がないと聞いておりますが、氏の規定は、「宗教的な混迷」と、簡潔です。

仏の「方便」^{ほうべん}とは、衆生を救うためにのみ使う

ところで、この宗教的な次元に浸透した現代人の病いを、すべて二千数百年前、釈尊は、法華經の寿量品^{じゅりょうひん}16のなかで「飲他毒藥、藥發悶乱」^{おんたどくやくやくほつもんらん}という言葉によって示唆^{しさ}しております。

「飲他毒藥 藥發悶乱」とは、誤って毒藥を服したために悶乱^{もんらん}するということをいいますが、もちろん、釈尊は、現代文明の暗鬱^{あんうつ}な様相を二千数百年前に見通していたというのではありませぬ。釈尊が、法華經のなかで、「飲他毒藥 藥發悶乱」と説法した真意は、法華經の真理、妙法蓮華經という尊極^{そんごく}なる仏性が、あらゆる生命的存在の中に貫かれていることを、人々は気づかずにいることを示したのであり、その結果として、人々が人生の四苦（生老病死）に打ち沈んでいることを教えたのです。

この教えは、生命の原理を明かしたものであるために、時代を超越して、現代に迫ってくるのでありましょう。つまり、二千数百年前の釈尊の洞察が、現代社会の病める現実^{げんじつ}というものを、見事に射通しているというのは、東洋の英知の凝結^{ぎょうけつ}が、いかに悠久^{ゆうきゆう}な力をもっているかを、如実^{にょじつ}に示すものといつてよいでありましょう。

この「飲他毒藥 藥發悶乱」^{おんたどくやくやくほつもんらん}の一節は、法華經の七つの譬え^{たと}のなかの「譬如良医」^{ひによろうい}（譬えば良医^{たと}の如し）に記されています。そこで現代文明の病いの真因を、法華經ではどうみているかを知る

ために、まず「譬如良医」の物語をとおして考えてみましょう。

——昔、インドのある所に聡明な名医がいた。その名医は多くの子どもをもっていたが、あるとき、所用ができて名医は遠くへ長の旅に出なければならなかった。名医は、家に残す子どもたちのことが気がかりではあったが、やむをえず、子どもたちに種々言いふくめて旅立った。

ところが、父がいなくなった間に、誰かが子どもたちに毒を飲ませたのである。子どもたちは、毒薬のために苦しみ、もだえた。子どもたちは、こんなときお父さんがいてくれたら、たちまち治してくれるだろうに、と思ったが、名医の父は旅に出ている。

かなり期間が経って、名医は帰ってきた。そして、さっそく薬を調合し、子どもたちに飲むように言った。だが、その薬を前にした子どもたちのなかに、二種類の者が出た。一つは、素直に父の言うとおり薬を服した者、もう一つは、あまりにも毒が全身にまわってしまったために、父の持ち出す妙薬をも、信ずることができなくなってしまった者である。前者を、「本心を失わなかった者」といい、後者を、「本心を失った者」といいます。

本心を失わなかった子どもたちは、父の勧めに従って服用したので、病気は治り毒も消えたが、本心を失ってしまった子どもたちは、あいかわらず地にのたうちまわって、苦しんでいた。

そこで、老衰のあまり、余命いくばくもなかった名医は、やむなくまたふたたび、旅に出ることにし、旅先から使いの者をたてて「お父さんは亡くなりました」と、子どもたちに告げさせる。その使者の言葉を耳にした子どもたちは、本心を失った者も失わなかった者も、ハッと、我に

かえり、嘆き悲しみ、本心を失った者も、それを取り戻して、父が勧めた薬を服用した。そして、子どもたち皆が、苦痛から救われ、父はそれを知って、ふたたび子どもたちの許へ帰った。

「譬如良医」の内容は、ほぼ以上のようなあらすじですが、私はこうした譬えに、いつもほのぼのとした人間の情感をみます。

仏法というのは、このように人間の情を忘れず、広く理解を生むようにして展開されているのです。釈尊は、この物語をとおして、法華経の方便の意味を説いております。釈尊はこの物語を述べた後で、「諸々の善男子よ、心でどう思われるかな。もしや、この良医のウソつきの罪を、説こうとする人はありますまいか」と聴衆に聞き、聴衆は、それに答えて「その罪を問いません」と答えています。つまり、仏が用いる方便というのは、衆生を救うためにのみ使われるのであり、いわゆる、昨今、世間一般で使われるような「ウソも方便」というのとは、大きな違いがあります。

処方箋だけではどうにもならぬ病状

さて、この物語に出てくる「本心を失う」とは、いったい何を意味するのでしょうか。それは自らの生命に内在する仏性の実在を忘失してしまうことを指しているのです。生命内在の厳たる光をおおいかくし、暗中模索の人生を譬えたわけです。

現代人にとって、もっとも不幸なことは、人間にとってもっとも根本の人間の生死、生命の実

相という問題を直視しないで、外界の政治、経済、科学などの事象にのみ目を奪われてしまっているところから生じております。

ここで私は、政治や経済、科学が「毒」であるなどというつもりはさらさらありません。むしろ、それらの正常な発展は人間社会にとって必要不可欠なものと確信しています。

私がここで「政治、経済、科学などの事象にのみ目を奪われている」というのは、それらが相互に関連しあうことなく、それぞれが独自の路線の上を突っ走っている。そのために、もともと人間のために創造され発展したはずの政治、経済、科学が、いつのまにか、人間を抑圧する機能を備えてしまったことを、指摘したいのです。

近ごろ、哲学の分野で、構造主義が盛んに取りあげられるようになりましたが、これは文字どおり、物事、存在を構造的に捉とらえていこうとする学問です。そして、基本的には、それぞれに枝分かれし、専門化を遂げていった諸学問を、もう一度、根本の目的である、人間のためという中軸に照らして、位置づけてみようという考えが、構造論の底流をなしているようです。こういった傾向は、哲学の領域に限らず、たとえば、人間と環境の関係から生態学が蘇よみがえり、人間と機械の関係で、サイバネティックス（生物や機械の伝達・制御の仕組みを、追究する科学）が台頭し、さらに、ボールディングらによって唱導されている、未領域間学問（学問の総合的見地）が脚光を浴びていることなどは、すべて、人間の手を離れた文化を、もう一度、人間の手に取り戻そうという試みから発している、といえましょう。

ともあれ、文化の基調を支える思想的潮流は、人間へ人間へと流れていることは否めません。しかし、こうした思想の潮流が、はたして、どれほど有効打となるでしょうか。現代文明は、そうした流れに関係なく、絶望の深淵へと突き進んでいることも事実なのです。現代社会の病状のなかには、ペシミスティック（厭世的）な材料が、あまりにも揃いすぎているのです。

そうした病状は、たんなる処方箋のみでは、どうにもならない。要は、いかに効能書が克明であつても、それを使いこなす人間自身の生命の变革が図られていなければ、一枚の紙に等しいでしょう。それらの新たな宇宙の流れは、既存の学問のうえに、また一つ枝分かれして重なっていくでしょう。

ボールドディングが、「宗教的混迷の時代」と洞察した真意はどこにあつたかは、私は寡聞にして知りません。しかし、少なくとも現代文明にトグロを巻いた毒は、宗教によってしか除去できない、という一面のあることを、その言葉から探りだしても、けっして穿ちすぎのそしりはうけないと思います。

一方、日蓮大聖人の「撰時抄」という御書のなかに、大族王という王様の故事が引用されています。もともとの出典は『西遊記』にある話ですが、この王は、仏法を聞くために名僧を求めたが、誰も応ずる者がなかった。そこで王は怒り狂い、寺院を破壊し、僧を追放したといひます。現代文明の毒を取り除くために、法華経を弘める仏法実践者が、社会の要請、時代の要請に応えていく必要性のあることを、大族王の例は教えているといえましょう。混沌の地平に人間の生

きゆく指標を、太陽のような宗教の存在を、意識するか否かは別として、本心では待ち望んでい
るように思えてならないのです。

生命の鏡を磨く^{みが}〈浄明鏡の譬え^{じようみやうきやう たと}〉

鏡は法華経、「真実」と「自身」を映^{うつ}す

白雪姫の物語に出てくる話ですが、王妃が魔法の鏡に「鏡よ鏡、魔法の鏡、世界中で一番美しい人はだれ？」と問いかけるところがあります。鏡は、王妃の美しさをたたえはしますが、一番美しいのは、やはり白雪姫だと答え、そこから波乱万丈の物語が始まるのですが、ここで、その話をするつもりは毛頭ありません。

じつは、王妃が問いかけるのは、なぜ「鏡」なのか、という単純素朴な疑問が、子どものころから私の脳裏にありました。魔法の時計でもいいはずだし、「杖^{つえ}よ杖、魔法の杖」であっては、なぜいけないのか。「一番美しいのはやっぱり白雪姫」と答えるのが、ランプであっては、なぜいけないのかということですよ。もちろん、顔を見るのは鏡だから、ということかもしれません。が、それだけでは、どうもスッキリいかなかったのです。

バカバカしい疑問かもしれませんが、子どもの私にとっては、重大なテーマでした。その後、



年をとるにつれて、それに対する答えは想像がつくようになりましたが、法華経、法師功德品ほつしきくどくほんに出てくる浄明鏡じようみきようきようの譬えたとをみて、「やっぱり」と、ひとり感心したのです。

法師功德品には、「若し法華経たもを持たんは、其の身甚だ清浄みはなはしようじようなること、彼の浄瑠璃じようるりの如くにして、衆生皆見んと憙ねがわん。又浄明なる鏡に、悉く諸の色像を見るが如く、菩薩浄身じようしんに於いて、皆世の所有を見ん」とあります。つまり、この法華経を信ずるならば、命が清浄になって、きよらかな瑠璃るりの玉のように、人々が見ようとするだろうし、きよらかで明瞭な鏡に、すべてのものがはっきりと映るように、ものごとを見ることができるのである——ということです。

法華経は、その哲理を鏡にたとえているわけです。これは、鏡が真実ありのままを映し出す、という性質をもつところからきているようです。もちろん、鏡に映るのは虚像であり、少しひねくれて考えると、左右が逆になって映るわけですから、真実そのままというわけにはいきませぬ。しかし、それは考え過ぎというもので、昔から水や金属を鏡にして、人々は自らの姿を映し出そうとしたのは、間違いのないことです。

王妃の問いで、鏡が白雪姫の美しさを知らせるのは、鏡はウソをつかない、美しいものは美しいと、ありのままに示すという性質からでありましょう。鏡が言葉を知っていて、白雪姫であると答えたというのも、多分、どこかで王妃が白雪姫とともに鏡に姿を映し、どう見ても自分より美しい白雪姫を、鏡が正直に映し出したのを見たのかもしれない、という気がします。

話が横道にそれましたが、鏡は、真実をありのままに映すという特質があるとともに、もう一

つ、自身を映すことができるという特質のあることを、忘れてはならないと思うのです。

「自身の生命こそ、本来、仏の命である」

法華経が鏡にたとえられているのは、じつは、この点に大きな意義があります。

法華経においては、仏の生命、悟りの生命、尊敬すべき対象は、わが身のほかにあるのではなく、内にある、つまり自身の生命こそ、本来、仏の命であるという考えに立っております。したがって、仏の悟りを獲得するといっても、なにか特別なものを得るというのではなく、自分自身の生命をはっきりと見つめ、そのなかにある宝を掘り出してくればいい、ということになります。法華経は、自分自身の生命を見つめるよすがとなるものです。つまり、「生命の鏡」と表現できるとはなりません。ふつうの鏡は、肉体、形を映し出すにすぎません。しかし、法華経の浄明鏡は、その人の精神の内奥の世界を明瞭に映し出します。しかも、その生命が今までどのような流転をし、どのような広がりをもつのかという、いわば時間的、空間的に、無限のものさしで正確に計ることができるといわれます。釈尊はさまざまな經典で、いろんな衆生の過去、現在、未来の生命を説いてきかれますが、現象の世界にあらわれる生命を洞察するだけでなく、その生命現象を生み出している、生命内奥のダイナミズムを鋭く見通していることを、象徴しているのでしょう。

前にも触れたようにソクラテスは、「汝自身なんじを知れ」と言いましたが、さまざまな人との対話

をとおして、いかに人々が自身を知らないか、いいかげんな認識をしているかを、知らしめようとしたといわれています。いつの時代にも哲学の最大の課題は、この「自身を知る」ことにあることは、いうまでもありません。

法華経は、この「汝自身を知る」ことを最大の眼目とし、仏になるとは、言い換えれば、自らの生命を磨くことにある、と結論づけているのです。この「生命を磨く」とは、生命を清浄にすることであり、その作業によって自己を錬磨し、仏の悟りの命を獲得することができると説くのです。仏教のいう「功德」というのも、けっして、タナからボタモチのようなものをいうのではなく、一人一人の生命を内奥から磨きあげ、人生の「知恵」を獲得させることにあるのです。

「無心」は、心を空白にすることではない

私は中学時代、柔道を少しやりました。けっして強くはなく、段位もっていませんが、他人に比べて、体力的に優っているとはいえなくても、相手の力を利用して投げ飛ばす爽快さに酔って、練習したものです。最近も、急に倒れそうなアクシデントに出あったとき、思わず柔道の「受け身」が反射的に出て、ことなきを得た、ということもありました。

柔道を練習しているときに、よく教えられたのは、「無心になれ」ということでした。よけいなことを考えず、精神を透明にしていくならば、相手の動きを反射的につかむことができ、それに対応することができるといふことなのでしょう。

しかし、この「無心」ということは、けっして心を空白にするということではないと思います。それは、生命のあらゆる器官を最高度に發揮して、いかなる変化にも対応できる万全の生命状態にするということではないでしょうか。まったくの空白ならば、ボーッとしているのと同じですから、勝てるわけがありません。無心になるとは、神経を張りつめつつも、けっして邪念に陥おちいったり、人為的に不自然な動作をとろうとしてはならない、ということだったと思っています。

これと同じように、六根清浄といっても、一般的に用いる清浄ということとは違います。生命の諸器官を磨きに磨きあげて、それを完全に働かせる状態にすることが、清浄ということではないでしょうか。

しかも、生命のあらゆる分野が、それぞれ無統制でバラバラになっていれば、いくら部分部分が發達していても、十分に機能を果たしうるとは思いません。生命は有機体であり、それらの部分を統合し、円滑に働かせる「知恵」が必要になってきます。その知恵のもとに、すべての現象をありのままに受け入れ、それに即応できる「六根」が見事に作動してこそ、生命が最大限に価値ある働きをなしているといえるでしょう。

鏡のように、世の中のすべてのものを明瞭に見るということは、けっして客観的に認識することではない。「知恵」の目で見るということであり、物事の本質を見るところです。しかも、他の存在を見るのではなく、自らの生命を見ることです。すなわち、わが生命の本質を実感

で把握し、しかもそれを磨きあげて、**「鏡」**の譬えは示唆しているのです。

戸田前会長——「偉大なる凡夫」になれ

私たちは人格の形成、人生の達人を目指してつねに向上しゆく存在です。もし、このことを忘れたとしたならば、それは自ら人間であることを放棄したことである、といえるでしょう。その人格の陶冶、完成を、私たちはしばしば、社会の倫理的規律、偶像崇拜、他力信仰などによって果たそうとしてきました。しかし、真実の人格形成は、自らの生命を見つめ、それを掘り出して清浄に磨き上げていくことから始まるのではないかと思うのです。

法華經における本尊、つまり根本として尊敬すべき対象とは何かといえ、それは、自分自身であるということになります。日蓮大聖人は、一念三千という生命の完全体を一幅の御本尊として、後世の人々のために残しましたが、その本尊さえ、つまるところ、人々の生命を映し出した鏡であり、その本尊を「縁」として、いわば一つのチャンス、手がかりとして、わが身の中の宝を掘り出すべきことを教えているのです。

私たちの生命の可能性というのは、無限であるといっても、けっして過言ではない。その可能性の原石を磨き上げ、光沢に満ちたダイヤモンドとすることこそ、法華經の目指すものなのです。

私は、社会の荒波にもまれ、苦しみ抜いてきた人々が、法華經の力強い哲学に触れて、自らの

可能性を見いだし、その人間革命をすることによって、素晴らしい人生転換をした姿を多く知っております。

だからといって、特別な人間になるわけではありません。戸田先生は、かつて、「偉大なる凡夫」ということを言われました。真の仏法は、人間らしい人間を形成することにある、と云ってよいでありましょう。平凡な歩みのなかにも堅実さと進歩性があれば、平凡は偉大な平凡と光り輝いていくのです。

「一生成仏抄」(御書の一つ)にいわく、「只今ただいまも一念無明いちねんむみょうの迷心めいしんは磨みがかざる鏡なり是これを磨かば必ず法性真如ほつしようしんによみようきようの明鏡みょうきやうと成るべし、深く信心おこを發おこして日夜朝暮またおきたに又懈またおきたらず磨くべし何様いかようにしてか磨くべき只南無妙法蓮華經ただと唱となへたてまつるを是これをみがくとは云いうなり」と。

無限に広がる人間の生命 〈妙音・観音〉

人はそれぞれの立場で仏教を宣揚できる

私は音楽はあまり得意なほうではないのですが、それでも素晴らしい音楽を聞くと、自然のうちに体全体が躍動する感をうけます。先日、ふとした機会にベートーベンの「運命」を聞いたのですが、その力強さをあらためて感じ、運命に挑戦する人間の業とでもいったようなものを、しみじみと感じたものでした。また、私は絵は好きなほうですから、素晴らしい絵を見ると、思わずたたずんで、その絵を生み出した背景、画家の生命が思いやられて、絵の世界に没入してきます。

一日の活動を振りかえってみると、音楽的な要素はありませんし、描写という行為もありません。しかし、人類が始まって以来、音楽はありましたし、絵画も存在していました。天の岩戸を開かせたのは、歌舞音楽でしたし、フランス・ラスコーの洞窟にある絵など、現代の画家の心胆を寒からしめるほどの素晴らしい筆致です。人間の作り出したものではありませんが、人間生命の



内奥を揺り動かさずにはおかぬ、不思議な力をもっているようです。

法華經の方便品という章では、鼓や角貝、琵琶などの妙なる音楽をもつて供養したり、仏の法を聞いて歓喜して歌ったならば、仏になる功德を積むことができる」と説いています。

人間のさまざまな行事が、人々を勇気づけ、あるいは、変革させうる力をもっていることを認め、それをもつて、仏教を賛嘆することの意義を説いているわけです。

ナポレオンが、戦争には必ず軍隊を引き連れ、突撃のさいなども、ドラムの音に勇気づけられて兵士が戦ったという話は、よく知られていますが、これなど、音楽が人々を戦争に駆り立てた悲しい例とも考えられます。善にせよ、悪にせよ、そうした働きが人々の心を動かし、意気を上がらせる役目をもっていることは間違いありません。

仏教で、そのような供養の意義を認めているということは、言葉を換えていえば、さまざまな分野で仏教を宣揚すべきことを教えている、ということでもありましょう。

仏教を信じたからといって、一人残らず剃髪し、出家し、人里離れたところで修行するべきだという法はないはずです。法華經は、そのように現実生活との遊離を説いているわけではありません。一人一人は社会人であり、社会でそれぞれ生業を持っています。その場その場で、それぞれの力を発揮しながら、仏教を信仰し、宣揚していくことこそ、本来の信仰者の立場であるはずで

す。

芸術で身を立てる人もいます。政治の分野で戦う人もいて当然です。また、学問研究で社会に貢

献しようとする人もいる。また、次代を背負って立つ青少年を育てる立場の主婦もいます。あるいは、人々のもっともいやがる仕事を引き受ける人もいるでしょう。そのどれ一つを欠いても、社会は円満な回転を望めないし、そのそれぞれの立場で、真実の人間尊重、絶対平和の社会を建設するために尽くしていくならば、それこそ、信仰者の立場を全うした、といえるのではないかということなのです。

人間の可能性を暗示する妙音・観音菩薩

法華経の妙音菩薩品、観音菩薩品という章では、このようなさまざまな立場で活躍する姿が描かれています。

妙音菩薩というのは、その菩薩の通るところ、自然に天空に鼓が鳴ったという力の持ち主ですが、それは、前世に十萬種の伎楽をもつて仏に供養したからである、と説かれております。また、観音菩薩とは、観世音、すなわち世の音を観ずる、世間のありさまをよく知悉する力をもつた菩薩ですが、この観世音に会ったならば、世の中のさまざまな苦しみをよく取り除くことができる、と説かれています。

この妙音菩薩、観音菩薩は、ともに三十四身、三十三身を現じて人々を救済する、と説かれているのが興味深いところです。すべてをあげると煩雑かもしれないので、主なものを列挙してみますと、梵王、帝釈（ともに善神・仏法守護者）、王、長者、政治家、僧侶、女性、子ども、あるい

は非人などの身になるというのです。このようなさまざまな身を現じて、仏法を宣揚し、供養すると説いているわけですが、子どもにさえもなる、というのがおもしろいと思います。「負うた子に教えられ」という言葉がありますが、子どもの、既成の概念にとらわれない自由な発想が、しばしば大人の固定観念を打ち破ることがあります。どのような立場の人でも、社会に貢献することがあるものです。

また、この妙音菩薩が三十四身、観音菩薩が三十三身に変化するということは、人はさまざまな可能性をもっていることも、示しているのではないでしょうか。

といえば、とても人間一個の力では立ち向かえそうもない巨大な力、たとえば大自然の猛威、網の目のような管理社会の機構、強大な政治権力などを前にして、個人の力など取るに足りないものと思いがちですが、私はけっしてそうは思いません。

大脳生理学によりますと、人間は生まれてから大脳にある脳細胞の突起が複雑にからみ合い、高い知能を形成していき、三歳でそれがほぼ完成する、とさえいわれています。ところが、その突起の組合わせの数が膨大であるというのです。今、宇宙に存在する原子の数よりもまだ多いということです。気の遠くなるような数字でしょうが、そこに人間の持つ可能性の一端を知ることができるようです。

また、人間の脳細胞は、いかに日常使っているようにみえても、使わずに保存してある部分があり、人間の一生のうちでは、その三分の一も使用しないということです。じつにもったいない

かぎりですが、もし、それを全部使うことができれば、などと考えたりしたこともありました。もったも、人間、賢かしこくなるというのは考えもので、よい方向に賢明になればいいのですが、悪賢くなったり、ズル賢くなったりすると困るわけですが――。

「正義によって立て、汝なんじの力二倍せん」

人間一個の生命にひそむ可能性というものは、私たちが安直に断定できないほどのものです。小学校時代に劣等生であり、どうにもならない、とサジを投げられていたエジソンが、人類史上に輝く数々の発明を残したことを知らない人はいないはずです。

そういう意味では、人間に安易に与えられる評価ほど恐ろしいものはないといえます。あの人はこういう人間だという評価は、いったい誰がくださることができるのでしょうか。人間には、無限の可能性があるはずです。その可能性を、尊敬と愛情をもって見つめ、一人一人の内面から掘り起こしていくこそ、もっとも大切な作業だと思うのです。

私の知人で、ある教育者ですが、子弟をある意味で尊敬することが、その芽を伸ばす秘訣だ、と言っておりました。至言だと思いました。その教育者は、勉強のできない、いたずらばかりをして、周囲に迷惑をかける一人の児童に手を焼いていたのです。家庭を訪問したりしたのですが、父兄が教育に不熱心で、勉強ができないのは教師のせいだともいわんばかりの姿勢をとる始末。放課後、残して勉強させようとしたこともあったのですが、かえって反抗的態度をとるば

かりで、成果をともしなわなない。半分あきらめていた状態だったのですが、ある日のこと、その児童が、紙に絵を描いていた。それが対象の特徴を、独特の感覚でとらえた、思わず目を惹きつけられるものだったのです。

けっして上手とは思えませんでした。そのような魅力ある絵を描くその子に、一種の尊敬にも似た愛情が湧いてきたそうです。そして、心からその絵をほめ、絵を描くことで才能を伸ばそうと努めた結果、やがてその子は、県の展覧会でも賞を得るまでに上達し、それにつれて勉強にも身を入れるようになった、ということでした。その教育者は、しみじみと、「どんな子どもでも、見捨ててはいけないうい、ということがわかった。ひょっとすれば、私以上の力があるかもしれないのだから」と述懐していました。

人間、若い時代はもちろんのこと、幾つになっても、いつ、どこから新しい才能の芽が吹き出してくるかもしれません。私も師匠として、歴代会長の姿を見ておりますが、老壮年期になっても研鑽を怠らず、生涯、青年の息吹きあふれる姿には、心から感服し、自らも少しでも才能を発揮し、また、周囲の人々が最大限に才能を伸ばせるように、心を配ることが大切だ、とも思ったのです。

人々の生命が、無限の可能性をもつと確信することは、同時に、すべての生命を尊敬するということ。その思想が全世界に行き渡ったならば、醜い国家間の争いなど起こるはずがない。人間の生命はそれほど大きなバイタリティーをもったものだ、という認識をもつことこそ、

現代世界のもっとも急を要することではないかとも思うのです。

人間、使命感をもち、目標をもち、哲学をもって立つとき、その力はますます発揮される。その力を発揮させる哲学さえあれば――。

私は、法華経の中に脈々と流れるダイナミズムに、その鍵かぎを感じ取っているのです。ドイツの文学者・詩人シルレルいわく、「正義なんじによって立て、汝なんじの力二倍せん」と。

十種の神力じんりきへ仏法の神力の真意

娑婆世界にあらわれる十神力じゅうしんりき

少しまえ、超能力ブームが起きました。空中で、スプーンを思いどおりに曲げたり、時計の針を念力で動かしたり、常識では考えられない現象を、人の目の前で示して、その秘密はなにかということ、超能力とか念力という言葉がはまりました。

これが本物か、トリックかという大論争まで捲まき起りましたが、決着はついていないようです。

かりに、それらの能力の存在を認めたとしても、それは、物を動かし、変化させるというもので、人間の運命とか、人生を幸福へと転換させる能力はないようです。占うらい師なが、人の運命や将来の出来事を予見することができたとしても、自分自身の運命を知り、転換することはできないといわれるのに似ています。

たしかに、世間には、神がかり的な通力つうりき、神力じんりきをものする人がいるかもしれません。また、私



たちの通念としても、なにか特別な力とか、物にとりつかれたような振る舞いが、神力、通力だとしがちです。

しかし、仏教に説かれている仏の力としての神力・通力は、けっして、そうした人間ばなれした能力を指すものではありません。神力の「神」とは、なにも神社にまつられている神を指すのではなく、魂という意味で、私たちの生命のことです。つまり、神力とは生命の力ということですね。もっとも人間らしい力、営為いとなみを神力と呼んでいるのです。生命ほど不思議な存在はありませんが、その生命の働き、五体の働き、心の働き、すべてが神通じんずうの力なのです。

すべての人間が、本来内うちにもっている、偉大にして、不思議な力を、仏の振舞いとして、仏のさまざまな神力の姿をとおして、表現しようとしているのです。法華経では、第二十一章にある、如来神力品にょらいじんりきほんに、仏の十種の神力として、展開されています。

法華経の偉大さを、生命の不可思議な力を、十種の神力という形で説いたものといえます。少し、煩雑はんざつになりますが、その十神力を説明するために、その大要だけ書きとめてみます。

神力品では、まず初めに、地より涌出ゆじゅつした菩薩たちが、仏の滅後、広くこの経を説くことを仏前に誓います。その時、釈迦は、昔から娑婆世界しやばに住んでいた文殊もんじゆらの菩薩、多くの僧尼、信徒から天（天界のこと）宇宙自然・竜・夜叉やしやといった人間以外の生物や自然現象も含めて、すべてを前にして大神力を示すのです。初めに、はるか天上の梵天世界ぼんてんにまでとどく広長舌こうちやうぜつを出し（これを出広長舌しうこうちやうぜつといいます）次に、身体中の毛孔から光を放って十方の世界を照らします（これを通身放

光といひます。十方から集まつてきていた分身の諸仏も、同じく広長舌を出し、光を放ちます。それが終わるやいなや、つづいて、咳払いをし（響効という）、同時に、指を弾いて鳴らします（彈指）。その響きが十方にわたり、大地は六種に震動します（地六種動）。そこで、十方世界の衆生は、仏の神力によって、みな娑婆世界へ視線をやり、そこに宝樹のもとにいる諸仏と、宝塔に並んで坐している釈迦、多宝の二仏と、釈迦仏を取りまく多数の菩薩や人々がいるのを見いだします（普見大会）。その時、天は虚空から声を発して釈迦仏の説く妙法蓮華經を随喜すべきだと叫び（空中唱声）、それを聞いた衆生は、みな合掌して娑婆世界に向かい、南無釈迦牟尼仏を繰り返し唱えます（咸皆歸命）。つづいて、いろいろな花・香・首飾り、幡などを、みなともにはるかに娑婆世界に散らし、それらが十方からくるのは、まさに雲が集まるがごとくであり、それらは変化して宝の帳となって、ひろく諸仏の上をおおいます（遙散諸物）。そのとき、十方世界は通達無礙・自由自在であつて、一つの仏の国土のようであつた（十方通同）というのです。ほぼ、以上が十神力の内容と、そのストーリーです。

神力は人間の偉大な力を意味する

いま紹介したように、文面だけみますと、仏の神力とは、途方もない誇大妄想にみえます。超空想小説みたいな感じがします。しかし、その紙背にあるものを読みとらねばなりません。法華經そのものが、じつは、生命の哲理の展開であり、仏というものが、仏像や、仏画に描かれたよ

うな、きらびやかな特別の存在ではなく、私たちの生命にある尊厳なる実体であるという、話をまえにしましたが、仏の神力というのも、この人間生命のもつ、広大さ、深淵さ、不思議さ、力強さを、独特の譬喩^{ひよ}を用いて説こうとしたものだ、と私は考えたいのです。

その立場にたって、この十神力を、一つの人間論として、一個の生命の躍動が、どう人々に、社会に、また自身の生活に反映し、働きかけていくかという生命の可能性の展開として、私なりに思い切った解釈と展開を試みたいと思います。

①出広長舌^{すいこうちようぜつ}について

よく仏教の經典には、仏の説法が真実のものである証明として、広く長い舌を梵天^{ぼんてん}（＝少々説明が長くなりますので天の高いところと理解してください）まで届かせるという表現が出てきます。この広長舌というのは、仏の莊嚴さを象徴するものとして、三十二種類の身体的特色を仏はもつといわれますが、その一つの相で、舌が広く柔らかく、顔をおおって髪^{かみ}の生えざわまでとどくというものです。むろん、歴史上の釈迦が、実際にそうであったかどうかは、疑問でしょう。古代インドでは、舌が長くて幅の広いことが、福德の相とされたのかもしれませんが。また、舌を出して真実を証明するということも、古代インドの風習の一つであったともいわれています。

ところが、出広長舌の神力とは、人間のいかなる力を訴えようとしたものなのか――。

梵天にまで至らしめたということは、一個の人間として、生命力が溢^{あふ}れている、天をも突く勢いである。しかも、その生命から溢れる行動、言論に、真実の響きがある。すべて、生命そのま

まの真実の振舞いになっている。真実であるゆえに、人々の胸に鋭く響き、納得させるものがある、といった姿ではないかと思ひます。

②通身放光について

すべての毛孔から、光を放つというものです。仏の莊嚴さの特色として、ほかにも、額から光を放つとか、つねに周りに光が射しているといったことが、経文に説かれています。

これは生命の底から輝いている、といった感じなのでしょう。外見の虚飾や化粧で、美しく見せているというのではない。つねに健康で、生命力にみなぎり、顔色もよく、人々から親しまれ、信望される姿だと思ひます。季節でいえば、春の光でしょうか。あの人のいるところは春風に吹かれる心地だ、おのずから周囲を輝かせていくものがある、という姿ではないでしょうか。

③響歎について

咳払いのことです。漢和辞典によりますと、同じ咳払いでも、軽いのが響で、重いのが歎だそうです。仏が、これから説法を始めるといふ前触れの一種の発声と考えてよいでしょう。

確信にみちた言論、と私は考えます。よく政治家の口にするような優柔不断な、そして、先見性のない発言であつてはならないということです。責任ある信念の発言こそ、人を納得させ、困難な状況をも切り開いていくのではないのでしょうか。

④弾指について

指を弾いて、音を出すことですが、歡喜の表現として使われるものです。なにか楽しいことが

あると、思わず、指をならす癖くせをもった人がいますが、古代インドでも、そうした習慣があったのかもしれない。

生命が弾はんでいるということでしょうか。生活、仕事ではなにをしても、つねに心から喜びをもつて臨のぞんでいける人生と、私は思うのです。

弾指という、指を弾くということではありませんが、あのチャーチルが、第二次大戦のとき、国民にVサインを示した写真を思い浮かべます。勝利の確信と、戦う勇気を人々に与えたというものです。一人の指導者の確信と勇気と歓喜が、その一人に終わるのでなく、周囲の人々の確信と勇気、そして、歓喜を促うながすものであることを、諸仏が俱ともに弾指したということから想像するのです。

⑤ 地六種動ちろくしゅどうについて

仏の一念の働きによって、大地が六種に震動したということですが、大地とは、生命の大地のことだといえます。胸中にある力強い生命力を湧きださせ、全身が、身も心も躍動している。環境におしつぶされるのではなく、その一念の波動が、逆に環境をも揺り動かしていく。そうした力強い人間像を、見る思いがします。一個の人間の躍動、変革が出发点になって、時代・社会の行きづまりをも打開していくことになるのだ、といえましょう。

⑥ 普見大会ふけんたいえについて

普あまねく全体を見わたすということですが、人間としてみても私心がない。つねに全体観に立って

いる。ウソ、いつわりがない。誰人だれひとに対しても、公平であり、言々句々げんげんくくが、じつによく納得でき
る、という姿ではないかと思うのです。

⑦ 空中唱声くうちゅうしょうしやうについて

諸天が空中から声を発して、妙法蓮華經を称たたえることを示したものです。諸天というのは、た
んなるキリスト教でいう天国といった概念ではなく、仏教では、太陽や星など、生命を育はぐくむ自然
界の働きを意味します。

目に見えなくとも、空には、渡り鳥の飛行するコースが決まっているように、また海には海
で、魚の回遊するコース、また潮流というものがあるように、生命には厳然として、生命の法則
があると説くのが、仏教であり、なかんずく法華經の哲理です。その生命の法則にのった人生は、
おのずと諸天、つまり、自然や環境に護られていくことをいっているのだ、と私は解釈します。

⑧ 咸皆歸命げんかいきみようについて

すべての人々を釈迦仏に、妙法蓮華經に歸命きみようさせたということです。どこに人生の基盤をおく
かという問題です。人間として、なんらかの法（真理）にもとづいた人生であるかどうか、とい
うことです。確かな、真実の法に歸命した人生でなくてはならない、ということでしょう。妙法
蓮華經に歸命するとは、生命の法（真理）を、自己の行動の基点にするということなのです。どんな
人も、世間の常識という法を破り、国の定める法律の網をくぐることはできても、自身を貫く生
命の法には、勝てません。現代人の錯覚は、この生命の法を見失い、権力や財力や名声といった

ものに、人生の目的と帰結を求めていることにあるといえましょう。

⑨ 遙散諸物ようさんしよぶつについて

花や香や、飾りを、世界に散らすという姿は、満天の星の輝きとか、夏の夜空の花火の絢爛けんらんさを思い浮かべます。

どんな人でも、生命のなかに、多くの宝をもっている。尊いものをたくさんもっている。その人間としての価値・特質・才能を、存分に発揮し、輝かせている人の姿といえないでしょうか。しかし、人は、輝くものを自分以外の外に、他人にあると錯覚しがちです。自分自身のなかに、財宝たからがあることを知り、あらわしていくことを教えているといえます。

⑩ 十方じつぱう通同について

十方の世界が、ずっと通じて、少しも不自由がないということですが、ここにいう自由とは、ほかならぬ「生命の自由」を指すものと考えられます。なにをしていますが、少しも束縛がない。自然と、自由自在な振舞いになっている。物心ともに、幸福まんきつを満喫し、堂々と栄光の人生かっほを闊歩くわふしているという姿です。

以上、十神力からみた、人間観といったものの、私なりの、大胆な見解を述べました。多少、身勝手な解釈かもしれませんが、一個の人間として、どれだけ、生命を躍動させ、人に波動を与え、社会に貢献していくかを、つまりその人間生命の偉大な可能性を、誇張しすぎるほどの表現で説こうとしたものではないか、という私なりの見解を述べてみたしだいです。

ただ、はっきりいえることは、神力といつても、人間生命の力であり、内より湧現し、人生や社会を変革していく波動であることは、日蓮大聖人の御書にも明確です。一人の偉大な仏法を身につけた誠意ある人柄というものが、万人の胸中に、新たな希望の灯を点じていく原理を、十神力は示しているであろうことは、法華経を生命の哲理としてみるとき容易にうなずけると思います。

家庭を考える 〈妙莊嚴王の話〉



父王の前で神通變化を現じた二人の王子

法華経は、全部で二十八章から成っていますが、その終わってから二番目の章に、妙莊嚴王という一人の王にまつわる話が出ています。正式には、「妙莊嚴王本事品」と呼ばれているものです。

およそ、次のような話です。

はるかな往古に仏がいた。その名を雲雷音宿王華智仏といい、その国を光明莊嚴といった。この仏のいた時代に、一人の王がいて、妙莊嚴王といった。この二人の息子は、長い間、菩薩の修行に励み、大いなる神力と福德、秀でた知恵とを体得していた。あるときは布施を行じ、ある時は禪定を修するというように、各種の修行や三昧に通達していた。

ときに、その仏は、妙莊嚴王を仏道に引導してあげたいと思い、また多くの迷える人々を憐れ

んで、法華經を説いたのだった。これを知った浄蔵・浄眼の二人は、母のもとに行き、手を合わせて願った。

「願わくば、母上、雲雷音宿王華智仏のところへ、ご参詣ください。私たちも一緒にお供して、仏さまに親近し、供養し、礼拝したいと思ひます。仏さまは、いま、多くの人々のために法華經を説いておられるということです。聞きにまいりましょう」

すると、母は息子たちに言うのだった。

「おまえたちの父上は、外道を信じており、深く婆羅門の法に熱中しています。あなたがた二人で、お父さんのもとに行き、そのことを話して一緒に誘ってあげなさい」

浄蔵・浄眼は手を合わせて、母に言うのだった。

「私たちは法王ともいふべき仏さまの弟子になっているのに、どうしてこのような邪道の家に生まれてしまったのでしょうか」

母は一計を案じて、息子たちに語った。

「あなたたちが、父上のことを悲しく思うならば、神通變化を父上の前で現じて見せてごらんなさい。もし、ごらんになれば、父上の心も清浄になり、あるいは、私たちが仏のもとへ行くことを賛同してくださるかもしれませんよ」

そこで二人の息子は、父を深く思う心から、空中に躍りあがると、さまざまな神變を現じた。空中を行くかと思えば、とどまり、すわるかと思えば、臥すといったように。身の上から水を出

すかと思えば、身の下から火を出し、次は逆に、身の下から水を出すかと思えば、身の上から火を出すといったぐあいに。

そうかと思えば、大きな身体となつて大空に満ちるばかりになり、と思つたら、また小さくなり、小さくなつたと思つたら大きくなる。そして、空中から消えてしまつたかと思うと、突如、大地の上に現われ、水のように大地に入ってしまったかと思えば、今度は、大地を歩くような調子で水の上を歩いている、といったようすであつた。このような種々の神通変化を現ずることによつて、父王の心を浄め、仏を信じさせようとしたのであつた。

父は息子たちの、まつたく素晴らしい神通力に驚嘆し、いまだかつてないほど大喜びを示した。「おまえたちの師匠は、いったい誰なのか、誰の弟子になつたのか」

「父上、かの雲雷音宿王華智仏が、ただいま七宝菩提樹の下の法座の上にいらっしゃつて、一切世間の大衆のために、広く法華経を説いておられます。その方こそ、私たちの師匠です。私たちは、その仏さまの弟子なのです」

「わしは、おまえたちの師匠に会いたくなつた。一緒に連れて行ってはくれまいか」

そろつて出家した国王一家

そこで、二人の息子は空中から降りると、母のところに行つて、合掌して話すのだった。「父王が今、私たちの心を理解してくださつて、無上の正しい道を求める心を起こされていま

す。私たちは父上のために仏道を求めようと思います。どうか母上、私たちが、仏さまのもとで出家して修行の道に入ることをお許しください」

二人は、重ねてその志を述べようと思い、母に詩を捧げて願った。

母よわれらを願わくば

出家沙門となしたまえ

諸仏に値うは稀なれば

仏につかえて学びなん

かの優曇華の花よりも

仏に値うは難しという

世の諸難はのがれ難し

出家の願い許したまえ

これを聞くと、母はうなずいた。ここで二人の子どもは次のように父母に語るのであった。

「ああ、なんと喜ばしいことでしょう。父上、母上、それでは雲雷音宿王華智仏のもとに参詣して、親しくご供養をしてください。なぜならば、仏に巡り会うことほど、むずかしいことはないからです。かの三千年に一度咲くという優曇華の花のように、あるいは一眼の亀が浮木の穴にあることのように、それはむずかしいからです。」

ところが、私たちは過去世からの福運に満ちた因縁が深かったために、仏法に巡り会える時代

に生まれることができました。そして、父上、母上のお許しを得て、出家することもできたのです。諸仏にお会いすることはむずかしく、法華經の説かれる時に会おうことも、またむずかしい」

このようにして妙莊嚴王は群臣を引きつれて、淨徳夫人は女官たちとともに、そして二人の王子も多くの人々をともなつて仏のもとに行くことができた。すると仏は、王のために法を説き、王は歡喜して多くの供養を捧げた。

そこで雲雷音宿王華智仏は、人々に向かつて言うのであった。

「みなさん、この妙莊嚴王が、私の前で合掌しているのを見ることができるよう。この王はやがて、私の説く仏法によつて、比丘となり、仏道修行に励んで、成仏することができるよう。その時の名を娑羅樹王と号し、国を大光といい、劫を大高王というはずです。その娑羅樹王仏のもとに、無量の菩薩たちや声聞が集まり、その国は平等で正しく治められるでしょう。この供養の功德は、このように偉大なものであるのです」

王は即時に、国を弟に譲り、王と夫人と二人の息子と、その多くの眷属とが、仏法を求めて出家し、修行の道に入った。王は出家してから、八万四千歳という永い間、つねに精進して妙法蓮華經を修行し、清淨な功德に満ちあふれることができたのである。

そして、次のように仏にその喜びを語った。

「この私の二人の子どもは、すでに仏道を修していて、神通變化をもつて、私の邪心を転じ、仏

法に帰依させ、仏にお会いすることができた。この二人の子は、わが善知識である。私を導くために、わが家に生まれてきたのです」

仏もまた、「あなたの言うとおりだ。善知識は、人を導いて仏道を求める心を起こさせる。二人の子どもは、すでに数多くの仏を供養し、諸仏のところで法華經を受持してきた者である」と述べたのです。

この妙莊嚴王とは、今の華德菩薩です。淨徳夫人とは、妙音菩薩、二人の息子の淨蔵・淨眼は、藥王菩薩と藥上菩薩です。

大要、以上のような説法が行なわれたのです。

じつは、この話には、もう一つの裏があります。裏があるというのも、変な言い方ですが、この四人には、次のような過去世の因縁があるということになっています。

昔、仏道を求める四人の道士がいたが、修行をやりやすくするために、一人が炊事、雑用などの陰の働きをし、他の三人は、そうした雑事に煩わされず、仏道修行に専念した。その三人は仏道を得たが、残る一人は修行をしなかったため、仏道を得ることができなかった。しかし、陰の力の功德により、つねに国王に生まれることができ、それが妙莊嚴王に生まれ、他の三人が、淨徳夫人、淨蔵、淨眼に生まれて、王を仏道に導き、過去世の恩を返した、というもののなのです。

妙莊嚴王一家は現代の家庭像でもある

ところで、なぜこのような故事が、法華經のなかに織り込まれているのか。いったい、これによつて何を教えようとしているのか――。

法華經の偉大さを教え、この經を弘^{ひろ}める人――これを善知識といっているのですが――の使命を訴え、その功德を教えているのだと、文面に沿った、ひととおりの説明はつきます。また、ここに登場する四人が、過去世に、ともに仏道修行する仲間であつたという裏話は、陰で修行を助ける人も、等しく報われるという一種の平等觀として受けとれるかもしれません。

しかし、ここでは、もう少し異なつた角度から見てみたいと、私は思います。

なぜ、仏の教えを信仰していないのが、父・妙莊嚴王なのか。教化の主役を演ずるのが息子たちなのか、と考へてみたいのです。ここに、一つの家庭のなかにおける、父と母、そして子ども、それぞれの物の見方と立場の違いが、象徴的に描かれているとみるのも、一つの見方ではないでしょうか。そこに、法華經の人間觀察の鋭さを、私はみます。

一般的に、父親というものは、いわば一家においては、旧世代の象徴です。古い觀念のなかに縛^{とら}られがちで、どうしても固定化した考へ方に捉^{とら}われやすい。

その対極にあるのが、子どもです。子どもというものは、時代・社会の最先端を見つめている。古い觀念や慣習に捉^{とら}われない新鮮な目をもっています。

したがって、こうした父と子の間で、新旧の対立、相剋^{さうこく}が生まれるのは自然であり、避けがたいものがある、といえます。

そのさい、母親の存在が、重要な意味を帯びてくる。たいていの場合、母親は、両者の中間に位置する場合が多いものです。父に与^よするでもなく、また子どもの考えにそのまま従うということとも少ない。母親は、つねに家庭の平和を願ひ、その原点に立って行動するからです。つまり、もっとも現実的な立場から、ものを見、対処していく賢明な生活の知恵をもつのが、母親といえましょう。

こうして考えてみると、妙莊嚴王品に登場する四人の姿は、そのまま、この現代の家庭像に、その父と母、子どもたちの姿に似ているようです。家庭像は、昔と現代では、相当変わっていると思うのに、その真実なものは、変わらないことがわかります。

ところで浄蔵・浄眼の二人の息子は、そうではなかった。仏の真実の教えを父に示しますが、それは、たんなる言葉による説法ではありません。種々の神変によって示したということは、口先の論議ではなく、その真実の教えを自らの生命の輝きとして、その振舞いのうえに表わして、その実証を示したということです。

私もかつて、神変などと、ずいぶん迷信的だな、などと思ったことがありますが、それはあくまでも譬喩であり、仏法はそれを通じて、何ものかを説こうとしていることがわかりました。このことを池田会長は、一言のもとに「自身の変革ということだ」と教えてくれたことがありました。

つまり、二人の浄^{きよ}らかな生命の輝きが、妙莊嚴王の命^{きよ}を浄めたのです。

いかなる雄弁な理論・論議より、一つの確かな実証に勝るものはありません。その真実の前には、いかに頑固な父親も勝てないはずで、親子の口論の前に、この「論より証拠」をすすめたと思います。地についた主張であり、それが自らの人間的な成長の源泉となる思想ならば、必ず、いつか、相手も認める日がくるにちがいありません。生命の触れ合いのなかで、おのずと相手を感応していけるようなものこそ、本物ではないでしょうか。

また、次のような見方も、できるのではないかと思うのです。家庭の変革こそ、一切の変革の原点であるということです。

どのような革命の思想・実践も、それが真実に新しい歴史を創造していくものであるならば、その変革の息吹きと、新旧の思想の相剋は、まず、家庭という、もっとも身近な世界に現われてくるにちがいない。家庭こそ、もっとも小さな社会の縮図だからです。

一個の人間や、一個の家庭を素通りした社会革命の思想は、しょせん、根源的な革命とは言いがたい。革命が根源的であればあるほど、この社会をつくっている基幹である、人間、家庭にこそ、その新しい波のうねりが現われるはずで、いや、もっと正確に言えば、その基底部から、まず変革を起こさなければならぬのです。

世の中が平和で幸福であるかどうか、その指標もまず、もっとも身近な生活の場である家庭にあるといえます。

ゲーテに、「王様であろうと、百姓であろうと、自己の家庭で平和を見いだす者が、いちばん

幸福な人間である」という言葉があります。じつに、真実を衝^ついている、と思えてなりません。幸福と平和の原点は、家庭にあることを忘れてはならないでしょう。これは、あまりにも当然すぎることです。いま一度、「わが家」を見つめ直す必要はないでしょうか。

あとがき

私が、今回、法華經に関する著作を手がけることになったのは、現代にどうしても、この「生命の宝典」ともいうべき精神遺産を復活する必要があると痛感したからです。

しかし、法華經は、二十八品ぼんにも及ぶ、かなり膨大ぼうだいなものです。私は、この仕事に取り組んでいるうち、大海に乗り出した、一艘いっそうの船のような感じを抱いたものです。当然、私一人の努力でなしうるものではない。七百年前の日蓮大聖人の哲理の光明、そして、戸田前会長、池田会長の、法華經を現代に蘇生そせいさせた、思索の光を灯台として、私なりの航行を続けたのです。

そこで、私自身、法華經という大海に再び確めたものは、溢あふれんばかりの「生命」の息づきであり、生命力を満々とたたえつつ、現代人を、そして現代文明をも、生き生きと蘇生そせいさせずにおかない哲学の光波こうはであったといえましょう。

ところで、いちおう、お断わりしておきたいことは、この本では、法華經について、あえて歴

史学的、文献学的、考証学的方法はとっておりません。こうしたことも大切なことですが、法華經そのものに迫る別の方法もあるはずです。

日蓮大聖人は、法華經に対して「いちいちもんもんこ一文文是れ真仏しんぶつなり」という姿勢で臨のぞまれました。そここそ私の立脚点を置いたからなのです。また、法華經を過去の經典としてではなく、現在と未来を照らす明鏡めいきやうとして、とらえたかったからです。

この本は、法華經のいわば入門書です。ですから、なるべく平易に、私の体験などを織りまぜながら書きました。むろん、この一書に法華經のすべてを語り尽くすことは不可能でしょう。しかし、なんとか法華經に特徴的な内容を織り込むことによって、全体を把握はあくしてもらうように心がけたつもりです。

この間、池田会長の温かい励ましがなかったならば、本書はできなかったことでしょう。また、祥伝社編集部の方々の根気づよい勧めすすめがあつて、はじめて出版することができたと思つています。ここに、すべての方々に、厚く感謝申し上げますとともに、この一書が、読者の皆さんにとつて、今日を生き、明日に生きるうえに、なんらかの参考になれば、これ以上うれしいことはありません。また、現代の危機の波濤はとうの向こうにのぞく、一筋の灯明として、法華經に新しい価値を見いだしていただけたならば、望外の幸せです。

最後に、日蓮正宗にちれんしょうしゅう教学部長であられる阿部信雄あべしんのう先生もご覧くださり、心からなる賛意をいただいたことに対し、深く感謝申し上げるものです。

昭和四十九年十一月

原島はらしま 嵩たかし



《監修者・略歴》

池田大作（いけだ だいさく）

昭和三年、東京に生まれる。富士短期大学経済学科卒。現在、創価学会会長。日蓮正宗総講師。創価大学・創価学園創立者。

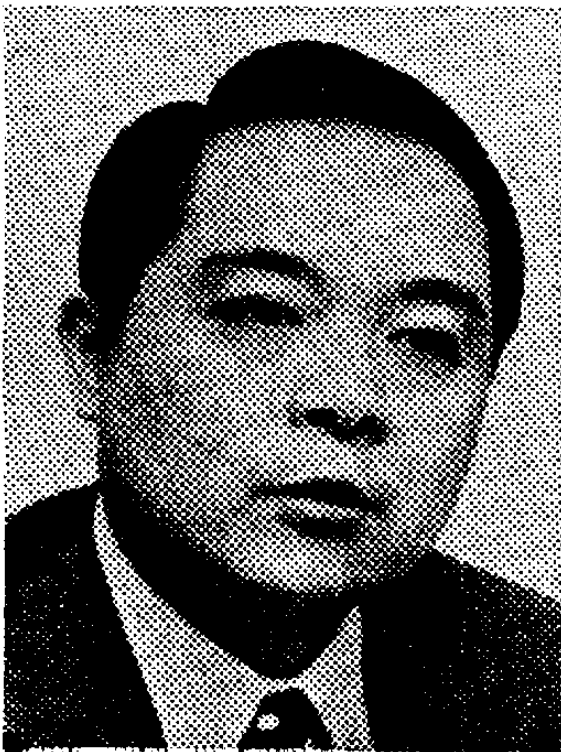
主な著書『人間革命』（一〜八巻）『生命を語る』（全三巻）『私の釈尊観』『私の仏教観』『私の人生観』『私の人生随想』『婦人抄』『立正安国論講義』『御義口伝講義』他多数。

《著者・略歴》

原島 嵩（はらしま たかし）

昭和十三年、東京に生まれる。早稲田大学商学部を卒業。現在、創価学会総務、同教学部長（教学部師範）。聖教新聞社論説主幹。創価大学理事。（財）東洋哲学研究所理事。

主な著書『生命哲学概論』『創価学会』『欲望と生命』（共著）



生命のドラマ—法 華 経

昭和49年12月25日 初版第1刷発行

昭和49年12月28日 第2刷発行

監修者	いけ だ だい さく 池 田 大 作
著 者	はら しま たかし 原 島 嵩
発行者	黒 崎 勇
発行所	しょう でん しゃ 祥 伝 社

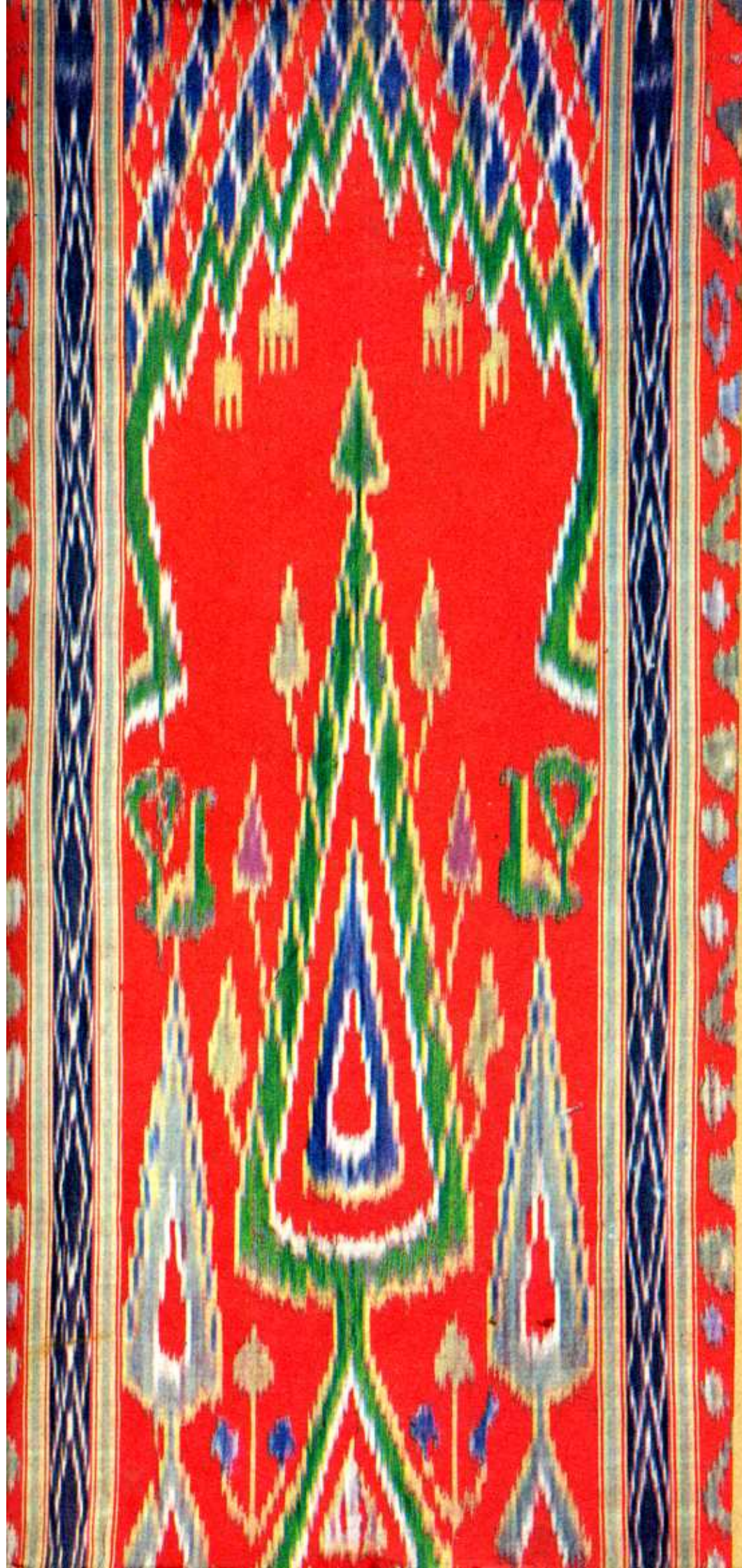
東京都千代田区神田神保町 3-6-5

☎東京 03 (265) 2081 (代表) 〒101

発 売	小 学 館
印 刷	堀 内 印 刷
製 本	ナショナル製本

万一、落丁・乱丁がありました節は、お取りかえします。

Printed in Japan. © 1974 TAKASHI HARASHIMA



¥750

祥伝社